ストライク・ザ・ブラッド1
聖者の右腕

〝第四真祖〟――それは伝説の中にしか存在しないはずの世界最強の吸血鬼。十二体もの眷獣を従え、災厄を撒き散らすといわれる幻の吸血鬼が、日本に出現したという。

その〝第四真祖〟監視と抹殺のため、政府・獅子王機関は〝剣巫〟と呼ばれる攻魔師の派遣を決定。しかしなぜか監視役として選ばれたのは、見習い〝剣巫〟の少女、姫柊雪菜だった。

対真祖用の最強の霊槍を携え、魔族特区〝絃神市〟を訪れる雪菜。そこで彼女が遭遇した〝第四真祖〟暁古城の正体とは――！

洋上に浮かぶ常夏の人工島で繰り広げられる、学園アクションファンタジー！

み-3-30

ストライク・ザ・ブラッド1
聖者の右腕

三雲岳斗

電撃文庫
¥570

9784048702676
1920193005707

ISBN978-4-04-870267-6
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 570 円
※消費税が別に加算されます

三雲岳斗

大分県生まれ横浜市在住。吸血鬼も好きですが、楽器ケースを背負った女子がやけに好きです。たぶん女子の楽器ケースには、夢や希望がたくさん詰まってると思う。楽器ケースを背負った男はべつにどうでもいいです。

【電撃文庫作品】

コールド・ゲヘナ①～④
コールド・ゲヘナ あんぷらぐど
レベリオン 全5巻
i.d. Ⅰ～Ⅲ
道士さまといっしょ
道士さまにおねがい
アスラクライン①～⑭
ストライク・ザ・ブラッド1 聖者の右腕

イラスト:マニャ子

佐賀県出身の神奈川県在住。フリーでイラストレーターやってます。最近は開封すらしていないゲームソフトを横目に絵を描いています。趣味はゲームと昼寝です。

カバー／加藤製版印刷

電撃文庫 MAGAZINE

電撃文庫が贈る
最強エンタテインメントマガジン!

偶数月10日発売

最新情報はこちら! http://dengekibunko.dengeki.com/

電撃 DENGEKI BUNKO 文庫

世界最強の吸血鬼を監視せよ!

〝第四真祖〟と呼ばれる少年と、
彼を抹殺するために派遣されてきた少女。
二人の出会いが、やがて世界の運命を変える——!

電撃文庫
¥
570

DVD付き限定版

アニメ『とある魔術の禁書目録』ノ全テ

featuring アニメ『とある科学の超電磁砲』

これを読めばアニメ第一期『禁書目録』の全てが分かる! キャラ&ストーリー紹介だけでなく、アニメでは追い切れなかった設定ページも充実。さらにアニメ『とある科学の超電磁砲』のキャラ&ストーリー紹介も収録の、まさに決定版!

初回限定版はDVD付き! (約30分)
- 『とある魔術の禁書目録』第一話
- 『とある魔術の禁書目録Ⅱ』PV
- PSPゲーム『とある魔術の禁書目録』PV
- OVA『とある科学の超電磁砲』PV

電撃文庫編集部 編/B6判/176ページ/
価格:1,260円(税込)

『デュラララ!!ノ全テ』

美麗なイラストギャラリー、キャストインタビュー付きのキャラファイル、アニメスタッフの解説入りストーリーガイドや書き下ろし短編も収録された超豪華版!

電撃文庫編集部 編/B5判/
定価:1,680円(税込)

電撃の単行本

本当に大切だった人、憶えていたいですか、
それとも忘れたいですか。

終わる世界のアルバム

著/杉井 光　四六判ハードカバー/定価:1,470円(税込)　**発売中**

友達すらつくれない僕にも、
好きな人ができた。

ぼっちーズ

著/入間人間　四六判ハードカバー/定価:1,470円(税込)　**発売中**

※定価、価格は税込(5%)です。

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

1

聖者の右腕

三雲岳斗

illustration マニャ子

暁古城［あかつき・こじょう］
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

姫柊雪菜
［ひめらぎゆきな］
『剣巫』Swords - Shaman
獅子王機関の可憐な監視者

藍羽浅葱［あいばあさぎ］
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生

矢瀬基樹［やぜもとき］
『親友？』Buddy or...
陽気な級友、あるいは双貌の道化師

暁凪沙
［あかつきなぎさ］
『真祖の妹』Sister of Primogenitor
天真爛漫な騒々しき賢妹

ルードルフ・オイスタッハ
『殲教師』Armed Apostle
異邦より来たりし武装祓魔師
アスタルテ
『人工生命体』Homunculus
眷獣を宿した無垢なる人形

Contents

序章 Intro 11

第一章 魔族特区 Demon Sanctuary 29

第二章 監視者のいる風景 Here Comes The Watchdog 103

第三章 嘆きの剣巫 She's Crying 159

第四章 聖者の右腕 The Right Arm Of The Saint 221

終章 Outro 287

あとがき 306

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

ストライク・ザ・ブラッド

聖者の右腕 1

序章

真夏の街

その都市は紘神島と呼ばれていた。太平洋上に浮かぶ小さな島。カーボンファイバーと樹脂と金属と、魔術によって造られた人工島だ。

頭上に浮かぶ白い月が、街を取り巻く海を冷たく照らしている。

時刻はすでに真夜中に近く、間もなく日付が変わろうとしている。

明かりの消えたビルの窓ガラスは、街灯の光を反射して、ひび割れた魔法の鏡のような姿をさらしている。駅前の繁華街は、きらびやかなネオンの海。深夜営業のファミレス。カラオケ。コンビニエンスストア。路上にはまだ若者たちがあふれている。

無邪気に騒ぎ、笑いながら、彼らは時折、他愛もない噂について語り合う。

退屈を紛らわすだけの意味のない話題。ありふれた都市伝説。第四真祖。この街のどこかにいるという吸血鬼の噂話を。

真剣な口調で男が言う。第四真祖は不死にして不滅。一切の血族同胞を持たず、支配を望まず、ただ災厄の化身たる十二の眷獣を従え、人の血を啜り、殺戮し、破壊する。世界の理から外れた冷酷非情な吸血鬼なのだと。過去に多くの都市を滅ぼした化け物なのだと。

退屈そうな表情で女が言う。

――ふうん、それで？

絃神島・魔族特区。この街では、化け物など珍しくもない。
たとえそれが世界最強の吸血鬼だとしても。

十

そのころ噂の第四真祖は、住宅街へと続く歩道を歩いていた。
彼は白いパーカーのフードを被り、コンビニ袋をぶら下げた若い男の姿をしている
年齢は十五、六歳というあたり。ただの高校生のように見えるし、事実、彼は高校生だった。
まるで狼の体毛のように、前髪の色素がやや薄いが、それを含めても特別に目立つところはない　どこにでもいそうな、ごく普通の少年だ。
疲れているわけではないのだろうが、彼の足取りは気怠げだった。コンビニ袋に入っているのは、限定物のアイスが二個。夜中に突然アイスが食べたいと言い出した妹あたりに頼まれて、近所のコンビニまで買い物に出かけた男子高校生、といった雰囲気だ。
路上には、少年以外にも通行人がいる。
色鮮やかな浴衣を着た、若い女の二人連れだ。
彼女たちは、少年よりも少しだけ年上なのだろう。学生の雰囲気をまだ残しているが、高校生にはない色香がある。時折のぞく横顔も、化粧は濃いが、なかなかの美人だ。

少年は、一人から離れて歩いている。だが、慣れない下駄履きのせいか、彼女たちの歩みは遅い。互いの距離は次第に詰まっていく。夜風に乗って彼女たちの香水の匂いが漂ってくる。

少年の前で、小さな悲鳴が上がる。

彼女たちの一人が段差に躓き、バランスを崩して転倒したのだ。浴衣の裾が大きくはだけ、尻餅をついた女の太腿までがあらわになる。

少年は、無意識に立ち止まってそれを眺める。

しかし彼の視線が吸い寄せられていたのは、はだけた浴衣の裾ではなく、彼女たちの首筋のほうだった。浴衣の襟と、結い上げた髪の間にのぞく、細い首筋。白い素肌。

薄暗い街灯の下でも、青く透ける血管の位置がはっきりとわかる。

少年は、息を止めてそれを見つめている。

強烈な渇きに襲われたように、彼は一度だけ小さく喉を鳴らす。右手で目元を覆ったのは、赤く染まった虹彩を隠すためか。

妖気にも似た異様な気配が、彼の全身から静かに放たれる。声を上げて笑っている女たちは、まだそれに気づかない。

「……っ！」

そして次の瞬間、少年は、自分の鼻先を押さえて、低く溜息をついた。

彼はそのまま、何事もなかったかのように再び歩き出す。

その指先から深紅の液体がこぼれる。口腔の中に、生暖かい感覚が広がっていく。鼻血。甘く金臭い、血の匂い。

噴き出した鼻血を乱暴に拭いながら、少年は足早にその場を立ち去っていく。彼の背後では、女たちの笑い声が今も続いている。

彼らの頭上には真夏の月、生暖かく湿った海風が、街の中を吹き抜けていく。

「……勘弁してくれ」

誰に言うともなく、少年は呟く。鼻血はまだ止まらない。

十

真夏の森 ―

深夜の神社境内を、煌々と燃える篝火が照らしている。拝殿に射しこんでいるのは淡い月光。季節を忘れるほどに空気が冷たく張り詰めているのは、社を包む結界のせいだろう。

騒がしかった虫たちの鳴き声も、今はもうほとんど聞こえない。

少女は無言で、広い拝殿の中央に座っている

まだ幼さを残しているが、綺麗な顔立ちの娘である。

細身で華奢だが、儚げな印象はない。むしろ鍛えられた刃のような、しなやかな強靭さを

感じさせる少女だ。そんなふうに思えるのは、生真面目そうに引き結んだ唇と、彼女の瞳に宿る強い光のせいかもしれないが。

少女が身につけているのは、関西にある私立中学の制服。

神道系の名門校だが、そこが獅子王機関の下部組織だと知る者は多くない。

拝殿には二人の先客がいる。

御簾に遮られて姿は見えない。しかし彼らの正体は、少女にも事前に知らされている。

〝三聖〟と呼ばれる、獅子王機関の長老たちである。

いずれも最高位の霊能力者、あるいは魔術師でありながら、彼らを取り巻く気配は静謐で、威圧感がまるでない。そのことが逆に恐ろしい。

少女は制服の袖口を、無意識に強く握りしめている。そして

「名乗りなさい」

御簾の向こう側から声が聞こえた。口調は厳かだが、冷たさは感じない。想像していたよりも若い声だった。どこか笑いを含んだ女の声だ。

「姫柊です。姫柊雪菜」

一瞬遅れて、少女は答えた。緊張でかすかに声が震えた。だが、御簾の向こうにいる女は、構わずに質問を続けてくる。

「歳は？」

「あと四カ月で十五になります」
「そう……姫柊雪菜。修行を始めたのは、七年前ね。あなたが七歳の誕生日を迎えてすぐ……雪が降る寒い夜に、たった一人で機関に連れてこられた。その日のことを覚えてる？」
御簾の向こう側の女が、突然、独り言のような口調で訊いてきた。雪菜の背筋が冷たくなる。前もって調べておいたわけではないのだろう。雪菜の記憶を読んだのだ。張り巡らせておいた雪菜の精神防壁をものともしない、圧倒的な超感覚知覚だった。
「いえ……曖昧な記憶しかありません」
雪菜は小さく首を振った。その言葉は事実ではなかったし、相手もそれに気づいたはずだ。しかし女はなにも言わなかった。代わりに彼女は質問を続ける。
「成績が良いそうね。縁堂が褒めていたわ」
「ありがとうございます」
「縁堂とは、何度か一緒に仕事をしたことがあります。非常に優秀な攻魔師でした。あなたの精神防壁の術式には、彼女と同じ癖がありますね。縁堂には、ほかになにを習いましたか？」
「呪術全般と巫術、あとは幻術と禍祓いを」
「魔術は？　縁藤の専門はそちら方面のはずですが」
「大陸系のものについては一通り。西洋魔術は基礎理論だけです」
「魔族との戦闘経験は？」

「模擬戦闘なら養成所で集中訓練を二度ほど。実戦はありません」
「武術は？」
「使えます。いちおうは」
「そう？　だと良いけれど」
くす、と御簾の向こうで、女が笑う気配があった。
「――っ!?」
その瞬間、爆発的に膨れ上がる殺気を感知して、雪菜は跳んだ。
板張りの床を蹴りつけて、そのまま後方に一回転して着地する。頭で考えての行動ではない。危険を察知した肉体が、無意識に動いたのだ。
大気を裂いて振り下ろされた刃が、直前まで雪菜の座っていた場所を駆け抜けた。
雪菜の動きが一瞬でも遅れていたら、確実に命を落としていた。真剣による本気の斬撃だ。
二体の大柄な鎧武者が、闇の中から溶け出すようにして現れる。
無骨な太刀を握った、顔のない武士。そして左右に弓を構えた、四本腕の武士。
彼らの存在は実体ではない。呪術によって生み出された式神だ。おそらくは御簾の向こうにいる三人の誰かの仕業なのだろう。しかしそれを理解する前に、雪菜は反撃に転じていた。
「響よ！」
口の中で短い呪言を唱えて掌に呪力を集中。それを式神の鎧越しに、内部へと直接叩きこむ。

鎧武者の姿は一瞬で霧散した。あとには握っていた太刀だけが残された。

式神を生み出す触媒として使われていたその太刀を、雪菜は空中でつかみ取った。二体目の鎧武者の攻撃を、奪った太刀で防御し、受け流す。そして矢を放ち終えた直後の相手を、横薙ぎに払った太刀で両断した。二体目の鎧武者も消滅する。

「これは……なんの真似ですか？」

軽く息を弾ませながら、雪菜は太刀を御簾のほうへと向けた。

これ以上、式神の相手をする気はなかった。戦闘が長引けば、力量の劣る雪菜に勝ち目はない。たとえ相手が獅子王機関の長老たちといえども、彼らが戯れを続けるつもりなら、術者を直接討たねばならない。そう判断したのだ。

まるでそれを待ちかねていたかのように、御簾の向こうから、まばらな拍手が響いた。

「ふはははは。よい判断であるな、姫柊雪菜。よく凌いだ」

満足げに笑う男の、低く野太い声が聞こえてくる。

続けて、年齢も性別もよくわからない声で、

「呪詛下箋を不得手とするも、霊視、剣術においては抜きん出た才を持つ逸材……報告書のとおり、典型的な剣巫じゃな。まずは合格と言っておこうかの」

「合格……？」

御簾の向こうから聞こえてくる長老たちの声に、雪菜はムッと眉をひそめた。

「そう。あなたが剣巫の資格を得るためには、本来ならあと四カ月間の行を修めてもらわなければなりません。ですが、事情が変わりました――座りなさい、姫柊雪菜」

最初の女の声が言った。彼女の言葉に渋々と従って、雪菜は正座に戻った。溜息をついて、太刀を置く。

「さあ、本題に入りましょう」

「はい」

「良い返事です。まずは、これを」

その言葉とともに、御簾の隙間からなにかが現れた。それは一羽の蝶だった。

音もなく羽ばたいて雪菜の前に着地すると、蝶は一枚の写真へと変わる。

写っていたのは、高校の制服を着た一人の男子生徒。友人たちと談笑している姿を、誰かが隠し撮りしたものらしい。無防備で隙だらけの表情だ。

「この写真は？」

「暁古城というのが彼の名前です。知っていますか？」

「いえ」

雪菜は正直に首を振る。実際、初めて目にする顔だった。その答えを最初から予想していたのだろう。女は、なんの感慨もない口調でさらに訊いてくる。

「彼のことを、どう思いますか？」

「え？」

突然の質問に、雪菜は戸惑う。

「写真だけでは正確なことはわかりませんが、おそらく武術に関しては完全な素人か、初心者の域だと思われます。特に危険な呪物を身につけている様子もありませんし、撮影者の存在を察知している気配もありません」

「いえ、そういうことではなく、あなたが彼をどう思うかと訊いているのです。つまり、彼はあなたの好みですか？」

「は、はい？　なにを……？」

「たとえば顔の良し悪しだとか、見た目の好き嫌いの話です。どうですか？」

「あの……わたしをからかってるんですか？」

不機嫌な口調で雪菜は訊き返す。長老たちの真意はわからないが、彼らの場違いな質問には悪意を感じる。床に置いた太刀に思わず手が伸びそうになる。

雪菜のそんな反応に、御簾の向こう側の女は落胆の息を吐き、

「では、第四真祖という言葉に聞き覚えは、姫柊雪菜？」

さらに唐突な彼女の質問に、雪菜は小さく息を呑んだ。まともな攻魔師ならほとんど誰もが、その名前を聞くだけで、しばし沈黙することになる。

「焔光の夜伯のことですか？　十二の眷獣を従える、四番目の真祖だと――」

「そのとおり。一切の血族同胞を持たない、唯一孤高にして最強の吸血鬼です」

冷静な女の声が拝殿に響く。

第四真祖〝焔光の夜伯〟――

魔族に関わりを持つ者であれば、その名を知らないということはあり得ない。

なぜならそれは、世界最強の吸血鬼の肩書きだからだ。

自らそう名乗っているわけではないが、少なくとも世間はそのように認識している。そして敵対しているはずの者たちでさえ、あえてそれを否定しようとはしない。第四真祖とはそのような存在だ。

「ですが、第四真祖は実在しないと聞いています。ただの都市伝説の類だと」

雪菜の言葉に、女が首を振る気配があった。

真祖とは、闇の血族を統べる帝王。もっとも古く、もっとも強大な魔力を備えた〝始まりの吸血鬼〟だ。彼らは、自らの同族である数千数万もの軍勢を従え、二つの大陸にそれぞれが、自治領である夜の帝国を築いている。

「たしかに、公に存在が認められている真祖は二名だけです。欧州を支配する〝忘却の戦王〟、西アジアの盟主〝滅びの瞳〟、そして南北アメリカを統べる〝混沌の皇女〟――それに対して第四真祖は、自らの血族を持たず、ゆえに領地も持たない」

「然様。だが、それだけでは第四真祖が存在しない、という証明にはならぬのである」

女の言葉を引き継いで、男が荒っぽい口調で告げる。続けて、もう一人の長老の声も。
「おぬし、今年の春に、京都で起きた爆発事故のことを覚えておるかえ？」
「……え？」
「四年前のローマの列車事故、それに中国での都市消失事件も、マンハッタンの海底トンネル爆破事件もあったの。古いところではシドニーの大火災も」
「まさか……それらすべてが第四真祖の仕業だと？」
雪菜が表情を引き攣らせた。長老が何気なく口にしたのは、それぞれ大量の死傷者を出した凶悪な大規模テロ事件だった。いずれも犯人は不明だと報道されている。だが、それらが真祖がらみの事件なのだとしたら、その程度の被害で済んだのは、むしろ幸運だったとさえいえる。
「あらゆる状況証拠が、四番目の真祖の実在を示しています」
青ざめる雪菜に、最初の女が告げる。
「彼らは歴史の転換点に必ず現れ、世界に虐殺と大破壊をもたらしてきました。しかし問題はそれだけではありません。第四真祖の存在は、この世界の秩序と安定を乱します。その理由は、わかりますね？」
「はい」
雪菜はぎこちなくうなずいた。
吸血という種族特性と、高い教養知性を備えた彼ら吸血鬼は、常に人類に敵対する存在とは

限らない。彼らの多くは人間社会に溶けこんで暮らすことを好み、人類という種族全体を敵に回すことをこれまで慎重に避けてきた。

さらに各国政府と真祖たちの間には、無差別の吸血行為を禁止する条約が結ばれ、表向きは平和的な共存が実現しているようにも見える。だがそれは、三つの夜の帝国の力関係が、極めて微妙なバランスの上に成立しているからだ。

「真祖たちが聖域条約の締結に応じたのは、ここ数十年もの間、真祖同士が互いを牽制し合うこすくみの状態が続いていたからです。彼らは常に自分たち以外の真祖の存在に怯え、人類を敵に回す余裕がなかったのです」

「はい」

「ですが、もし彼らと同等の力を持つ四番目の真祖が出現したら、その均衡は呆気なく崩れてしまうでしょう。最悪、人類を巻きこんだ大規模な戦争にもなりかねません」

「第四真祖の居場所は、わかっているのですか？」

雪菜が緊張した声音で訊く。なぜか、ひどく嫌な予感がした。

「ええ。まだ確認はとれていませんが、ほぼ間違いないでしょう」

「彼は、どちらに？」

「東京都紘神市　人工島の〝魔族特区〟です」

女の言葉に、雪菜はしばし絶句した。

「第四真祖が、日本に……!?」

「それが今日あなたをここに呼んだ理由です、姫柊雪菜。獅子王機関〝三聖〟の名において、あなたを第四真祖の監視役に命じます」

静かだが、有無を言わさぬ口調で女が告げる。

「わたしが……第四真祖の監視役を?」

「ええ。そして、もしあなたが監視対象を危険な存在だと判断した場合、全力を持ってこれを抹殺してください」

「抹殺……!?」

雪菜は動揺して言葉を失った。

第四真祖に対する恐怖はある。それほどの大任が、自分に務まるだろうかという不安もだ。

これまでの修行に手を抜いたことはないが、しょせん雪菜は見習いの身。本気で第四真祖を倒せると思うほど自惚れてはいない。なにしろ真祖とは、一国の軍隊に匹敵する戦闘力を持つといわれる正真正銘の怪物なのだから。

だが、誰かがそれをやらなければ、いずれ大勢の人々が災厄に見舞われることになるのだ。

「受け取りなさい、姫柊雪菜」

巻き上げた御簾の隙間から、女がなにかを差し出した。篝火に照らされ、闇の中に浮かび上がるものは、一振りの銀の槍。雪菜はその名前を知っていた。

「これは……」

「七式突撃降魔機槍〝シュネーヴァルツァー〟です。銘は〝雪霞狼〟」

知っていますね、という女の問いかけに、雪菜は頼りなくうなずいた。

七式突撃降魔機槍は、特殊能力を持つ魔族に対抗するために、獅子王機関が開発した武器だった。高度な金属精錬技術で造られたその穂先は、最新鋭の戦闘機にも似た流麗なシルエットを持ち、まさしく機槍の呼び名に相応しい。

だが、武器の核として古代の宝槍を使用しているため量産がきかず、世界に三本しか存在しないともいわれていた。いずれにせよ個人レベルで扱える中では間違いなく最強と言い切れる、獅子王機関の秘奥兵器である。

「これを……わたしに？」

差し出された槍を受け取りながら、雪菜は信じられないという表情で訊いた。

しかし女は、むしろ重苦しげに息を吐く。

「真祖が相手ならば、もっと強力な装備を与えて送り出したいところですが、現状ではこれが我々に用意できる最強の武神具なのです。受け取ってくれますね」

「はい、それはもちろん……ですが」

そう言って雪菜は、困惑の表情を浮かべた。

御簾の隙間から差し出されたものは、槍だけではなかった。ビニールに包まれた新品の制服

がひと揃い、綺麗に折り畳んで手渡される。白と水色を基調にした、セーラー襟のブラウスとプリーツスカート。どうやら中学校の女子の夏服らしい。

「あの、これは？」

「制服です。あなたの身長に合わせたものを用意してもらいました」

「その……ですから、なぜ制服を？」

「あなたの監視対象が、その制服の学校の生徒だからです」

「は？」

自分がなにを言われたのかわからず、雪菜は軽く混乱する。

「え？　監視対象……第四真祖が、学生？　え？」

「私立彩海学園高等部一年B組、出席番号一番。それが第四真祖、暁古城の現在の身分です。ですから獅子王機関には、彼と穏便に接触できる人材がいないのです。ただ一人、姫柊雪菜、あなたを除いては」

「暁古城……この写真の人物が第四真祖……？　ええっ!?」

床の上に投げ出してあった写真を見下ろし、雪菜は目を丸くした。

御簾ごしに、〝聖〟の苦笑する気配が洩れてくる。そのときになって、ようやく雪菜は理解した。なぜこのような重大な任務に、雪菜のような未熟な剣巫が選ばれたのか。

「あらためて命じます、姫柊雪菜。あなたはこれより全力をもって彼に接近し、彼の行動を監

視するように。彩海学園への転校手続きは、すでに済ませておきました――以上です」

一方的にそれだけを言い残して、御簾の向こう側から長老たちの気配が消えた。

拝殿にたった一人で取り残された雪菜は、呼吸することも忘れたまま、ただ呆然と手の中の槍を凝視し続けていた。

第四真祖。転校。接触。監視。抹殺。もしかして自分は、とんでもない災厄に巻きこまれてしまったのではないか。そう思って雪菜は、我知らず小さな溜息を洩らす。

占いの類を不得手とする彼女が、やがて、その直感が正しかったことを知るのは、もう少し先の話である――

第一章
魔族特区

1

茜色に染まりかけた西の空から、強烈な陽射しが降り注いでいる。

「熱い……焼ける。焦げる。灰になる……」

午後のファミレス。窓際のテーブル席にぐったりと突っ伏して、暁古城が弱々しくうめく。

制服姿の高校生である。羽織った白いパーカーを除けば、特徴というべきものはあまりない、どこにでもいそうな男子生徒だ。それなりに造りのいい顔には気怠げな表情が浮かび、眠たげに細められた目のせいで、ふて腐れたような雰囲気になっている。

八月最後の月曜日だった。天気は快晴。外気温は人間の体温をとっくに超えており、夕焼けが広がる時間になっても、いっこうに下がる気配がない。フル稼働しているエアコンも、店の奥にいる古城の席まで冷気を届かせる余裕はないらしい。

薄っぺらいブラインドを突き抜けてくる殺人的な量の紫外線を浴びながら、古城は、テーブルに広げた問題集を気怠く睨みつけている。

「今、何時だ？」

古城の唇から洩れたのは、独り言のような呟きだった。正面の席に座っていた友人の一人が、笑いを含んだ口調で返事をする。

「もうすぐ四時よ。あと三分二十二秒」
「……もうそんな時間なのかよ。明日の追試って朝九時からだっけか」
「今夜一睡もしなけりゃ、まだあと十七時間と三分あるぜ。間に合うか？」
同じテーブルに座っていたもう一人が、他人事のような気楽な声で訊いてきた。古城は沈黙。
積み上げられた教科書を無表情にしばらく眺める。
「なあ……こないだから薄々気になってたんだが」
「ん？」
「なんで俺はこんな大量に追試を受けなきゃなんねーんだろうな？」
自問するような古城の呟きを聞いて、友人二人が顔を上げた。
古城が追試を命じられたのは、英語と数学二科目ずつを含む合計九科目。プラス、体育実技のハーフマラソン。夏休み最後の三日間に、そんな目に遭う人間はたしかに少ない。
「ってか、この追試の出題範囲ってこれ、広すぎだろ。こんなのまだ授業でやってねーぞ、おまけに週七日補習ってどういうことだ。うちの教師たちは俺になんか恨みでもあるんか!!」
少年の悲痛な叫びを聞いて、友人たちは互いの顔を見合わせる。同じ学校の制服を着た男子と女子が各一名。彼らの表情には、なにを今さら、と呆れたような感想が浮かんでいる。
「いや……そりゃ、あるわな。恨み」
シャーペンをくるくると回しながら答えたのは、短髪をツンツンに逆立てて、ヘッドフォン

を首にかけた男子生徒だった。矢瀬基樹というのが彼の名前だ。

「あんだけ毎日毎日、平然と授業をサボられたらねェ。舐められてるって思うわよね、フツー……おまけに夏休み前のテストも無断欠席だしィ？」

優雅に爪の手入れなどしながら、藍羽浅葱が笑顔で言ってくる。

華やかな髪型と、校則ギリギリまで飾り立てた制服。センスがいいのか、それでも不思議とけばけばしい印象はない。とにかく目立つ容姿の女子である。

黙っていれば文句なく美人なのだが、常に浮かべているニヤニヤ笑いのせいか、色気はなかった。男友達と一緒にいるような気安さを感じてしまうのもそのせいだ。

「……だから、あれは不可抗力なんだって。いろいろ事情があったんだよ。だいたい今の俺の体質に朝イチのテストはつらいって、あれほど言ってんのにあの担任は……」

苛ついた口調で占城が言い訳する。その目がかすかに血走っているのは、怒りのせいではなく、単に寝不足なのである。

「体質ってなによ？　占城って花粉症かなんかだっけ？」

浅葱が不思議そうに訊いてくる。占城は、自分の失言に気づいて唇を歪め、

「ああ、いや。つまり夜型っていうか、朝起きるのが苦手っつうか」

「それって体質の問題？　吸血鬼でもあるまいし」

「だよな……はは」

引き攣った笑顔で言葉を濁す古城。この街では、吸血鬼はめずらしい存在ではない。花粉症患者なみにありふれた連中で、そのことが今の古城にとっては、逆に問題だったりする。

「あたしは那月ちゃん好きだけどね、いいセンセーじゃん。出席日数足りてないぶん、補習でチャラにしてくれたんでしょ」

ズズ、と音を立ててジュースをすすりながら浅葱が言った。まァな、と古城も同意する。

「それにあたしも、あんたを憐れに思ったから、こうして勉強を教えてあげてんだし」

他人の金でそんだけ好き勝手に飲み食いしといて、そういう恩着せがましいことを言うな」

浅葱の前に積み上げられた料理の皿を、恨みがましい目つきで古城は眺める。ほっそりした身体のどこに入るのかしらないが、浅葱は非常識なまでの大喰らいなのだった。勉強を教えてやるからメシをおごれ、と彼女に言われたときに、そのことを忘れていたのが悔やまれる。

「言っとくけど浅葱のメシ代になったのは俺の貸した金だからなー。ちゃんと返せな、古城」

矢瀬が冷静な声で指摘する。金持ちの息子のくせに、こういうところで妙に細かい。

「わかってるよ、畜生……おまえらそれでも温かい血の通った人間か」

「いやいや、借りた金を踏み倒そうと思ってるやつのほうが、どう考えても悪者だろ……あと、それ。血が温かいだの冷たいだのってのは、差別表現だからな。気をつけろよ」

とりあえず、この島の中じゃな、と矢瀬が皮肉っぽく笑って言った。

「面倒な世の中だな……本人たちはべつに気にしてないだろうに」

少なくとも俺は気にしないし、と口の中だけで呟き、古城は投げやりな溜息をつく。

「あー……もう、こんな時間？　んじゃ、あたし、行くね。バイトだわ」

携帯電話を眺めていた浅葱が、残っていたジュースを一息で飲み干して立ち上がった。古城はそんな彼女を見上げ、

「バイトって、あれか？　人工島管理公社の……」

「そそっ。保安部のコンピュータの保守管理ってやつ。割がいいのさ」

浅葱は、空中でキーボードを叩くような仕草をしてみせたあと、じゃね、と手を振って店を出て行った。まるでスーパーのレジ打ちにでも行くような気楽な口調だが、管理公社の保安部は一般人がおいそれと出入りできるような場所ではない。

「いつも思うんだが、あの見た目と性格で天才プログラマーってのは反則だよなあ。いまだに信じられんっつか……たしかに成績は、ガキのころからぶっちぎりでよかったんだが」

浅葱の後ろ姿を見送りながら、矢瀬がだらしなく頬杖をつく。

矢瀬と浅葱は、小学生になる前からの古い知り合いなのだという。十年以上前からこの島で暮らしている彼ら二人は、古城たちの世代では、もっとも古くからの絃神市の住人ということになる。人工の島の上に造られたこの街は、完成してまだ十年も経っていないのだ。

「俺は試験勉強さえ手伝ってもらえるならなんでもいい」

古城は顔も上げずに言う。矢瀬はそんな古城を観察しながら、何気ない口調を装って、

「そういや、浅葱が他人に勉強を教えるなんて意外だったな。あいつ、そういうの嫌いだから」
「嫌いって？　なんで？」
「頭がいいとかガリ勉とか思われるのが嫌なんじゃね。ああ見えて、ガキのころにはけっこう苦労してんだ、あいつも」
「へえ……それは知らなかったな」
ややこしい因数分解の問題に苦悩しながら、古城が素っ気ない口調で言う。
古城が絃神市に引っ越してきたのは四年前。中学入学直後のことである。矢瀬たちとはそれから間もなく知り合って、それ以降、たまにつるんで行動するようになった。きっかけはもう覚えていないが、最初に声をかけてきたのは、浅葱だったような記憶がある。
「あいつ、俺には文句言わずに教えてくれるけどな。今回は宿題もだいぶ写させてもらったし」
「ほほう。そいつは不思議だなあ。なんで古城だけ特別なんだろうなあ。気になるよなあ？」
大げさに首を傾げながら、わざとらしく呟く矢瀬。
しかし古城は、いやべつに、と首を振り、
「だってあいつ、きっちり見返り要求してんじゃん。メシおごらされたり、日直やら掃除当番やら押しつけられたりで、こっちだって苦労してんだからな」
「そ、そうか」

矢瀬が落胆したように肩を落として、だめだこいつら、と目元を覆う。友人のそんな不審な挙動に、古城はのろのろと顔を上げ、

「どうかしたか？」

「いや、なんでもねえ。じゃあ、そろそろ俺も帰るわ」

「あ？」

「いやいや。宿題も写し終わったし、浅葱がいなきゃ、こんなとこで勉強しても意味ねえだろ。俺の追試は一教科だけだから、今夜一晩あればどうにかなるしな。まあ、おまえはせいぜい頑張ってくれ」

じゃあな、と荷物をまとめて立ち上がる友人を、古城はぽかんと間の抜けた顔で見上げる。どうやら矢瀬は、どさくさに紛れて、自分のぶんの宿題をちゃっかり写し終えていたらしい。一方、古城のぶんの宿題は、ほとんどまるまる手つかずのままだ。追試の準備でそれどころではなかったのだから、当然といえば当然だが、見せつけられた圧倒的な格差は、すでに崖っぷちにいた古城の心を叩き折るのに十分だった。

「やる気なくすぜ……」

ファミレスに一人取り残されて、古城は再びテーブルに突っ伏した。

そういえば腹も減っていた。しかし今の古城の財布には、料理を追加注文するほどの余裕はない。ドリンクバーの炭酸水で空腹をごまかすのもそろそろ限界だ。

吸血鬼といえば、ワインやらトマトジュースやらだけ飲んでいればいいようなイメージがあるのだが、実際は普通に腹が減るしメシも喰う、というのは、なにやら騙されたような気分だった。とりあえず昼間でも眠いだけで普通に活動できるのは助かるが。

吉城は、真っ白なままの問題集をぱんやりと眺める。

ふと、なにかの授業で聞かされた話を思い出す。様々な進化を遂げた生物の中で、生き残る可能性がもっとも高いのは生存環境に最適化した種族であり、したがって現在生き残っているものたちは、その最適者の子孫である——とかいう学説があるのだそうだ。

適者生存だの、自然選択だのと呼ばれているリクツである。

そんな単純でいいのかと思わなくもないが、なるほど、実によくわかる話だ。

逆に言えば、自然淘汰された生物とは、環境に適応できなかった種族ということになる。

遥かな古代、神のごとき力を手に入れた英雄、超人がいたとして、彼らのような異能の力を持った種族が生き残らなかったのも、同じ理屈で説明がつく。

彼らは、周囲の環境に適応できなかったのだ。

暁古城にはそれがよくわかる。

どれほど力が強くても、頑丈な肉体を備えていても、世界最強の吸血鬼と呼ばれていても、そんな能力は、現代社会においては役に立たない。

追試の試験範囲の、薄っぺらい問題集一冊も、終わらせることができないのだから——

「俺も帰るか……凪沙のやつが、メシの支度を忘れてないといいんだが」

古城はそう呟くと、教科書と問題集をカバンに放りこみ、伝票をつかんで立ち上がった。

レジで精算を済ませると、もとから残念な感じだった財布の中には、わずかな小銭しか残らなかった。このままでは明日からの昼食代にも事欠く始末である。

妹に金を貸してもらうためには、どういう言い訳をするべきか——そんなことを真剣に考えながら、古城は店の出口に向かった。そしてふと足を止めた。眩い夕陽に目を細める。

ファミレスの正面。交差点の向かい側。

逆光の中に一人の少女の姿があった。

黒いギターケースを背負った制服姿の女子生徒だ。

彼女は、太陽を背にして無言で立っていた。

まるで古城を待ち構えていたかのように、身じろぎもせずそこに立ち続けていた。

2

絃神島は、太平洋のド真ん中、東京の南方海上三百二十キロ付近に浮かぶ人工島だった。ギガフロートと呼ばれる超大型浮体式構造物を連結して造られた、完全な人工の都市である。

総面積は約百八十平方キロメートル。総人口は約五十六万人。行政区分上は東京都絃神市と

呼ばれているが、実体は独立した政治系統を持つ特別行政区だ。
暖流の影響を受けた気候は穏やかで、真冬でも平均気温は二十度を超える。熱帯に位置する、いわゆる常夏の島である。
だが、この島の主要産業は観光ではない。
それどころか島への出入りには厳重な審査があり、ただの観光客が訪れることはあり得ない。
紘神市は学究都市だ。製薬、精密機械、ハイテク素材産業などの、日本を代表する大企業、あるいは有名大学の研究機関が、この島にはひしめき合っている。
それは日本本土から遠く離れたこの人工島でだけ、ある分野の研究が認められているからだ。
魔族特区
それが紘神市に与えられた、もうひとつの名前である。
獣人、精霊、半妖半魔、人工生命体、そして吸血鬼　この島では、自然破壊の影響や人類との戦いによって数を減らし、絶滅の危機に瀕した彼ら魔族の存在が公認され、保護されている。そして彼らの肉体組織や特殊能力を解析し、それを科学や産業分野の発展に利用する
―紘神市はそのために造られた人工都市なのだ。
島の住民の大半は、研究員とその家族、および市が認めた特殊能力者である。
その中には、当然、研究の対象となる魔族たちも含まれる。特区の運営に協力する魔族には、その見返りとして市民権が与えられ、人類と同様に、学び、働き、暮らすことが許される。

紘神市は、いわば魔族と人類が共に生活するためのモデル都市――あるいは、壮大な実験室の檻なのだった。

「――にしても、この暑いのだけは勘弁してくんねえかな、くそっ」

パーカーのフードを目深に被って、陽射しに精いっぱい抵抗しながら、古城は悪態をつく。高温多湿のこの島では、温度計の数値以上に体感気温が高い。真夏の海面で温められた風は、ある意味、砂漠の熱風よりタチが悪い。吸血鬼が太陽に弱い、などという前に、普通の人間にとっても相当過酷な環境だ。

ファミレスから古城の自宅までは、市内を走るモノレールで十五分ほどの距離だった。だが、なけなしの小銭を消費しないためにも、古城には歩くという選択肢しか残されていない。じりじりと肌を焦がすような夕陽を浴びながら、彼は、海沿いのショッピングモールを歩いている。

そして何気ない仕草で背後を確認し、面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「尾けられてる……んだよな？」

古城から十五メートルほど離れた後方を、一人の少女が歩いている。ファミレスから出てきたときに見かけた、ベースギターのギグケースを背負った少女である。

彼女が着ているのは、浅葱のものと同じ彩海学園の女子の制服だ。襟元がネクタイではなくリボンになっているということは、中等部の生徒なのだろう。

見覚えのない顔だった。綺麗な顔立ちをしているが、どことなく人に馴れない野生のネコに

似た雰囲気がある。短いスカートに慣れていないのか、ときたま動きが無防備で危なっかしい。

彼女は古城から一定の距離を保ったまま、歩調を合わせて歩いていた。古城が立ち止まると彼女も足を止め、街路樹の後ろに隠れたりもする。かといって、声をかけてくる気配もない。明らかに尾行されている。しかも本人は古城に気づかれていないつもりらしい。

「……凪沙の知り合いか？」

いくつかの可能性を検討して、古城はそういう結論に達した。

暁凪沙は古城の一歳違いの妹で、彩海学園中等部の生徒でもある。見知らぬ中学生が古城になにか興味を持つとしたら、妹の関係者というセンが濃厚だ。

ただそれにしては少女が声をかけてこない理由がわからない。この炎天下での尾行ごっこは、決して楽ではないだろうに。

いや、正直に言えばもうひとつだけ、古城が見知らぬ人物に尾け回される理由がないこともなかった。だがそれは、あまり考えたくない可能性である。

「様子……見てみるかな」

そう言って古城は、たまたま目についたショッピングモールへと入っていった。目的地は、モールの入り口近くにあるゲームセンターだ。ギターケース少女がどういうつもりで尾けてくるのか知らないが、古城が店に入ってしまえば、なにかしらの動きがあるだろうと思ったのだ。

そして事実、少女は明らかに動揺した様子だった。自分の姿を隠すことも忘れて、途方に暮

れたように店の前で動きを止めている。

古城の姿を見失うのは避けたいが、かといって店内に入ってしまえば、古城とばったり顔を合わせる可能性が高くて、それも困る。そのような葛藤の板挟みになっているのだろう。

いや、正確にはもっと単純に、ゲームセンターなどという得体の知れない店を警戒している。そんなふうにも見えた。

夕暮れ時、寂れたショッピングモールの前に一人立ち尽くす少女の姿は、ずいぶん儚げで頼りなく感じられる。クレーンゲームの筐体ごしにそれを観察しながら、古城は、自分がなにかひどいことをしているような罪悪感に襲われた。

「……」

はあ、と長い溜息をついて、古城は仕方なく通路に出る。ずっと隠れてばかりもいられないだろうし、自分のほうから彼女に声をかけてみようと思ったのだ。

だが、間の悪いことに、ギターケース少女のほうでも同じことを考えていたらしい。

古城が外に出ようとした瞬間、意を決したような表情で店に入ってきた彼女と、入り口でばったり鉢合わせる。

古城たちはしばらくの間、互いに無言で見つめ合う。どうにか先に反応したのは、ギターケース少女のほうだった。

「だ……第四真祖！」

彼女は上擦った声でそう叫ぶと、重心を落として身構えた。
間近で見ても綺麗な少女だったが、そのぶん古城の落胆は大きかった。
彼女が古城を尾行していた理由は、今のひと言でよくわかった。この中学生は、第四真祖と呼ばれる吸血鬼を探していたわけだ。真祖の命を狙う魔族や賞金稼ぎというわけでもなさそうだが、なんにしても面倒な相手には違いなかった。第四真祖という名前で古城を呼ぶ連中に、ろくな人間がいたためしはない。
どうしたもんかな、と古城は一瞬だけ黙考し、
「オウ、ミディスピアーチェ！　アウグーリ！」
そして唐突に大げさなアクションで両腕を広げた。
うろ覚えの外国語で叫ぶ古城を、ギターケース少女は呆然と見上げる。
「は？」
「ワタシ、通りすがりのイタリア人です。日本語、よくわかりません。アリヴェデルチ！　グラッチェ！」
早口でそう喚き散らして、古城はその場から逃げようとした。硬直している少女の横をすり抜け、店を出る。と、その直後、
「な……!?　待ってください、暁古城！」
ハッと我に返った少女が、はっきりと古城の名前を呼んだ。

古城はうんざりと顔をしかめて振り返る。世界最強の吸血鬼、などという非常識な肩書きを古城が受け継いだのは、ほんの二カ月ばかり前のこと。ひた隠しにしている努力が実って、その事実を知る者は多くない。

少なくとも現在、この絃神市で、暁古城が第四真祖であることを知っているのは、古城本人以外には一人しかいないはずだった。

「誰だ、おまえ？」

古城が警戒心もあらわに少女を睨む。

少女は、生真面目そうな瞳で古城を見返し、少し大人びた硬い声で答えた。

「わたしは獅子王機関の剣巫です。獅子王機関三聖の命により、第四真祖であるあなたの監視のために派遣されて来ました」

は、と古城は、気の抜けた顔で少女の言葉を聞いた。彼女がなにを言っているのかさっぱりわからない。獅子王機関。剣巫。三聖。初めて聞く言葉ばかりだった。

ただ厄介事の予感だけはひしひしと伝わってくる。

どう対応するべきか激しく迷い、結局、古城はなにも聞かなかったことにしようと思う。

「あー……悪い。人違いだわ。ほかを当たってくれ」

「え？　人違い？　え、え……？」

少女が困惑したように視線を彷徨わせた。人違いという古城の出任せを、本気で信じてしま

ったらしい。案外、素直な性格なのかもしれない。

その隙に立ち去ろうと背中を向けた古城を、少女が慌てて呼び止める。

「ま、待ってください！　本当は人違いなんかじゃないですよね!?」

「いや、監視とか、そういうのはホント間に合ってるから。じゃあ、俺は急いでるんで」

古城はぞんざいに手を振って、その場から急ぎ足で離れていく。

ギターケースを背負った少女は、混乱したような表情のまま、その場に呆然と立ち尽くしていた。人違いだと言い張ったのが功を奏したのか、どうやら尾行を諦めてくれたらしい。とはいえ、彼女の正体も謎のままだし、根本的な解決にはなったわけではない。が、追試の前日に面倒事に巻きこまれるよりは、いくらかマシだった。

ショッピングモールの出口まで辿り着いたところで、古城は、少女がついてこないことを、もう一度確認しておこうと振り返る。そして、そこで目にした光景にぎょっと目を剝いた。

さっきのギターケース少女の行く手を遮るようにして、見知らぬ男の二人組が立っていた。年齢は二十歳前後だろうか。派手に染めた長髪に、あまり似合っていないホスト風の黒スーツ。わかりやすく軽薄そうな男たちである。

「――ねえねえ、そこの彼女。どうしたの？　逆ナン失敗？」

「退屈してるんなら、俺たちと遊ぼうぜ。俺ら、給料出たばっかで金持ってるから――」

風に乗って途切れ途切れに、男たちの声が聞こえてくる。古城と離れたギターケース少女の

ことを、ナンパしようとしているらしい。

少女は冷ややかな態度で男たちを追い払おうとしたが、そのせいか、少々険悪な雰囲気になっていた。男の一人が荒っぽい声で怒鳴り、少女が刺々しい表情で言い返すのが見える。

「……いい歳こいて、中学生に手ェ出してんじゃねえよ……オッサンたち」

古城の顔に焦りの色が浮く。ほっとくべきかとも思ったが、あの少女は、第四真祖の存在を知って、古城のことを尾け回していたのだ。万が一、騒ぎが大きくなって警察沙汰にでもなったときに、古城にとばっちりが来ないとも限らない。

そして古城が焦る理由は、もうひとつある。男たちが手首に嵌めている、金属製の腕輪の存在だ。生体センサや魔力感知装置、発信器などを内蔵した魔族登録証。それを持っている彼らは普通の人間ではない。魔族特区の特別登録市民。すなわち人外。魔族だ。

腕輪をつけた登録魔族が、人間に危害を加えることはあまりない。そんなことをすれば、たちまち特区警備隊の攻魔官たちが大挙して押し寄せてくることになる。だから、今すぐに少女の身が危険ということではない。

問題は、第四真祖の正体が、彼女の口から洩れる可能性があることだ。

そうになれば暁古城の名前は、たちまち魔族たちの間に知れ渡るだろう。そして当然、彼らの中から、古城を仲間に引きこもうとする者や、研究対象にしようとする者、あるいは殺して名を上げようとする者が出てくるに違いない。いずれにしても、古城の平穏な暮らしは、終

わりを告げることになるだろう。そうなる前に、なんとかこの場を丸く収める必要がある。

古城は深々と嘆息し、ギターケース少女のほうに駆け戻ろうとした。

彼女の制服のスカートが、ふわりとめくれ上がったのは、その直後だった。

お高くとまってんじゃねえ、というような意味の暴言を吐いて、男たちのどちらかが少女のスカートをめくったのだ。そこに出現したパステルカラーのチェックの布きれを視界に収めて、古城は思わず硬直する。そして、

「若雷っ！」

少女が柳眉を逆立てて呪文を叫び、次の瞬間、彼女のスカートに手をかけていた男の身体が、トラックに撥ねられたような勢いで吹っ飛んだ。

3

おそらくは掌底だったのだと思う。

だが実際になにが起きたのか、古城にも正確に理解できたわけではない。わかっているのは、小柄な少女が突き出した腕が、男を一撃で吹き飛ばしたということだけだった。

魔力の流れは感じなかった。精霊たちが動いた気配もない。可能性があるとすれば、気功や仙術の類だろう。いずれにしても、あの少女が相当な使い手であるのは間違いなかった。

もしかしたらあの少女は、見た目よりも長く生きているのかもしれない、と想像して、いや、それはないな、と古城はすぐに思い直す。あんな可愛らしいパンツをはいた長命種は、たぶんいない――いないはず。

吹き飛ばされた男は、どうやら獣人種らしかった。いわゆる狼男や、その仲間である。それほど強力な個体ではなさそうだが、それでも彼らの筋力や打たれ強さは、人間の比ではない。それが華奢な少女の一撃を喰らって、壁に叩きつけられたきり動けないでいる。

「このガキ、攻魔師か――!?」

呆気にとられていたナンパ男の片割れが、ようやく我に返って怒鳴った。

攻魔師とは、魔術師や霊能力者などの、魔族に対抗する技術を身につけた人間の総称である。軍人や警察の特殊部隊員、民間の警備会社の社員、あるいはそれ以外の組織に雇われている者――彼らの身分は様々で、使用する技術体系も千差万別だ。だが、いずれにしても、彼らが魔族にとっての天敵であるのは間違いない。魔族を狩ることだけを生業にしている、殺し屋のような攻魔師だって少なくはないのだ。

もちろん魔族特区であるこの絃神市では、彼ら攻魔師の活動も厳重に制限されている。少なくとも道端で女の子に声をかけた程度で、いきなり攻撃されることなどあり得ない。

だが、あまりにも突然の出来事で、男も動揺していたのだろう。

恐怖と怒りに表情を歪ませ、魔族としての本性をあらわにする。真紅の瞳。そして牙。

「D種――！」

少女が表情を険しくしてうめいた。D種とは、様々な血族に分かれた吸血鬼の中でも、特に欧州に多く見られる〝忘却の戦王〟を真祖とする者たちを指す。人々が一般的にイメージする吸血鬼にもっとも近い血族である。

どうする、と古城は困惑する。

普通に考えれば、吸血鬼に襲われている少女を助けるべきなのだろう。が、どうやら彼女も、ただの中学生というわけではないらしい。

そもそも彼女は、古城のことを尾け回していたのだ。最悪、彼女は古城の敵。攻魔師として古城を狙っていた、という可能性もゼロではない。

だがしかし、このまま彼女を放っておくわけにもいかない。

相手は、ただの魔族ではない。吸血鬼だ。彼女がどれほど優れた攻魔師でも、たった一人でまともにやりあって、吸血鬼に勝てるとは思えない。

いくら日没前とはいえ、吸血鬼には常人を遥かに超える身体能力と、魔力への耐性。そして凄まじい再生能力がある。そして、彼らにはもうひとつ、魔族の王と呼ばれるに相応しい圧倒的な切り札があるのだ。

「――灼蹄！　その女をやっちまえ！」

吸血鬼の男が絶叫し、その直後、男の左脚からなにかが噴き出した。

それは鮮血に似ていたが、血ではなかった。陽炎のように揺らめく、どす黒い炎だ。
その黒い炎は、やがて歪な馬のような形をとって現れた。
甲高い嘶きが大気を震わせ、炎を浴びたアスファルトが焼け焦げる。
「こんな街中で眷獣を使うなんて――！」
少女が怒りの表情で叫んだ。
男が左手に嵌めた腕輪が、攻撃的な魔力を感知して、けたたましい警告を発している。ショッピングモールに、来場者の避難を促すサイレンが鳴り響く。
眷獣。そう、男が喚び出した怪物は、眷獣と呼ばれる使い魔だった。
吸血鬼は自らの血の中に、眷属たる獣を従える。
その眷獣の存在こそが、攻魔師たちが吸血鬼を恐れる理由である。
吸血鬼は、たしかに強大な力を持った魔族だ。
だが怪力も敏捷さも、生来の特殊能力でも、吸血鬼を凌ぐ魔族はいくらでも存在する、にもかかわらず、なぜ吸血鬼だけが魔族の王として恐れられているのか
その答えが眷獣なのだった。
眷獣の姿や能力は様々だ。だが、もっとも力の弱い眷獣でさえ、最新鋭の戦車や攻撃ヘリの戦闘力を凌駕する。〝旧き世代〟の使う眷獣ともなれば、小さな村を丸ごと消し飛ばすような芸当も可能だといわれている。

若い世代であるナンパ男の眷獣には、当然そこまでの能力はない。だが、この灼熱の妖馬がそこらを走り回るだけで、このショッピングモールが壊滅するくらいの被害は出るだろう。

そんな危険な召喚獣が、たった一人の少女に向かって放たれたのだ。

宿主である男自身、実験場以外の場所で、生身の人間に向かって眷獣を使ったことはないのだろう。彼の表情は恐怖に引き攣り、逆流した魔力に酔っているようにも見えた。

制御を解き放たれた眷獣は、半ば暴走状態になって、周囲の街路樹を薙ぎ払い、街灯の鉄柱を融解させている。それはまさに意志を持つ破壊的なエネルギーの塊だった。それが近くをかすめただけでも、人間の身体など一瞬で消し炭に変わるだろう。

にもかかわらず、少女の顔に恐怖の色は浮かんでいなかった。

「雪霞狼――！」

背負ったままのギターケースから、少女がなにかを抜き放つ。

それは楽器などではなく、冷たく輝く銀色の槍だった。

槍の柄が一瞬でスライドして長く伸び、同時に、格納されていた主刃が穂先から突き出した。まるで戦闘機の可変翼のように、穂先の左右にも副刃が広がる。洗練された近代兵器のような外観である。

だが、それが原始的な刺突武器であるのは間違いない。爆発的な炎を撒き散らす眷獣相手に、対抗できるとは思えない。それどころか、少女の小柄な体格では、まともに振り回せるかどう

かも怪しいものだ。しかし少女は醒めた瞳で、迫り来る眷獣を冷ややかに睨んでいる。

フッ、と彼女の唇から静かな呼気が洩れる。

一メートル近くにも伸びた美しい槍を、少女は軽々と操って、暴れ狂う炎の妖馬へと突き立てた。しかし妖馬の突進は止まらない。

吸血鬼の眷獣とは、意志を持って実体化するほどの超高濃度の魔力の塊。すなわち魔力そのものである。一度放たれた眷獣を止めるには、より強大な魔力をぶつける以外にない。

少女の攻撃はいうなれば、あふれ出した溶岩に槍一本で立ち向かうようなものだった。

それを理解しているからこそ、ナンパ男は笑った。勝利を確信しての笑みではない。単なる安堵の笑みだった。彼はただ恐れていただけのだ。突然、自分の仲間を得体の知れない攻撃で吹き飛ばした攻魔師の少女を――

だが、そんな男の安堵の笑みは、一瞬で恐怖に塗り替えられる。

「な……!?」

銀の槍に貫かれた姿で、彼の眷獣が止まっていた。

少女が無言で槍を一閃する。切り裂かれた妖馬の巨体が揺らめき、跡形もなく消滅する。

それはロウソクの炎を吹き消すような呆気なさだった。眷獣の姿は完全に消えている。残ったのは焼け焦げたアスファルトだけだ。

「う……嘘だろ!?　俺の眷獣を一撃で消し飛ばしただと!?」

使い魔を失ったナンパ男が、怯えたように後ずさる。しかし少女の表情は険しいままだ。怒りのこもった瞳で男を睨みつけ、槍を構えて、硬直して動けない男へと突進する。そして銀色の槍が、男の心臓を貫こうとしたそのとき――

「ちょっと待ったァ！」

その槍の先端が、突然、跳ね上げられて軌道を変えた。

「えっ!?」

冷ややかに猛り狂っていた少女の目が、驚いたように見開かれた。

そこに立っていたのは古城だった。

見るに見かねて飛びこんできた古城が、ギリギリで槍を殴り飛ばして、少女の攻撃を止めたのだ。攻魔師と吸血鬼のケンカになんか割りこみたくはなかったが、さすがに命のやり取りを見過ごすことはできなかった。そこの吸血鬼の男だって、ナンパに失敗したくらいで中学生に突き殺されたくはないだろう。

「暁 古城!? 雪霞狼を素手で止めるなんて……っ！」

攻魔師の少女が、愕然とした表情で後方に跳んだ。突然現れた古城を警戒するように距離を取り、近くに停めてあったワゴン車の屋根に着地する。

「おい、あんた。仲間を連れて逃げろ」

古城は忙しない口調で、背後に立ち尽くしているナンパ男に怒鳴った。

「これに懲りたら中学生をナンパするのはもうやめろよ。不用意に眷獣を使うのもな！」
「あ、ああ……す、すまん……恩に着るぜ」
男は青ざめた顔でうなずくと、気絶した仲間の身体を担いで去っていく。少女はそんな彼らの後ろ姿を、攻撃的な目つきで睨みつけていた。古城はやれやれと息を吐く。
「おまえもさ……どういうつもりか知らないけど、やりすぎだって。もういいだろ」
疲れたような古城の言葉を聞いて、少女はびくりと肩を震わせた。油断なく槍を構えたまま、彼女はむっつりと古城を睨む。そして非難がましい口調で言った。
「どうして邪魔をするんですか？」
古城はますます気怠い表情になって、
「邪魔っていうか、目の前で喧嘩してるやつらがいたら、普通止めようと思うだろ。だいたいおまえ、なんで俺の名前を知ってんだよ？」
「……公共の場での魔族化、しかも市街地で眷獣を使うなんて明白な聖域条約違反です　彼は殺されても文句を言えなかったはずですが」
「それを言うなら、あいつらに先に手を出したのはおまえのほうだろ？」
「そんなことは――」
冷静に反論しようとして、少女は途中で黙りこんだ。男たちと争いになった経緯を思い出したらしい。ほらな、と古城は強気な表情で少女を睨み、

「おまえが何者なのか知らないけど、ちょっとパンツ見られたくらいで、そんなもの振り回して殺そうとするのはあんまりだろ。いくら相手が魔族だからって――」

そこまで言ったところで、古城は自分の失言に気づいた。銀の槍を構えた少女が、蔑むような目つきで古城のことを睨んでいた。

「もしかして、見てたんですか？」

「あ、いやそれは……」

古城は言い訳を探して口ごもる。少女の立場で考えてみれば、古城は、ナンパされて困っている彼女を見捨てておきながら、市街地で暴れた魔族は助けた身勝手な男子と思われているのだろう。そして実際そのとおりなので釈明しようがない。

「でもほら、そんな気にするようなことじゃないだろ。中学生の下着になんか俺も興味ないし、なかなか可愛い柄だったし、見られて困るようなものでもないんじゃないかと……」

「……」

あたふたと言い訳する古城を眺めて、少女が深く溜息をついた。しかし古城に向けた軽蔑の目つきはそのままだ。そしてその瞬間、まるでタイミングを見計らっていたかのように、離島特有の強風が、海沿いのショッピングモールを吹き抜けていった。

ワゴン車の屋根に立っていた少女のスカートが、ふわりと無防備に舞い上がる。

古城はそのままの姿勢で動きを止めた。無意識に視線が吸い寄せられて動かせない。

息苦しいほどの静寂が訪れる。
「なんでまた見てるんですか」
両手で槍を構えたままの姿勢で、少女が訊いた。
完全に硬直していた古城は、その声でようやく我に返って、
「いや、待て。今のは俺は悪くないだろ。おまえがそんなところに立ってるから――」
「……もういいです」
うろたえる古城を冷たく見下ろし、少女が醒めた声でそう言った。
彼女が構えを解くと、展開していた刃が格納され、槍は再びベースギターほどの大きさへと戻った。それを背中のケースへと戻し、少女は音もなく地上へと舞い降りる。
「あ、ちょっと……」
無言で立ち去ろうとする彼女に、古城はなんとなく声をかけてしまい、
「いやらしい」
少女は古城を一瞥してそう言い捨てると、今度こそ古城に背中を向けて走り去っていった。
「……」
ぽつん、と一人残された古城は、パーカーのポケットに両手を突っこんだまま、近くの壁にもたれて息を吐く。
一方的にひどいことを言われたような気がしたが、不思議とあの少女に腹を立てる気分には

なれなかった。それはたぶん立ち去る直前の彼女が、顔を真っ赤にしていたせいだ。

冷静ぶっていても、しょせん中学生だよなあ、と思う。

眷獣の魔力を感知して、ここにもすぐに特区警備隊が来るだろう。島内の治安を維持するための、武装した攻魔官たちである。身に疚しいところがないとはいえ、こんなところに長居して巻きこまれたら面倒だ。

疲れた、と嘆息して、再び帰路につこうとした古城は、

「ん……？」

ふと道路上に落ちていたなにかに気づいて、眉をひそめた。

それは、白地に赤い縁取りのシンプルな財布だった。

二つ折りで、中は小銭入れと札入れに分かれている。札入れには千円札数枚と、万札が一枚。古城にとってはうらやましい金額だが、目が眩むほどの大金というわけではない。

カードホルダーに差しこまれていたのは、クレジットカードが一枚と学生証。

学生証には、ぎこちなく笑う少女の顔写真と、姫柊雪菜――という名前が刷りこまれていた。

4

やがて日が沈み、夜が過ぎる。そして朝を迎える。

鐘が鳴り続けている。過去から聞こえてくるかのような遠い鐘の音が。
第四真祖は夢を見ている。
崩れた天井からのぞく月が紅い。その月が照らす空も。古い城を取り巻く大地もまた、炎が紅く照らしている。その紅い空を背にしながら、小さな影が立っている。
逆巻く炎のような虹色の髪と、焔光の瞳を持つ影が。
おまえの勝ちだ、と影が告げる。その唇から血に濡れた白い牙がのぞいている。
約束を果たそう、と影が告げる。おまえの望みを叶えよう、と。
次はおまえの番だ、と影が告げる。その瞳が濡れている。紅く輝く瞳が涙に濡れている。
それは幾度となく繰り返し見た悪夢。
暁古城は夢を見ている。
浅い眠りのまま、夜が過ぎる。そして朝が来る

耳元で鐘が鳴り続けていた。
古式ゆかしい、アナログ式目覚まし時計のベルの音だ。
暁古城は苦悶の息を吐き、その時計を手探りで黙らせる。
そしてもぞもぞと寝返りを打ちながら、再び安らかな眠りに戻ろうとしたところで、

「古城君、起きなよ。朝だよ。目覚まし鳴ってたし今日も追試あるんでしょ。朝ご飯、作ってあるから早く食べちゃってよ。洗い物片づかないし。お布団も干すから早くどいて」

早口でまくし立てられた挙げ句にシーツを奪われ、古城は、為すすべもなく狭いベッドから転げ落ちた。焦点の合わない目で見上げると、そこには見慣れた妹の姿がある。

大きな瞳が印象的な、表情の豊かな少女である。

結い上げてピンで止めた長い髪は、一見ショートカット風にも見える。

顔立ちや体つきはまだ少し幼い印象があるが、中学生の平均からは、そう大きく外れてもいないだろう。今朝の彼女は短パンにタンクトップというラフな恰好で、その上にオレンジ色のエプロンをつけている。

床に落ちたまま動かない兄を眺めて、凪沙は呆れたように腰に手を当てた。

「ほーらー、起きなよ。また寝不足？　もしかして明け方まで試験勉強してたの？　南宮先生にあんまり迷惑かけちゃだめだよ。あと補習もサボらないでね。こないだみたいに職員室の掲示板に古城君の名前が貼り出されたりすると、凪沙が恥ずかしい思いをするんだからね。あ、もう、制服のズボンは脱いだらハンガーに掛けてっていつも言ってるのに」

途切れることのない妹のお小言を聞きながら、古城はのろのろと立ち上がる。

身内だからそう思うだけかもしれないが、凪沙は出来のいい妹だ。顔立ちもそれなりに可愛らしく、成績もそこそこ。家事全般も器用にこなす。

しかし、もちろん欠点もある。ひとつは病的なまでの清潔好きで、片づけ魔であること。そしてもうひとつは、この口数だ。

とにかく凪沙はよく喋る。誰に対してもそうするわけではないが、少なくとも心を許した家族に対しては容赦ない。ましてや口喧嘩では勝てる気がしない。

唯一の救いは凪沙が裏表のない性格で、他人の悪口は滅多に口にしないことだが、そのぶん怒らせたときは恐ろしい。中学時代、エロビデオを持って遊びに来たところをうっかり見つかってしまった矢瀬が、怒り狂った凪沙の苛烈な言葉責めによって、しばらく女性恐怖症になっていたほどである。

そんなことを思い出しながら、古城がぼんやりと窓の外を見ていると、

「ねえ、古城君ってば、聞いてるの!?」

凪沙に早口で怒鳴られた。古城は慌てて姿勢を正す。

「ああ、悪い。なんだって？」

「もう……！　だから、転校生だよ」

話を聞いていなかった兄に腹を立てたのか、凪沙が唇を尖らせる。

「……転校生？」

「うん。夏休み明けからうちのクラスに転校生が来るの。女の子。昨日、部活で学校に行ったときに先生に紹介してもらったんだあ。転校前の手続きに来てたんだって。すっごく可愛い子

だったよ。そのうち絶対、高等部でも噂になると思うなあ」

「ふうん……」

古城は素っ気ない態度で聞き流す。いくら可愛くとも、相手は中学生。おまけに妹のクラスメイトだ。完全に古城の興味の対象外である。だがしかし、

「でね、古城君。その転校生ちゃんに、なんかした？」

「は？　なんだそりゃ？」

唐突な凪沙の質問に、古城はわけがわからず訊き返す。

転校前の転校生に、いったいなにができるというのか。しかし凪沙はどこか不機嫌そうな、真面目な表情で兄を見返し、

「だって訊かれたんだよ、その子に。あたしが自己紹介したら、お兄さんがいるかって。どんな人かって」

「……なんで？」

「あたしのほうが訊きたいよ。てっきり古城君と前にどこかで会ったことがあるんだと思ってたんだけど」

「いや、年下の知り合いはいないと思うが……」

古城は腕を組んで考えこんだ。漠然となにか嫌な予感がする。

「で、おまえはなんて答えたんだ？」

「いちおうちゃんと説明しておいたけど、あることないこと」
「なにぃ？」
「うそうそ、本当のことしか話してないよ。この島に来る前に住んでた街のこととか、学校の成績とか、好きな食べ物とか、好きなグラビアアイドルとか、あとは矢瀬っちとか浅葱ちゃんのこととか、あとは中等部のときの大失恋の話もしたかなあ……」
淀みなく答える凪沙を睨んで、古城は苛々と奥歯を鳴らす。
「おまえな……なんで初対面の相手に、そういうことをペラペラと話すわけ？」
「いや、だって可愛い子だったし？」
凪沙は悪びれない口調で言った。予想された答えではあった。ただでさえいつも誰かと喋りたくてうずうずしている凪沙に、秘密を守らせるのは至難の業なのだ。そのくせ本当に言いたいことは、決して言葉にしようとしない難儀な性格でもあるのだが。
「女の子が古城君に興味を持つ機会なんて、滅多にないからさ、少しでもお役に立てばと思ったんだよね」
「うそつけ……単におまえが話したかっただけだろ」
古城は投げやりな態度で息を吐いた。寝不足で働きが鈍っていた頭の片隅に、そのときふと不吉な考えが浮かんでくる。間違っても知り合いと呼べるような関係ではないが、約一名だけ心当たりがある。古城のことを調べようとしていた可能性のある中学生に。

「ちょっと待て。その転校生はなんて名前だ？」
「うん、なんか変わった名字だったよ。えっと……そう、王女様みたいなヒラヒラした感じの」
「ヒラヒラ？　もしかして姫柊のことか？」
ますます膨れ上がる不吉な予感に、古城が苦々しく訊き返す。凪沙が表情を明るくして、
「あ、そうそれ！　姫柊雪菜ちゃん」
「……あいつが凪沙のクラスの転校生……だと!?」
「そうだよ。やっぱり古城君の知り合いだったの？　ねえねえ、どこで知り合ったの？　凪沙にもちゃんと説明してよ、ねえ。古城君ってば！」
凪沙がなにかを叫び続けていたが、古城は聞いていなかった。
古城が考えていたのは、彼をさんざん尾けまわした挙げ句に、吸血鬼の眷獣を一撃で消滅させた、あの槍使いの少女のことだけだ。
その彼女が、古城の妹と同じクラスに転入してきたのだという。いったいどうして？　なんのために？　苦悩する古城の全身を、嫌な汗が噴き出して濡らす。
いつの間にか眠気は完全に消えていた。

5

南宮那月は、彩海学園の英語教師だった。

年齢は自称二十六歳だが、実際はそれよりもかなり若く見える。美人というよりも美少女、あるいは幼女という言葉が似合うほどだ。

顔の輪郭も体つきもとにかく小柄で、まるで人形のようでもある。

その一方、どこかの華族の血を引いているとかで、妙な威厳とカリスマ性があったりもする。そのせいか教師としては有能で、生徒からの評判も悪くなかった。

ひとつの問題を除いては、だが。

「あのー……暑くないんすか、那月ちゃん？」

うだるような猛暑の中で、だらしなく制服を着崩した古城が訊く。追試会場の教室にいる生徒は古城一人。もちろんエアコンなどという人道的な発明品を使わせてもらえるわけもない。

真昼の太陽光線が降り注ぎ、窓から絶え間なく熱風が吹きこむ地獄のような環境で、古城は年下にしか見えない担任教師監督の下、『後期原始人の神話の型の研究』なる怪しい英文を翻訳させられている。もはやこうなると追試というより、懲罰や拷問という呼び名のほうが相応しい。

「教師をちゃん付けで呼ぶなと言ってるだろう」

教壇の中央。どこからか勝手に運んできたビロード張りの豪華な椅子にもたれ、淹れたての熱い紅茶を飲みながら、那月が気取った声で答えてくる。

彼女が着ているのはレースアップした黒のワンピース。襟元や袖口からはフリルがのぞいて、腰回りは編み上げのコルセットで飾り立てている。ゴスロリと呼ぶには少々上品だが、見た目の暑苦しさでは大差ない。しかし那月は、黒レースの扇子で優雅に自分を煽ぎながら、

「この程度の暑さなど、夏の有明に比べれば、どうということはない」

「いや……見てるこっちのほうが暑いんですけどね」

よくわからんなあ、と古城は頬杖をつく。

これがカリスマ教師、南宮那月の唯一最大の欠点だった。彼女のファッションセンスには、時と場所をわきまえるという要素が決定的に欠落しているのだ。この熱帯の人工島において、那月の暑苦しいドレスはそれだけで視覚への暴力である。似合ってないわけではないのだが。

「それでいったいなにを飲んでるんですか、自分だけ」

「うむ。セイロンのキャンディ茶葉をベースに、ハーブで軽くフレーバーをつけてみた。適量のブランデーが紅茶の味わいを引き立てているな」

「補習を受けてる生徒の前でアルコールの匂いを振りまくのもどうかと思うんですが……俺はもう帰ってもいいですかね？」

「酒でも飲まなきゃ夏休みに試験監督なんかやってられるか。採点するから少し待て」

洋酒の匂いを漂わせながら、那月は、古城がどうにか書き終えた追試の解答用紙をつまみ上げた。馬鹿馬鹿しいくらい採点が速い。間違った箇所に赤ペンででかいバツ印をいくつか書き、

「ふん。まあ、いいだろう。残りの試験勉強も済ませておけよ」
「へーい」
気の抜けた声でそう言うと、古城は机の上の荷物を片づけ始めた。那月はティーカップを傾けながら、それを黙って眺めていたが、
「そうだ、暁。昨日、アイランド・ウエストのショッピングモールで、眷獣をぶっ放したバカな吸血鬼がいたらしい。おまえ、なにか知らないか？」
「え？」
担任教師の唐突な質問に、古城は思わず動きを止めた。
西地区のショッピングモール。眷獣。吸血鬼。心当たりがありすぎた。しかし、そのことを那月に話すわけにはいかなかった。なにしろ昨日の騒ぎには、姫柊雪菜が絡んでいる。
もしも彼女が、事件の参考人として事情聴取を受けたりしたら、古城としても困るのだ。なぜなら第四真祖などという吸血鬼は、この絃神市には、存在しないことになっているからだ。つまり古城は未登録魔族なのである。特区警備隊あたりに正体をバラされたら、非常に面倒なことになる。
古城は、錆びついた歯車のようなぎこちない動きで首を振った。那月は、ふん、と息を吐き、
「そうか。ならいい。私はてっきり、おまえの正体を知って尾け回していた攻魔師が、そこらの野良吸血鬼と遭遇して揉めたんじゃないかと心配していたんだ」

まるで見て来たような口振りでそんなことを言う。あまりにも正確な那月の推理に、古城は引き攣った笑みを浮かべ、

「は、ははっ……まさかそんな……」

「そうだな。まあいい。なにか気づいたことがあったら、私に知らせろ」

そう言って那月は、意外にあっさりと引き下がった。古城が安堵の息を吐く。偉そうな口調のせいでわかりづらいが、古城を心配していたという彼女の言葉はたぶん嘘ではないのだろう。

英語教師、南宮那月のもうひとつの肩書きは攻魔師だ。

魔族特区内の教育機関には、生徒保護のため、一定の割合で国家攻魔官の資格を持つ職員を配置することが条例で義務づけられており、那月もその一人なのだった。しかも彼女は、実戦経験者。特区警備隊の指導教官も兼任している、現役のプロ攻魔師である。

そして彼女は、古城が第四真祖であることを知る、数少ない人間の一人でもある。世界最強の吸血鬼などという非常識な体質になった古城が、一般人と同じように学校に通えているのも、那月が裏から手を回してくれたおかげなのだ。

だから古城は、どうしても那月には頭が上がらない。そのせいで、しばしば彼女の個人的な稼業の手伝いをさせられたりもするのだが、そういう運命なのだと諦めるしかなかった。

「ああ、そういえば、ちょっと訊きたいことがあったんですけど」

古城は、ふと思い出して顔を上げた。那月が鬱陶しげな目つきで古城を見返す。

「なんだ」
「獅子王機関……って知ってます？」
古城の問いかけに那月は沈黙し、露骨に不機嫌な表情を浮かべて立ち上がった。
「どうしておまえが、その名前を知っている？」
「いや、知ってるというか、ちょっと小耳に挟んだだけなんだけど」
「ほう。そうか、それは詳しく事情を聞かせてもらいたいものだな。挟んだのは、この耳か？」
そう言って那月は、古城の耳を容赦なく引っ張った。痛て痛て、と古城は悲鳴を上げ、
「……もしかして、なにか怒ってます？」
「嫌な名前を聞いて、少々むかついているだけだ。連中は私らの商売敵だからな」
荒々しく息を吐き、那月は古城を解放した。古城は伸びきった耳たぶを押さえながら、
「商売敵って……国家攻魔官の？」
「ついでに言うと連中はおまえの天敵だ」
那月が、古城を見下ろして冷ややかに警告する。
「たとえ真祖が相手でも、やつらは本気で殺しに来るぞ。連中はそのために造られたんだからな。獅子王機関の関係者には、せいぜい近づかないようにするんだな」
「……造られた？」
古城が怪訝顔で訊き返す。が、那月は、喋りすぎた、というふうに舌打ちして、それ以上、

なにも言おうとはしなかった。

結局、獅子王機関には近づくな、というのが那月の答えらしい。

「あ、そうだ。那月ちゃん。中等部の職員室って、今日は開いてますかね？」

教室から出て行こうとする那月を呼び止めて、古城が再び質問する。那月は怪訝そうに眉を寄せ、

「中等部におまえがなんの用だ、暁？」

「ああ、いや。妹んとこの担任の笹崎先生にちょっと頼みたいことがあって」

「岬に？」

那月が嫌そうに顔をしかめる。そういえば彼女は、中等部の教師である笹崎岬と同じ大学の出身で、なぜか二人は恐ろしく仲が悪いらしい。案の定、那月は露骨に剣々しい表情になって、

「中等部のやつらのことなど私が知るか。自分で行って確かめろ」

「……そうします」

古城は素直に那月の言葉に従うことにした。ここで下手にこの話題を引きずるのはまずい、と本能的に判断する。

しかしその程度のことで、へそを曲げた那月の機嫌が回復するはずもなく、

「それからな、古城」

「はい？」

那月が黒レースの扇子を一閃した。どんな術を使ったのか、その瞬間、普通の人間なら頭蓋骨が陥没するくらいの衝撃が古城の額を襲った。古城はそのまま仰向けに転倒する。

「なんであいつが笹崎先生で私が那月ちゃん呼ばわりなんだ!? 私をちゃん付けで呼ぶな！」

スカートをふわりと翻すと、那月は乱暴にそう言い残して立ち去っていく。

「くそ……体罰反対……だぜ」

天井を見上げたまま額を押さえ、古城は弱々しく呟いた。

6

彩海学園は、中高一貫教育の共学校だ。生徒数は合計で千二百人弱といったところ。都市の性質上、若い世代の人口が多い絃神市では、ありふれた規模の学校だといえる。

しかし慢性的な土地不足は、しょせん人工物である絃神島の宿命で、学園の敷地も、広々としているとは言いがたい。体育館やプール、学食などの多くの施設は中等部と高等部の共用で、そのため高等部の敷地内で中等部の生徒の姿を見かける機会も意外に多い。

一方、高等部の生徒が、中等部を訪れることは稀だった。その必要がないからだ。

おかげで古城はどことなく懐かしいような、居心地悪いような気分を味わいながら、久々に訪れた中等部の職員室にぼんやりと立っている。

占城の手の中に握られているのは、昨日ショッピングモールで拾った白い財布だった。
姫柊雪菜の落とし物だ。
凪沙に聞いた話が本当なら、あの槍使いの少女は、彩海学園の中等部に転入してくることになっているらしい。財布に入っていた学生証も、凪沙の証言を裏付けている。
となれば、これは警察に届けるよりも、担任教師の手から姫柊雪菜に返してもらうのが手っ取り早い。そう思って、わざわざ中等部までやってきたのだが、
「済まんな、暁。今日は笹崎先生は来てないそうだ」
顔見知りの老教師にそう言われて、占城の計画はいきなり頓挫する。
「あ、そっすか……」
「なにか届け物か？　こちらで預かっておこうか？」
「ええ、まあ……そうなんですけど、今日のところは出直します。ちょっと面倒な代物なんで」
占城は老教師に礼を言って、職員室を後にした。夏休み終了まであと二日、ということで、笹崎岬も残り少ない休暇を満喫中らしい。
面倒なことになった、と占城は思う。
できることなら、この財布はさっさと持ち主に突き返してしまいたかったのだ。でなければ、あの短気な中学生にあらぬ誤解を受けて、いきなり槍で突き殺されることにもなりかねない。
獅子王機関には近づくな、という那月の言葉も気にかかる。しかし現金が入った財布の返却を

担任でもない教師に任せるのは、さすがに無責任な気がして頼む気になれなかった。

渡り廊下の柱にもたれて、古城はぼんやりと校庭を眺める。

真夏の昼間ということもあって、部活中の生徒の姿は多くない。それでもグラウンドには、ちらほらと自主練習中の運動部員たちの姿があった。

校舎の影の中ではチアリーダーたちがダンスの練習中。テニスコートでは部員同士の練習試合が行われているらしい。ひらひらと揺れる女子部員たちのスコートを見ていると、ついつい昨日の姫柊雪菜のことを思い出してしまう。

魔族の男たちをものともせずに叩き伏せた異様なまでの戦闘力と、吸血鬼の眷獣を一瞬で消滅させた銀の槍。そしてスカートを押さえて顔を真っ赤にしていた姿と、パステルカラーのパンツ。なにしろ衝撃的な光景だったので、忘れようと思っても、そうそう忘れられるものではなかった。得体の知れない部分もあるが、実際、綺麗な子ではあったのだ。

それに脚も綺麗だったし——と何気なく考えて、古城は小さく舌打ちする。

軽い目眩に襲われると同時に、激しい喉の渇きを覚えたのだ。非常によくない徴候だった。

「せめて連絡先がわかるものでも入ってればな……」

思考を切り替えるために慌てて校庭から目を逸らし、古城は拾った財布を開いてみる。高級品というわけでもなさそうだが、丁寧に扱われているのがわかる綺麗な財布だった。

かすかにいい匂いがする。

財布本体はありふれた布製の既製品で、つまりこの匂いは、持ち主の残り香なのだろう。香水のような強い匂いではなく、柔らかく心地いい香りだった。まあ要するに、女の子の匂い、ということなのだろうが――

無意識にそんなことを思った瞬間、今度こそ、古城の全身を異様な渇きが襲ってきた。

「う……」

まずい、と古城は自分の口元を覆った。

青ざめた顔でその場に膝を突き、小さく肩を震わせる。よりによってこんなときに、と唇を歪める。その唇の隙間から、鋭く尖った犬歯がのぞいた。

傍目には、古城が吐き気をこらえているように見えただろう。

だが、古城はべつに体調を崩したわけではない。古城を苦しめているのは、単なる生理現象。ただし吸血鬼に特有の忌まわしく厄介な症状だった。吸血衝動、だ。

――やばいやばいやばい……！

人の血を吸いたいという抗いがたい欲望が、古城の肉体を支配する。視界が真っ赤に染まったような錯覚をも覚える。

世間ではいまだに誤解されることが多いが、吸血鬼と呼ばれる種族は、餓えを満たすために他人の血を吸っているわけではない。単なる餓えや渇きだけなら、飲食だけで十分に補える。

たしかに吸血行為によって魔力の補充はできる。血を触媒とした魔術も存在する。だがそ

れはあくまでも副産物に過ぎない。

吸血鬼が、吸血の衝動に駆られる原因は主に性的興奮。つまりは性欲だ。

強烈な焦燥感。身を切られるような息苦しさ。誰かのことを想って、いても立ってもいられないような感覚。それが突然、前触れもなく襲ってくる。

自分では制御できないその苦しみから逃れるため、過去に多くの吸血鬼が、時には手当たり次第に人を襲い、時には愛する者をその手にかけた。

だが逆に、しょせんは性的興奮である、ともいえる。

「くっそ……勘弁してくれ」

鼻の奥に鈍い痛みを感じながら、古城はうめいた。金臭い血の味が口の中に広がっていく。

吸血衝動は長くは続かない。驚きや恐怖などの些細なきっかけで呆気なく消えてしまうし、そうなれば、なぜあんなにも苦しんでいたのか自分でもわからなくなる。

古城の場合、そのきっかけになるのは鼻血だった。

妥するに血の味が恋しくなっただけなのだから、味わうのは自分の血でも問題ないわけだ。

興奮すると鼻血が出る　たまたまそういう体質だったせいか、吸血衝動に襲われたとき、古城はいつもそれで正気に戻っていた。

だらだらと流れ出した鼻血を拭きながら、古城はうんざりと溜息をつく。

他人に迷惑をかけずに済むのはいいことだが、この体質の問題点は、とにかく見た目が恰好

悪いということである。事情を知らない人間には、今の古城は、女の子の財布の匂いを嗅いで、いきなり鼻血を噴き出した男子というふうに見えているはずだ。ほとんどただの変態である。

そしてさらに間の悪いことに、歩いてくる誰かの気配があった。

歪んだ視界の片隅に、制服を着た女子生徒の姿が映る。古城の焦りが激しくなる。

この中等部の廊下には、隠れられる場所などどこにもなく、鼻血はまだ止まらない。

近づいてきた女子生徒が、膝を突く古城の背後に立ち止まる。そして彼女は静かに息を吐き、

「女子のお財布の匂いを嗅いで興奮するなんて、あなたはやはり危険な人ですね」

聞き覚えのある声でそう言った。

「……え!?」

思いがけないその声に、古城は驚いて振り返る。

古城の背後に立っていたのは、ギターケースを背負った制服姿の少女だった。少し大人びた顔立ちの女子中学生が、蔑むような目つきで古城を見下ろしている。

「姫柊……雪菜？」

古城は呆然と彼女の名を呼んだ　吸血衝動が生み出した錯覚かと疑ったのだ。しかし雪菜は表情を変えないまま、冷ややかな口調で訊き返してくる。

「はい。なんですか？」

古城はますます放心したような表情になる。

ふと気づけば、吸血衝動は完全に消えていた。あまりにも驚いたせいだろう。鼻血もどうにか止まっている。伸びた犬歯が元の長さまで縮んだのを確認して、古城は、口元を覆っていた手を下ろした。

「どうしてここに？」

「それはこちらの台詞だと思いますけど、暁先輩？　ここは中等部の校舎ですよね？」

「う……」

年下の少女に冷静に指摘され、古城はなにも言い返せなくなる。

雪菜は、はあ、と呆れたような溜息をついて、古城が握っていたものを指さした。

「それって、わたしのお財布ですね」

「あ、ああ。そう、これを届けに来たんだった。けど今日は笹崎先生が休みだって言われて」

雪菜が差し出してきたポケットティッシュをありがたく受け取り、それで鼻血を拭きながら古城はうなずいた。雪菜は、古城の説明の真偽を判定するかのように沈黙していたが、

「それで匂いを嗅いで、鼻血を出すほど興奮してたんですか？」

「べつに財布の匂いで興奮したわけじゃねえよ、ただ、昨日の姫柊のことを思い出して」

古城の言葉に、え、と雪菜が戸惑うような声を出す。彼女は一瞬、人形のように硬直し、

「……っ!?」

そして無意識に制服のスカートを押さえて後ずさった。下唇を噛んで、見る間に赤面する。

昨日、古城と遭遇した際に、起きた出来事を思い出したのだろう。彼女自身が引き起こした、古城が性的興奮を覚えるであろう出来事のことを。

「き、昨日のことは忘れてください」

精いっぱい冷静さを装った口調で雪菜が言う。

「いや、忘れろと言われても……」

「忘れてください」

「……」

雪菜に睨まれた古城は、黙って肩をすくめた　ここであまり彼女を怒らせると、また昨日と同じように、例の槍を抜いて暴れ出すのではないか、という気がしたのだ。

「お財布も返してください　そのつもりでここに来たんですよね」

静かな口調で、正当な要求をする雪菜。しかし古城は、その要求には応じない。財布を高く掲げて立ち上がり、雪菜の手が届かないようにする。

「その前に話を聞かせてもらいたいな。おまえいったい何者だ？　なんで俺を調べてた？」

「……わかりました。それは、力ずくでお財布を取り返せという意味でいいんですね」

雪菜はそう言って切れ長の目で古城を睨みつけた。まるで刀の柄に手を掛けるかのごとく、背負ったギターケースに手を伸ばす。

やはりこうなるのか、と半ば諦めつつ、古城も姿勢を低くした。バスケのディフェンスの要

領で、どんな攻撃にも対応できるように身構える。雪菜の瞳に警戒の色が浮かぶ。

グルグルグル……という低い音が、廊下に響き渡ったのはその直後だった。

古城は無言で眉を寄せた。

ギターケースに手をかけた雪菜の動きが止まり、彼女の頬が羞恥で赤く染まっていく。

その低い唸りの正体に気づいて、古城は、なんとなく気まずい表情を浮かべた。雪菜の腹が鳴った音だった。

「えーと……もしかして、姫柊、腹が減ってる？」

硬直したままの雪菜に、古城が訊いた。

雪菜は沈黙。それが答えだ。

「昨日からなにも食べてないとか？　あ、財布がなかったから？　姫柊って、実は一人暮らしだったりする？」

「だ、だったらなんだっていうんですか!?」

冷静に答えようとする雪菜だが、さすがに声が上擦っている。

どことなくそんな気がしていたが、雪菜はどうやら家族と別れて、一人でこの紗神市に来たらしい。転校してきたばかりで友人もおらず、財布を落として手持ちの現金もない。そのため、昨晩からなにも食べていなかったのだろう。

古城は少し困った顔で頭をかき、雪菜の前にそっと財布を差し出した。

な、なんですか、と動揺しながらも、警戒の表情を崩さない雪菜。
「昼飯、おごってくれ。財布の拾い主には、それくらいの謝礼を要求する権利があるだろ」
古城が緊張感の乏しい声で言う。
雪菜は何度か瞬きを繰り返して、真意を測りかねているような表情で古城を見た。
彼女のお腹がもう一度、空腹を訴える子犬のように低く鳴る。

7

姫柊雪菜が注文したのは、復刻版クラシックテリヤキバーガーとオニオンリング、グレープフルーツジュースのセットだった。彩海学園から徒歩五分。絃神島南地区にある、大手チェーンのハンバーガーショップである。
ピンと背筋を伸ばして椅子に腰掛けた雪菜は、行儀よく両手でテリヤキバーガーをつかんで、幸せそうにかぶりついている。古城がその様子をぼんやりと眺めていると、
「なにを見てるんですか？」
古城の視線に気づいた雪菜が、怪訝そうに訊いてきた。
「ああ、うん……姫柊も、普通にハンバーガーなんか食べるんだな、と思って」
「どういう意味です？」

ムッと形のいい眉をひそめる雪菜。
古城は、氷だらけの薄いアイスコーヒーをすすりながら、
「いや、なんとなく、こういう店とは縁がなさそうな印象があったから。ナイフとフォークはどこですか、とか言い出しそうなイメージが……」
「よくわかりませんけど、もしかして馬鹿にしてますか？」
雪菜は、少し傷ついたように溜息をついた。
「たしかに高神の杜がある街は都会じゃないですけど、ハンバーガーくらいは売ってますよ」
「……高神の杜？　姫柊が前にいた学校のことか？」
「はい。表向きは神道系の女子校ということになっています」
雪菜が妙に回りくどい説明をする。古城は、ん、と顔を上げ、
「表向きはってことは、裏があるのか？」
「……獅子王機関の養成所です。獅子王機関のことは知ってますよね？」
「いや、知らんが」
首を横に振る古城を見て、雪菜が目を瞬いた。
「どうして知らないんですか」
「そんな知ってて当然みたいに言われても……初めて聞いたぞ、そんな名前」
古城が渋い表情で言う。雪菜は、え、と困ったように呟き、

「獅子王機関は、国家公安委員会に設置されている特務機関です」
「特務機関？　公務員ってことか？」
お役所にしては仰々しい組織名だ、と古城は思う。もしかしたら、その名前にもなにか意味があるのかもしれないが。
「はい。大規模な魔導災害や魔導テロを阻止するための、情報収集や謀略工作を行う機関です。もともとは平安時代に宮中を怨霊や妖から護っていた滝口武者が源流なので、今の日本政府よりも古い組織なんですけど」
「源流とかはよくわからないけど……要するに公安警察みたいなものか」
そう言って、古城はいちおう納得する。
警察内に、組織犯罪やテロ対策を専門に扱う公安という部署が存在するように、通常の攻魔官とはべつに、魔導災害や魔導テロに対処する政府機関があっても不思議ではない。それなら、獅子王機関を商売敵だと言っていた那月の言葉とも符合する。
特務機関などという曖昧な組織形態をとっているのは、魔族が相手だからだろう。霊能者や魔術師などの攻魔技能者には、政治と直接関わることを嫌う者も多いからだ。
「で、養成所から来たってことは、姫柊もその獅子王機関の関係者なわけだ」
「はい」
雪菜は控え目にうなずいたあと、仮採用ですけど、と正直に付け加えた。

なるほど、と古城は再び納得。なにしろ彼女はまだ中学生だ。

とはいえ、今の説明で、雪菜が持っている奇妙な槍の正体もなんとなくわかってしまった。

あれは獅子王機関とやらで開発された、対魔族用の特殊兵器なのだろう。

「だったら姫柊が俺を尾けてたのはどうしてだ？　その特務機関ってのは、魔導災害やテロの対策が仕事なんだろ？　俺とは関係なくないか？」

何気ない口調で古城が訊いた。雪菜は少し目を丸くして、

「え？」

「尾行してただろ、昨日。俺のことを」

「まさか気づいてたんですか……!?」

「え？　いや、気づかれてないと思ってたのか、あれで」

むしろ彼女に驚かれたことに、古城は驚く。雪菜は、う、と弱々しくうめいて、

「それもありますけど……あの、暁……先輩？　ひょっとしてご存じないんですか？」

「なにをだ？」

雪菜に先輩などと呼ばれるのは、どうにも慣れない気分である。

「先輩は、存在自体が戦争やテロと同じ扱いなんですよ」

「は？」

「夜の帝国を支配する真祖は、彼ら自身が一国の軍隊と同格なんです。当然、第四真祖も同じ

扱いになります。先輩が日本国内で問題を起こした場合、犯罪ではなく侵略行為と見なされるわけです。だから警察庁の攻魔局ではなく、獅子王機関が動いたんだと思いますけど」

雪菜が、古城を気遣うような口調で説明した。

「軍隊と同じ扱いって……なんだそれ……？　いったい誰がそんなことを……」

さすがに古城は動揺を隠せない　戦争やテロと同じ扱い、ということは、存在しているだけで国家的な非常事態ということか。ただでさえ吸血鬼などという厄介な体質になって苦労しているのに、今度は人間扱いどころか、生物扱いすらしてもらえないのか、

「先輩、本当に知らなかったんですね……」

雪菜が呆れたように溜息をついた。彼女が浮かべた憐れみの表情が、妙に古城の神経に障る。古城は心を落ち着かせるために、ヤケ食いのような勢いでフライドポテトを自分の口に突っこみながら、

「ほかの真祖のことはともかく、俺はそんな扱いされる覚えはねーぞ。俺はなにもしてないし、支配する帝国なんかどこにもねーし」

「そうですね」

雪菜が静かにうなずいた。冷たく攻撃的な眼差しを古城に向けて、

「わたしもそれを訊きたいと思ってました。先輩は、ここでなにをするつもりなんですか？」

「なにをする……って、なんだ？」

「昨日、先輩の妹さんに会って話を聞きました」
「ああ……らしいな」
雪菜の言葉に、古城は思わず顔をしかめる。今さらながら凪沙が彼女に、古城の恥ずかしい過去の秘密を洗いざらいぶちまけていたという事実を思い出したのだ。
しかし雪菜の表情は、あくまでも真剣ままである。
「あなたは、自分が吸血鬼であることを妹さんにも隠してますよね」
「まあ、そうだけど……」
「家族にも正体を隠して魔族特区に潜伏しているのは、なにか目的があるんじゃないですか？　たとえば、絃神島を陰から支配して、登録魔族たちを自分の軍勢に加えようとしているとか。あるいは自分の快楽のために彼らを虐殺しようとしているとか……なんて恐ろしい！」
どこか思い詰めたような、あるいは妄想しているような口調で雪菜が呟く。古城は、なんでそうなる、と低く唸り、
「いや、だから待ってくれ。姫柊はなにか誤解してないか？」
「誤解？」
「潜伏するもなにも、俺は吸血鬼になる前からこの街に住んでたわけなんだが」
「……吸血鬼になる前から……ですか？」
「ああ。記録でもなんでも好きに調べてくれ。俺がこういう体質になったのは今年の春だし、

この島に引っ越してきたのは中学のときだから、もう四年近く前の話だぞ」
古城が苦々しげな口調で説明する。
そう。暁古城は生まれついての吸血鬼ではない。ほんの二カ月と少し前まで、古城は魔族とは無関係な普通の人間だった。だが、今年の春、ある事件に巻きこまれたことで古城の運命は変わった。古城はそこで第四真祖と名乗る人物に出会い、その能力と命を奪ったのだ。
しかし雪菜は、信じられない、というふうに首を振る。
「そんなはずはありません。第四真祖が人間だったなんて」
「え？　いや、そんなことを言われても実際そうなんだし」
「普通の人間が、途中で吸血鬼に変わることなどあり得ません。たとえ吸血鬼に血を吸われて感染したとしても、それは単なる〝血の従者〟――疑似吸血鬼です」
「ああ。そうらしいな」
「だったら、どうしてそんなすぐバレる嘘をつくんですか？」
「べつに嘘をついてるわけじゃねーよ」
古城が疲れたように息を吐いた。こういう真面目なタイプを説得するのは苦手だ。
雪菜は、出来の悪い生徒を相手にしている家庭教師のような口調で、
「あのですね、先輩。真祖というのは、今は亡き神々に不死の呪いを受けた、もっとも旧き原初の吸血鬼のことですよ」

「いちおうそれくらいは俺も知ってるが……」
「普通の人間が真祖になるためには、失われた神々の秘呪で自ら不死者になるしかないんです。先輩にそんなことができるとでも？」
「いや、まさか。さすがに神様の知り合いはいねーよ」
「だったらどうやって吸血鬼になったというんですか。真祖になる手段なんてあとはもう――」
そこまで言って、雪菜はなにかに気づいたように不意に言葉を切った。その顔色がかすかに青ざめる。神々の呪いを浴びる以外に、人間が真祖に成り変わる方法が、たったひとつだけ存在する。それを思い出したのだ。
融合捕食。すなわち真祖喰い――
「先輩……まさか、あなたは……真祖を喰らって、その能力を自らに取りこんだとでも……!?だけど、そんなことが……」
雪菜の表情から、少し前までの柔らかさが消えていた。代わりに畏怖の感情が浮かぶ。
自ら真祖になることはできなくても、真祖の力を手に入れる方法がひとつだけ存在する。それは真祖の存在を喰らって、その能力と呪いを自らの内部に取りこむことだ。
だが、もちろん魔力の劣る者が、神々に近い力を持つ真祖を取りこむことなどできるはずもない。下手に真祖に手を出せば、逆に自分自身の存在を吸い尽くされて消滅するだけだ。
ましてやただの人間が、吸血鬼を喰らうことなどあり得ない。

しかし現実に、暁古城は、第四真祖の力を手に入れたのだと言う。
「真祖を喰った……って、そんな人をゲテモノ喰いの変人みたいに言わないでくれ」
古城は、だらしなく頬杖をついてアイスコーヒーをすすった。雪菜は険しい表情のまま、
「だったら、ほかにどうやって真祖の力を手に入れたと言うんですか」
「悪いけど、詳しいことは俺にも説明できないんだ。俺はただこの厄介な体質を、あの馬鹿に押しつけられただけだからさ」
「押しつけられた……？」
雪菜が驚いたように目を瞬く。
「先輩は、自分の意志で吸血鬼になったわけではないんですか？」
「誰が好きこのんでそんなもんになりたがるか」
古城が投げやりな口調で言う。雪菜は疑惑の眼差しで古城を睨み、
「あの馬鹿というのは誰ですか？」
「第四真祖だよ。先代の」
「先代の第四真祖……!?」
雪菜が愕然として息を呑む。
「まさか、本物の〝焔光の夜伯〟のことですか!?　先輩は、あの方の能力を受け継いだとでも？　どうして第四真祖が先輩を後継者に選ぶんですか？　そもそもなぜあの〝焔光の夜伯〟

なんかに遭遇したりしたんです？」

「いや、それは……」

言いかけた古城の顔が、突然、激しい苦痛に襲われたように歪んだ。

飲みかけのコーヒーのカップが倒れて、溶けた氷で薄まった水っぽい中身がこぼれ出す。古城はそれにも気づかずに、テーブルの上に顔を伏せ、頭を抱えた。噛みしめた唇から、苦悶するような吐息が洩れる。失われた記憶が、古城の全身を呪いのように苛んでいる。

「せ、先輩？」

まったく予想外の古城の反応に、雪菜がうろたえたような声を出した。

「悪い、姫柊……」

しかし古城は顔を上げられない。見えない杭に貫かれたように、激しく疼く心臓を押さえて、ただ苦しげに息を吐く。脳裏に浮かんだのは一人の少女の姿。もう顔すら思い出せない彼女が、炎の中で笑っている。

「その話は今は勘弁してくれ」

古城が弱々しい口調で言った。雪菜が小さく首を傾げた。

「え？」

「俺には、その日の記憶がないんだ。無理に思い出そうとするとこのザマだ」

「そう……なんですか？　わかりました……それじゃあ、仕方がないですね」

ようやく顔を上げた古城を見て、雪菜はホッとしたような表情を浮かべた。記憶がない、という古城の話を、彼女は疑うことなく信じたようだった。基本的に素直な性格なのだろう。あまりにもあっさりとした雪菜の反応に、古城のほうが拍子抜けしてしまう。

「信じてくれるのか？」

「はい。先輩が嘘をついてるかそうでないかくらいは、だいたいわかりますから」

雪菜が当然のような口調で言った。古城は複雑な表情を浮かべる。もしかして古城の単純さを、遠回しに指摘されていたりするのだろうか。

立ち上がった雪菜が、紙ナプキンでテーブルにこぼれたコーヒーを拭く。

それから彼女は、ハンカチを取り出して古城の隣に屈みこむと、

「こっちを向いてください。ズボン、拭きますから」

「あ、いや。いいよ、そこは」

「染みになっちゃいますよ。ほら」

そう言って雪菜が、古城のズボンに手を伸ばす。少女の細い指先で太腿やら、もっと上のデリケートな部分やらを触られて、古城は呼吸も身動きもできない。雪菜には自覚がないようだが、知り合いに見られたら、ものすごい誤解を受けそうな体勢である。わざと古城の吸血衝動を引き起こそうとしているのかと疑いたくなるほどだ。

雪菜は、古城の両脚の間に屈みこんで、無防備に白いうなじを晒したまま、

「わたし、獅子王機関から先輩のことを監視するように命令されてたんですけど……それから、先輩がもし危険な存在なら抹殺するようにとも」

「ま……抹殺？」

平然と告げられた不穏な言葉に、古城の全身はべつの意味で硬直する。

しかし雪菜は穏やかな口調で、

「その理由がわかったような気がします。先輩は少し自覚が足りません。とても危うい感じがします」

「いや、姫柊もそうとう危なっかしいと思うが」

財布も落とすし、と思わず余計なことを呟いて、古城は雪菜に睨まれる。

「とにかく、今日から先輩のことはわたしが監視しますから、くれぐれも変なことはしないでくださいね。まだ先輩のことを全面的に信用したわけではないですから」

「監視……ね」

まあいいか、と古城は肩の力を抜く。いろいろと不安な部分もあるが、雪菜は悪い人間ではないらしい。監視されて困るようなことをする予定もないし、どうせつきまとわれるのならば、ムサ苦しい男の攻魔師よりも女の子のほうがまだ少しは幸せだ。

「そうだ、姫柊。凪沙のことなんだけど」

古城は、ふと不安に駆られて雪菜を見る。雪菜は少し悪戯っぽい笑顔でうなずいた。彼女に

してはめずらしい、年相応の幼い笑顔だ。
「わかってます。先輩が吸血鬼だってことは内緒にしておきます。ですから、わたしのことも」
「ああ。普通の転校生ってことにしとけばいいんだろ」
古城は肩をすくめて答えた。どのみちこんな中学生が特務機関の監視員だと言ったところで、誰も信じてはくれないだろう。
「ありがとうございます」
雪菜はそう言って立ち上がった。すでにいつもの生真面目そうな表情に戻っている。
「それで先輩は、このあとどうするつもりなんですか？」
「あ、ああ……図書館にでも行って夏休みの宿題をやるつもりだったんだけど……」
そう言いかけて、古城は不意に嫌な予感を覚えた。
「姫柊、まさかついてくるつもりなのか？」
「はい。いけませんか？」
雪菜が真顔で訊いてくる。なにを今さらという態度である。
「いや、いけないってことはないけど……もしかして、この先ずっと？」
「もちろんです。監視役ですから」
特に表情も変えずにそう言うと、雪菜は棺を詰めこんだギターケースを背負って、食事の後片づけを始めた。

8

絃神島を構成する四基の人工島のひとつ、アイランド・ウエストは眠らない街だ　飲食店や商業施設が集まるこの地区では、多くの店が夜明けまで営業を続けている。

魔族の多くは夜を好む。それゆえに魔族の住民が飛び抜けて多いこの街では、彼らのためのサービスも充実していた。ある意味、この眩いネオンの夜景こそが、人類と魔族が平和に共存する絃神市という街の象徴なのかもしれなかった。

だが、どれほど明るく照らし出そうとも、夜の街から闇が完全に消えることはない。

「――遊んでくれませんか。私たちと」

ひと気の絶えた夜の公園　海を見下ろす展望通路を酔った男たちが通りがかったとき、突然誰かの呼び止める声が聞こえてきた。

薄ぼんやりと明るい街灯の下に、一人の女性が立っている。

藍色の髪の、小柄な少女だ。

瞳の色は薄い水色。膝丈までのケープコートですっぽりと身体を覆っているが、その下にはなにも身に着けていないようだ。少女の足元は裸足である。

「なんだ、オイ？　こんなところで男漁りかよ？」

「ちっ……まだガキじゃねえか」

男たち二人は顔を見合わせながら、だらしなく表情を緩めて言った。まるで誘われるようにふらふらと少女に近づいたのは、彼女が異様に美しい容姿をしていたからだ。

透き通るような白い肌と、大きな瞳。完全に左右対称の整った顔立ち。

どこか生物としての匂いが希薄な、妖精じみた少女である。

「俺らが魔族だってわかってて言ってんのか、お嬢ちゃん？」

「こんなところで声をかけてきておいて、冗談でしたじゃ済まないぜ。俺たちは今日は機嫌が悪い。特に女のガキにはむかついてんだ」

少女を左右から取り囲むように近づきながら、男たちが言う。彼らは二人とも二十歳前後。茶髪にホスト風の黒いスーツを着て、荒んだ雰囲気を漂わせている。

男の片割れが、牙を剝き出した。魔族としての本性を現したのだ。彼はD種の吸血鬼である。性的興奮に連動して、吸血衝動が男を襲ってきたのだろう。

もう一人は、自分の右手に嵌めていた腕輪を乱暴にむしり取った。

それでもう、魔族の能力を抑えこむものはない。上着を脱ぎ捨てた彼の筋肉が膨れ上がり、茶色のたてがみが背中を覆う。獣人化だ。

「少しばかり恐い思いをすることになるかもしれないが、悪く思うなよ」

「恨むなら、昨日、俺たちに喧嘩を売ってきたあの中学生を恨むんだな」

ギラギラと興奮した眼差しで、男たちが少女を睨みつける。しかし少女は表情を変えない。どこか哀しげに男たちを見上げて、憐れむように瞳を揺らす。そして、

「――魔族が堂々と闊歩する不夜の街。まさに呪われた退廃の都ですね、この島は」

二人の魔族の背後から、穏やかで悲しげな声がした。

前触れもなく出現した異様な気配に、彼らが驚いて振り返る。

街路樹の下の暗がりに立っていたのは、聖職者のような法衣をまとった男だった。

金髪を軍人のように短く刈った外国人である。

左目には眼帯のような金属製の片眼鏡を嵌めている。

身長は百九十センチを超えているだろう。年齢は四十前後といったところだが、大きく盛り上がった肩の筋肉に、加齢による衰えは感じられない。

ただでさえがっちりとした体格である上に、彼が身に着けた法衣の下には、金属製の鎧がのぞいている。軍の重装歩兵部隊が使用する装甲強化服である。その威圧感は相当なものだった。

男の右手に握られているのは、金属製の半月斧。巨大な刃を備えた戦斧である。その重量は相当なはずだが、男はそれを軽々と片手で運んでいる。

「なんだ、てめえは。攻魔師か？」

吸血鬼の男が、殺気立った口調で訊いた。

「見てたんなら、わかるだろうが。今のは、この女のほうから誘ってきたんだぜ。文句を言わ

れるような筋合いはねえ。邪魔すんな。すっこんでろ」

獣人化した男も、嗄れた聞き取りにくい声で言う。

法衣の男は、そんな魔族二人を無表情に眺め、

「いかにも承知。ですから遊んでくださいと言っているのです、この私たちと」

そう言って彼は、斧の切っ先を魔族たちに向けた。

そして左手に持っていた荷物を、二人の魔族の前に放り投げる。それは、細長いスポーツバッグに、無造作に突っ込んだ武器の束だった。剣や刀、投槍、斧。剝き出しの刀身がバッグを突き抜けて地面に刺さる。玩具などではない、本物の武器だ。

「丸腰では戦えないというのなら、どうぞ、好きな得物をお取りなさい。どうしました？　臆したのですか、憐れな魔族よ」

「ジジイ、なめやがって……このガキも手前とグルか」

獣人の男がそう言って、手近にあった剣を拾い上げた。もとより好戦的な性分の魔族である。抑えきれない殺戮の衝動に、喉を唸らせながら牙を剝く。

「お望みどおり殺してやるよ――！」

地面を蹴った獣人の肉体が、爆発したような勢いで加速した。無防備に立つ男の顔面へと、力任せに剣を叩きつける。だが、その剣は攻撃の途中で、法衣の男が持つ戦斧にあっさりと弾かれた。驚愕に表情を歪めて、獣人が斬撃を繰り返す。が、結果は同じだ。

「L種完全体ですか。さすがに速い。が、単調ですね」

「なにっ!?」

「やはり、正式な夜の帝国の獣人兵とは比較になりませんか、憐れな……」

法衣の下の強化鎧が、獣の咆吼に似た駆動音を放った。極限まで筋力を増幅された男の踏みこみで、路面がひび割れ、大気が軋んだ。男の戦斧が、残像の軌跡を描いて一閃する。獣人ですら反応できない神速の一撃だ。

「がはっ……」

肩口から腰のあたりまでを斬り下ろされて、獣人の巨体が吹き飛んだ。生温かい鮮血が飛び散って、周囲に血臭が立ちこめる。骨が砕け、肉の裂ける音が遅れて響く。人間ならば間違いなく即死、強靭な生命力を持つ獣人でも、生死にかかわるほどの重傷だ。

「て、てめェ――!」

傷ついた仲間を呆然と眺めて、吸血鬼の男が吠えた。地面に転がっていた投槍を拾い上げ、法衣の男を目がけて投擲する。

獣人には及ばぬまでも、吸血鬼もまた怪力である。放たれた槍は、弾丸のような速度で男の胸を貫こうとして――その寸前で、あっさりと打ち落とされた。

「くそ……なんなんだ、おまえは!」

吸血鬼の男の問いかけに、法衣の男は厳かに答えた。

「我が名はルードルフ・オイスタッハ。ロタリンギアの殲教師です」
「殲教師？　なんで西欧教会の僧侶が、こんなところに――!?」
「答える義務はありません」
吸血鬼の男は、ちっ、と舌打ちする。そんな彼の左脚からどす黒い炎が噴き上がる。
「ぶっ殺せ、灼蹄！」
炎はいびつな馬の形をとって、法衣の男へと襲いかかった。摂氏一千度の灼熱の眷獣だ。大気が陽炎でゆらゆらと揺らぎ、焼かれた地面が焦げた臭いを残す。
「ふむ。市街地で眷獣を使った愚か者だと聞いていましたが、どうやら事実のようですね。捜し当てた甲斐がありました」
まるでそれを待ちわびていたかのように、男の口元に笑みが浮いた。
そして男は、突撃する炎の眷獣を、自らの左手で受け止める。
「なに……っ!?」
まったく予想しなかったその光景に、吸血鬼の男が目を剝いた。法衣の男の前に見えない壁のようなものが出現し、灼熱の妖馬の攻撃を防いでいる。殲教師の隣に立っていた少女が、奇妙な結界を張って彼を守っているのだ。
その結界に阻まれて、眷獣の炎は男に届かない。
しかし少女の防御結界にも、眷獣を完全に弾き飛ばすほどの力はないようだ。

ぶつかり合う壁と炎の圧力が、大気をギシギシと軋ませる。やがて激突の負荷に耐えかねたように、少女の唇から弱々しい吐息が洩れた。

「この程度の眷獣も完全には無力化できないのですか。やはりまだ改良の余地がありますね」

「あ……!?」

意味不明な男の呟きに、吸血鬼は、勝ち誇ったように唇を吊り上げた。このまま押し合いを続ければ、勝てると判断したのだろう。

だが、法衣の男はつまらなそうに、苦悶の表情を浮かべる少女を呼ぶ。

「今宵の実験は終わりです、アスタルテ」

「はい、殲教師様」

アスタルテと呼ばれた藍色の髪の少女が、静かに目を閉じた。ケープコートをはだけながら、彼女は抑揚のない人工的な声で告げる。

「命令受諾。執行せよ、〝薔薇の指先〟」

その声が終わると同時に、彼女のコートの隙間からなにかが迸った。

それは仄白く輝く透き通った腕だった。少女の細い身体よりも巨大な腕だ。彼女の下腹部を突き破るようにして伸びたその腕が、生きた蛇のようにしなって、吸血鬼の眷獣を貫いた。

「――灼蹄!?　なんだ!?」

信じられないその光景に、吸血鬼がうめく。

胴体を貫かれた炎の眷獣が、苦悶するように吼えた。透明な腕の攻撃はそれでもやまない。まるで炎の眷獣を喰らうかのように、幾度となく繰り返し薙ぎ払う。

「てめェら、いったいなにをした……!?」

実体を保てなくなった炎の眷獣が消滅し、吸血鬼の男がその場にくずおれた。大量の魔力を失って動けない男の唇は恐怖で震えていた。

法衣の男が淡々と告げた。

「眷獣は、より強力な眷獣をぶつければ倒せる。簡単なことです」

「馬鹿な……それが眷獣だと……!?」

少女の身体から伸びる巨大な腕を眺めて、吸血鬼がうめく。

倒れた二人の魔族を、法衣の男は冷ややかに見下ろして、

「殺す価値もない者たちですが、放っておいてもいずれこの島とともに滅びる身。ロドダクテュロスの腹の足しくらいにはなるでしょう。アスタルテ、彼らに慈悲を」

藍色の髪の少女に無表情に告げる。

その言葉が意味していることに気づいて、吸血鬼が悲鳴を上げた。

「よ、よせ……やめろ……！」

少女が、淡い水色の瞳で男を見た。ひどく物憂げにその目を伏せて、彼女は唇を震わせる。

「――命令受諾」

仄白く輝く巨大な腕が、悪意を持つ獣のように蠢いた。
男の絶叫が響き渡る。

第一章
監視者のいる風景
Here comes the Watcher

1

暁古城の自宅があるのは、アイランド・サウスこと、住宅が多く集まる絃神島南地区。九階建てのマンションの七階だった。建築物の高さが厳しく制限された人工島内では、比較的背の高い、見晴らしのいい建物のひとつである。

夏休み最後の一日だったが、古城がベッドを抜け出したときには、太陽はすでに高かった。今日の追試にギリギリ間に合うかどうかという時間である。

もともと夜型の古城だが、吸血鬼化してからは一段とその傾向が強くなっていた。夜に強いというよりも、単純に午前中は頭が働かないのだ。おかげでこの半年間は遅刻を繰り返し、その埋め合わせの補習と追試で、貴重な夏休みが潰れてしまったわけなのだが。

「うー……眠イ」

気怠く呟く古城の表情は暗い。追試は残り四教科。手つかずの宿題とハーフマラソンもまだ残っている。できることなら、なにもかも投げ出して島の外にでも逃走したいところだが、そんなことをしたら後期の授業開始を待たずして留年が決まってしまう。そしてなによりも、凪沙の説教が恐ろしい。

それでも昨日までの絶望的な状況に比べれば、多少はマシになったのだった。

雪菜が夜まで勉強を手伝ってくれたおかげである。

なんでも彼女は、獅子王機関とやらで高校卒業程度の学力をすでに身につけているらしく、教科によって偏りはあるものの、おおむね古城よりもデキがよかった。勉強は自分でやらなければ身につきません、などと口では言いつつ、なんだかんだで代わりに問題を解いてくれたりもする。天才タイプの浅葱と違って、基礎から順番に教えてくれるのもありがたい。

年下の中学生に勉強を教えてもらうという状況に、多少の情けなさを感じなくもないのだが、追い詰められた今の古城に、そんなちっぽけなプライドを気にしている余裕はないのだった。

「凪沙……は、部活か」

着替えを終えてリビングに出た古城が見たのは、テーブル上の皿の中に置かれた一枚の五百円硬貨だった。どうやら、朝食を用意していないのでこれでなにか買って喰え、という意味らしい。ありがたくそれを受け取って、古城はパーカーを羽織りながら外に出る。

ちなみに凪沙はチアリーディング部員。この時期は、ほかの部の応援と、自分たちの大会の練習で毎年ずいぶん忙しそうだ。充実していて結構なことだ、とうらやましく思う兄である。

「……暑イ」

冷房の効かないエレベーターで地上に降りて、古城はマンションの正面玄関へと向かった。

太平洋上にぽつんと浮かぶ絃神島では年間を通じて雨が降りやすく、台風に襲われる回数も多いのだが、ここ数日は無駄に快晴の日が続いている。休みなく降り注ぐ太陽熱が人工の大地

にこもって、気温はものすごいことになっていた。道路を覆うアスファルトからは、ゆらゆらと陽炎が立ち上っている。

その陽炎の中に浮かぶ見覚えのある後ろ姿に気づいて、古城は、ん、と目を細めた。

彩海学園の制服を着て、ギターケースを背負った少女だった。

「あ……先輩」

自動ドアの前に立ち尽くす古城に気づいて、雪菜はゆっくりと振り返った。こんにちは、といつもの生真面目な口調で挨拶をする。汗ひとつ浮いていない涼しげな表情をしているのは、なんらかの結界を張っているせいなのだろうが、魔族である古城よりもよっぽど人間離れして見えてちょっと恐い。

「姫柊、ずっとここに立っていたのか？　もしかして俺を見張るために……？」

ストーカー的な執念を感じて、古城は不安になりながら訊いてみる。雪菜は無表情に古城を見返して、

「はい。監視役ですから」

「マジか、おい!?」

「冗談です」

そう言って雪菜は、クス、と小さく笑った。古城は唇を歪めて黙りこむ。妙に冷静な口調のせいで、どこまで本気かわからず心臓に悪い。

「引っ越しの荷物が来るのを待ってたんです。この時間に届くと言われていたので」
「……引っ越し？」
予想外の雪菜の言葉に、古城はかすかな戸惑いを覚えた。雪菜は淡々とうなずいて、
「はい。急な任務だったので準備が間に合わなくて。昨日まではホテルを借りてたんですけど、やはり不便でしたから――」
彼女のその言葉が終わらぬうちに、一台の小型トラックが、歩道を乗り越えてマンションの敷地に入ってきた。そして古城たちがいる玄関前に停車する。
トラックから降りてきたのは、運送会社の制服を着た配達員が二人。お荷物を届けに上がりました、と威勢よく叫ぶ若い配達員に、
「すみません。こちらです」
雪菜が指さしたのは、古城がさっき乗ってきたエレベーターだった。
「ちょっと待て。姫柊の引っ越し先って、まさか……」
「ええ。こちらのマンションですが？」
「なんで!?」
「先輩が住んでいるからだと思いますけど……」
雪菜が訝しげな表情で答える。なぜそんなわかりきったことを訊くのか、とでも言いたげな態度である。どうやら私生活まで監視する気満々らしい。古城はむっつりと顔をしかめて、

「それも獅子王機関の命令ってやつか？」
「はい」
台車に載って運ばれてきた荷物とともに、エレベーターに乗りこむ雪菜。古城はなんとなく気になって、彼女についていくことにする。そんな古城の不安を裏付けるかのように、雪菜は迷いなくエレベーターの七階のボタンを押し、配達員の二人に向かって、
「七〇五号室です」
「ちょっと待てェ！」
古城は思わず絶叫した。配達員たちが、驚いて古城を凝視する。
「どうしたんですか、先輩。こんな狭いところで急に大きな声を出して？」
雪菜が咎めるような口調で言った。古城は苛々と頭を抱え、
「七〇五って、思いきりうちの隣じゃねえか！　薄々予想はしてたが、本当にそこまでするかオイ!?　そういや、先週七〇五号室の山田さんがいきなり引っ越していったのも、おまえらが仕掛けたこの日のための伏線か!?」
「べつに脅して追い出したわけではないですよ。平和的に説得して出て行ってもらいました」
「説得ゥ？」
「はい。この部屋には悪い気が籠もっているとか、自殺した前の住人の霊が今も居座っているとか、このままでは不幸な死に方をすると、信頼のおける霊能者の託宣をお伝えして……」

「そういうのを世間では脅しっていうんだろうが！　悪徳霊感商法かっ!?」
「冗談です」
雪菜が澄まし顔のまま、吐息のような笑声を洩らした。古城はただひたすら困惑し、
「……は？」
「七〇五号室の前の住人には、きちんと立ち退き手数料を払って引っ越してもらいました。転居先も同等以上の住居を用意したと聞いてます」
「本当に？」
「はい。曲がりなりにも政府機関のやることですから」
そういえばそうだったな、と古城はホッと胸を撫で下ろす。ロクに挨拶したこともないとはいえ、かつての隣人一家が、自分のせいで不幸な目に遭ったりしたらさすがに寝覚めが悪い。
運送会社の配達員たちは、いったいこいつらはなんの話をしてるんだ、というような表情で、そんな古城たちを眺めている。やがてエレベーターは七階に到着して、扉が開いた。
運ばれてきた荷物は、段ボール箱が二つだけだった。配達員の二人は、荷物の受領印を雪菜にもらうと、挨拶もそこそこに帰っていく。
「先輩、その段ボール箱、中に運んでもらえますか？」
雪菜が、玄関の鍵を開けながら無遠慮に頼んでくる。
「なんで俺が……」

ぶつぶつと文句を言いつつ、古城は段ボール箱のひとつを持ち上げた。吸血鬼の筋力など、どうせこんなときでもなければ役に立たないのだ。

雪菜の七〇五号室は、古城たちが住んでいる七〇四号室と同じ造りの３ＬＤＫだった。家族で暮らすには少し手狭だが、一人で住むにはもてあますくらいの広さがある。なにひとつ家具がないせいで余計に寒々しい。

「もしかして、姫柊の荷物ってこれだけか？」

「はい。そうですけど……」

雪菜が、細い首を傾げて古城を見返す。

「学生寮に住んでいたので、あまり私物を持ってないんです。なにかまずいですか？」

「まずくはないけど、いろいろ困るだろ。見た感じ、布団もなさそうだし」

「わたしなら、べつにどこでも寝られますけど。段ボールもありますし」

「頼むからやめてくれ、そういうのは」

そう言って、古城はぐったりと壁にもたれた。段ボールにくるまって寝ている女子中学生に監視されているかと思うと、気になっておちおち夜も寝られない。

「いちおう生活に必要なものは、あとで買いに行くつもりだったんですけど……」

言い訳するように呟いて、雪菜はちらりと古城の顔を見た。もの言いたげな雪菜の表情に、古城は、む、と眉を寄せ、

「もしかして俺を監視しなきゃいけないから、買いに行く時間がない、とか思ってる？」
「ええ、まあ。でも、任務ですから……」
真顔でうなずく雪菜を見て、古城は呆れたように息を吐いた。そんなもの、あとで適当に誤魔化しておけばいいんじゃないかと思うのだが、雪菜には、そんな発想はないらしい。
あまりにも殺風景な雪菜の部屋を見回して、古城は再び嘆息し、
「だったら、俺が姫柊の買い物に一緒に行けばいいのか？」
「先輩と一緒に……ですか？」
「それなら監視任務もサボったことにならないだろ」
「そうですけど、でも先輩はいいんですか？」
「昼過ぎまでは追試があるけど、そのあとでよければつき合ってやるよ。試験勉強を手伝ってもらった借りがあるからな」
古城が時計を確認しながら言った。予定外のイベントで時間をだいぶロスしていた。そろそろ登校しないと、本当に追試に遅れてしまいそうだ。
「そうですか。そういうことでしたら、先輩の試験が終わるまで校内で待ってます」
そう言って雪菜は、少し嬉しそうに微笑んだ。そして降ろしていたギターケースを再び背負い直す。〝雪霞狼〟とか呼ばれていた、あの銀の槍が入っている黒いケースである。
「なあ、その槍……買い物に必要なのか？」

古城が顔をしかめて訊く。できれば日用品の買い出しに、そのような物騒なものを携行して欲しくはないのだが――

「もちろんです。任務中ですから」

冷静な口調で雪菜に言われて、古城はやれやれと溜息をついた。

2

手っ取り早く日用品を揃えるなら、ということで、古城が雪菜を連れて行ったのは、近場のホームセンターだった。その店内に入った途端、雪菜は目を丸くして固まった。

特に変わった店ではない。本土から遠く離れた学究都市である絃神島には、怪しげな道具や薬品を扱う闇店舗も多いが、それらに比べれば、ごく健全な日用雑貨店である。

しかし雪菜は、これまでホームセンターという場所を訪れたことがなかったらしい。生まれて初めて目にした巨大な店構えに彼女は困惑。陳列された商品を、露骨に警戒の表情で眺め、

「これはなんという武器ですか？　鎚の一種のようですが」

「いや、それはただのゴルフクラブだ。スポーツ用品な」

真面目な口調で問いかけてくる雪菜に、古城は微妙な表情で答える。どこまで本気で訊かれているのかわからない。

「そうですか。では、この火炎放射器のような重装備は……」
「高圧洗浄器な。車とか洗うときに使うやつ」
「これらは間違いなく武器ですね。映画で見たことがあります」
「チェーンソーか。これはまあ、武器といえば武器かなあ……」
「あ、これも獅子王機関で習いました。こんなものまで販売しているとは、恐ろしい店です」
「ただの洗剤だろ……？」
「はい。たしか毒ガスを発生させるために使うものですね。酸性の薬剤と塩素系の薬剤を混ぜることで――」
「違うわっ！　そういう使い方をするな、絶対にだ！」
そんなこんなで雪菜が必要なものを買い揃えたころには、古城は完全に消耗し尽くしていた。午前中の追試とマラソンのダメージも地味に効いている。
一方の雪菜はずいぶん楽しそうな表情を浮かべていた。どうやらホームセンターがすっかり気に入ったらしい。単純に、こんなふうに誰かと一緒に買い物をするのを楽しんでいるというふうにも見える。
「そういえば支払いのほうは大丈夫だったのか、姫柊？　けっこう買いこんだみたいだけど」
店を出て、駅へと向かう道すがら古城は訊いた。雪菜は淡々とうなずいて、
「はい。必要経費を前払いしてもらった支度金がありますから」

「ああ、そういうことか」
古城は特に疑問も持たずに納得する。見習いとはいえ、見知らぬ土地に攻魔師を送りこむのだから、それくらいの待遇があってもおかしくはない。
「支度金か。それっていくらぐらい出るんだ？」
「えーと、一千万円くらいです」
「いっせ……!?」
平然と答える雪菜を凝視して、古城は絶句する。どう考えても、中学生にポンと渡すような金額ではない。呆然と立ち止まる古城の姿に、雪菜は不思議そうな表情を浮かべて、
「第四真祖が相手ということで、いつ死んでも悔いが残らないようにしておけと獅子王機関の経理のおばさまには言われたんですけど……そのための支度金なんだそうで」
「俺のせいか!?　その大金は俺のせいなのか!?」
納得いかねえ、と古城が叫ぶ。任務の危険度に応じて支度金が増えるという理屈はわかるが、雪菜が来てから迷惑しているのは、主に古城のほうである。魔族との喧嘩に巻きこまれたり、私生活を監視されたり、怪しげな槍で脅されたり。なのになぜ、雪菜の懐のほうが潤うのか。
しかし古城のそんな苦悩の叫びを、雪菜は誤解したらしく、
「すみません、先輩。荷物を運ぶのを手伝ってもらったりして」
「いや、それはべつにいいんだが。姫柊一人じゃ持てないだろ」

「はい。先輩が一緒で助かりました」
雪菜はそう言って微笑んだ。古城は黙って肩をすくめた。古城がぶら下げている袋の中身は、雪菜が買った日用品である。寝室用のカーテンにバスマット、トイレのスリッパ、コップと歯ブラシ、マグカップ。まるで同棲開始直後の学生カップルみたいな荷物だ、と古城は思う。
そして、その荷物を抱えた古城と雪菜がモノレール乗り場に辿り着いたとき、
「――古城？」
目の前で誰かの驚く声がした。
「え？」
名前を呼ばれた古城が、反射的に顔を上げる。そこに立っていたのは、人目を惹く華やかな容姿の女子高生だった。よく知っている顔である。
「あれ、浅葱？　どうしてここに？　おまえん家ってこっちじゃないよな？」
「うん。バイトの帰りだから……こないだ頼まれた世界史のレポートを、古城の家まで持ってってあげようと思ってたんだけど……」
いつもの調子で話しかけた古城に、浅葱はなぜか警戒したような態度で答えてくる。彼女の視線が注がれているのは、古城が持っている生活感あふれる荷物たち。
そして浅葱は、古城の隣にいる雪菜に目を向ける。
「その子、誰？」

「ああ、姫柊か。えーと、今度うちの中等部に入ってくる予定の転校生」
古城は気楽な口調で雪菜を紹介した。雪菜が、ぺこりと頭を下げる。浅葱は、雪菜をじっと見つめて、
「どうしてその中等部の転校生と、古城が一緒にいるわけ？」
いやそれは、と古城は口ごもる。雪菜が国の特務機関とやらの人間で、古城を監視に来たということは、内緒にしておく約束なのだった。
そもそもそれを語ったところで、浅葱が信じてくれるともあまり思えないが。
「そ……そう、姫柊は凪沙のクラスメイトなんだよ」
ようやくそれを思い出して、古城は声を弾ませた。浅葱は不審そうに眉を寄せたまま、
「凪沙ちゃんの？」
「ああ。なんか転校の手続きにきたときに、凪沙と知り合ったみたいで」
「……それで古城は、凪沙ちゃんにその子を紹介してもらったってこと？」
「まあ、そうかな」
あながち間違いというわけでもないので、古城は適当に受け流す。そんな古城と浅葱のやりとりを聞いていた雪菜が、なにかに気づいてハッとした表情を浮かべる。
「綺麗な子だよねー」
浅葱が古城に顔を寄せ、小声で言った。いつもの彼女と同じニヤニヤ笑いを浮かべているが、

目だけがなぜか笑っていない。
「だよな」
古城は特に深い考えもなく素直に同意。ピキ、と頬を引き攣らせた浅葱を見て、少し慌てて言葉を付け足す。
「……って、凪沙も言ってた」
「ふーん。そっか」
浅葱は作り物めいた笑顔のまま、古城から離れた。そんな彼女の様子に、古城はなにかただならぬ雰囲気を感じて、
「あ、浅葱？」
「じゃあ、電車来たから。あたし帰るね」
浅葱の言葉どおり、ちょうどモノレール乗り場に車両が到着したところだった。古城たちのマンションとは逆方向に向かう便である。古城は慌てて彼女を呼び止め、
「あれ？　世界史のレポートを見せてくれるんじゃなかったのか？」
「うん。そのつもりだったんだけど、どっかに忘れてきちゃったみたい」
静かな怒気を孕んだ笑顔で、浅葱が言う。その瞳が、明日、学校できっちり説明してもらうわよ、と無言のメッセージを伝えてくる。
「え？　おい、浅葱？」

「バイバイ」
困惑する古城の目の前で、車両の扉が閉まった。浅葱はなぜか古城を無視して、雪菜にだけ愛想よく手を振り、去っていく。
「なんだ、あいつ」
古城が首を傾げて呟いた。雪菜は責任を感じているような表情になって、
「すみません、先輩。わたしのせいで、なにか誤解されてしまったかも……」
「誤解？」
なぜか悄然としている雪菜を、古城は不思議そうに見返した。そして、ああ、と納得して、
「いや、ないない。誤解とか。あいつはただの友達だから」
「ただの友達……ですか」
雪菜が、古城の真意を測りかねている、というふうに訊き返す。古城は迷いなくうなずいて、
「まあ腐れ縁というか、男友達みたいなもんかな」
「先輩……」
あっけらかんと答える古城を、なぜか雪菜は責めるような眼差しで見上げ、
「なんだ？」
「いえ、なんでもありません」
そう言って深々と息を吐いた。

3

結局、古城と雪菜がマンションに帰り着いたのは、夕方近くになってからのことだった。相変わらず陽射しは強かったが、風には少しだけ夜の涼しさが混じり始めている。

「――あれ、古城君たちも今帰り？　遅かったね」

夕陽から逃げるようにして、古城たちがマンションのエントランスをくぐると、そこにいた誰かが声をかけてきた。エレベーターのドアを開けたまま、制服姿の女子中学生が、早く早くと手招きをしている。

「凪沙か。なんだ、その荷物？」

エレベーターに乗りこんだ古城は、妹の姿を見て眉を寄せた。凪沙の右手には、部活の荷物を詰めたスポーツバッグ。そして左手には大量の食材を詰めこんだ買い物袋が提げられている。買い物袋の中身は、大量の肉や刺身など、普段の暁家とは縁遠い高級食材ばかりだった。

「なにって、歓迎会だよ。転校生ちゃんの」

驚いている古城を見て、凪沙が呆れたように言ってくる。

「歓迎会？」

「そだよ。だって引っ越してきたばっかりで、今日はご飯の支度なんてできないでしょ」

「まあ、そういやそうか」
食器も調理器具もなにもない雪菜の部屋を思い出して、占城はうなずく。そしてふと怪訝な表情になって、
「凪沙、おまえ、姫柊が隣に引っ越してくるって知ってたのか？」
「うん。だって今朝、挨拶に来てくれたし。占城君は寝てたけど」
兄の寝坊を咎めるような口調で、凪沙が言う。普段よりも口数が控え目なのは、雪菜の前ということで自重しているのだろう。
「そうなのか？」
占城が小声で雪菜に訊く。はい、と雪菜はうなずき返して、
「あの……でも、いいんですか、歓迎会なんて」
「いいのいいの。お肉ももう買っちゃったし。あたしと占城君だけじゃ食べきれないよ」
凪沙が人懐こい表情で言った。たしかに、と占城も苦笑する。
両親が四年前に離婚したせいで、暁家は現在、三人家族だ。しかも市内の企業で研究主任を務めている母親は、仕事の都合で週に一、二回しか自宅に戻らない。
子どもたちのほうから会いに行けばいつでも会えるので、それを寂しいと思うことはないが、実質的に占城と凪沙は兄妹二人で暮らしているようなものだった。とてもじゃないが、凪沙が抱えているお徳用特選牛肉一・五キログラムは食べきれない。

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えます」
雪菜は少し考えてそう言った。これも占城を監視する任務の一部だと自分に言い聞かせたのだろう。凪沙はそれを聞いて、嬉しそうに笑う。
「よかった。じゃあ、荷物を置いたらうちに来てね。あ、寄せ鍋だけど大丈夫？　雪菜ちゃん、食べられないものとかないかなあ。やっぱり真夏に冷房をガンガンに効かせて食べるお鍋は、贅沢な感じがしていいよねえ。そうそう、味噌味と醤油味はどっちがいいかな。おダシはね、いちおうカツオとコンブと鶏ガラとホタテを使うつもりなんだけど、今日はカニも用意してあるからやっぱりお醤油仕立てかなあ。カニはオホーツクの毛ガニだよ。ちょうど今が旬――」
「その辺にしとけ、凪沙。姫柊が固まってる」
早口でまくし立てる妹の頭頂部を、古城が軽く叩いて黙らせる。あ痛、と涙目になった凪沙が、恨みがましく古城を見た。
雪菜は圧倒されたような表情を浮かべながらも、
「あの、わたしも手伝いましょうか？　鍋物の下ごしらえくらいなら……」
「いやいや。雪菜ちゃんは今日はお客様だからね。のんびりくつろいでてよ。遠くからやってきたばかりで、疲れたでしょ。ほら、古城君も雪菜ちゃんをもてなして」
「そういう思いつきだけで適当なことを言うな。俺は自分の部屋で宿題の残りをやる」
沈みかけた夕陽を眺めて古城は薄く溜息を洩らす。ふと気づけば、夏休みの残り時間はごく

わずかになっていた。すでに手遅れという気もするが、やはり焦りは隠せない。
「そういうことなら、わたしが先輩の宿題を手伝うということでどうですか？」
買い揃えた日用品を七〇五号室の玄関先に置きながら、雪菜が言った。
彼女の意外な申し出に古城は迷った。実にありがたい提案だが、やはり妹の同級生に勉強を教わるというのは、兄としての立場や年上の威厳という意味で問題がありすぎる。
しかし凪沙は、そんな古城の葛藤などお構いなしに、
「ごめんね、雪菜ちゃん。古城君のこと、よろしくね。出来の悪いお兄ちゃんですけど」
一方的にそう言って雪菜を自宅に連れて行く。古城は渋面で彼女たちに続く。年上の威厳もなにもあったものではなかった。せめてもの救いは、凪沙の強引な誘いにも、雪菜が嫌がる素振りを見せないことくらいだ。
自宅に上がりこむなり、凪沙はさっそくエプロンを身につけて料理の支度を始めた。
その間に、古城は雪菜を自分の部屋に案内する。
片づけ魔の凪沙が、隙を見ては勝手に入りこんで掃除をするため、古城の部屋は、女子に見られても恥ずかしくない程度には整頓されている。
とはいっても、もともと荷物の少ない殺風景な部屋だ。さすがに雪菜の部屋ほどではないが、ベッドと机、古雑誌を突っこんだ隙間だらけの本棚を除けば、なにもない。
「これ……先輩って、バスケ部員だったんですか？」

その本棚に置かれたアルバムに気づいて、雪菜がどこか意外そうに訊いてくる。
アルバムは、中学時代に古城が所属していたバスケ部の記録だった。部活を引退したときにバスケット関係の道具はすべて処分したのだが、それだけは捨てられなかったのだ。
「姫柊ってバスケは知ってたんだな。ゴルフクラブは鎚の一種とか言ってたくせに」
古城は冗談めかした口調で言った。雪菜は拗ねたように唇を曲げて、
「都大会準優勝って立派な成績ですよね」
「まあ、昔の話だけどな」
「それなのに先輩がバスケを辞めたのは、第四真祖の力を手に入れたことが原因ですか？」
そう言って雪菜が真剣な表情で見つめてくる。古城は面倒くさそうに首を振った。あれからもう一年も経ったのか、と少し不思議な気分で思う。
「この体質とは関係ねーよ。バスケをやめたのはその前だし」
たしかに、この身体で試合には出られないだろうけどな、と古城は自嘲気味に笑った。
化け物じみた怪力に跳躍力、弾丸をも受け止める敏捷性。チート極まりない魔族の能力は、スポーツマンシップの対極である。卑怯さではドーピングなどの比ではない。
しかし古城がバスケをやめたのは一年以上前。吸血鬼化する以前のことである。
「だったら、どうして？」
「べつに、よくある話だよ。部活は一人じゃできないってことを、俺がわかってなかったって

話。要するにさ、部の中で孤立したんだ」

「え？」

他人事のように語る古城の横顔を、雪菜が驚いたように見つめていた。古城は気怠げにベッドに倒れこみ、天井を見上げたまま苦笑する。

「あのころの俺は、自分一人が頑張れば勝てると思ってたんだ。実際それで途中まではどうにかなってた。いわゆるワンマンチームってやつ。優秀選手にも選ばれたりして、調子に乗ってたのかもな」

そう上手くいくわけがないのにな、と古城は笑う。

きっかけは中学最後の大会。地区予選での古城の負傷だった。敵チームの激しいファウルを受け、古城は途中退場を余儀なくされたのだ。幸い得点は大きくリードしていたし、古城の怪我も深刻なものではなかった。勝ち上がれば次の試合には出られるはずだった。

だが古城がいなくなった瞬間、チームの士気は崩壊した。

たちまち逆転され、相手チームに大量リードを許し、そして呆気なく敗北した。

その一部始終を、古城はベンチから呆然と見ていることしかできなかった。

「それよりも、ほかの部員たちが平然と負けを受け入れてたことがショックでさ」

古城は投げやりに肩をすくめてみせた。

「それでようやく気づいたんだ。あいつらの気力を奪っていたのは俺なんだって。自分たちが

本気を出さなくても、誰かが勝たせてくれる、なんとかしてくれるって思わせちまった。本当は俺一人じゃなにもできなかったのに。それがわかっても、今さらどうしようもないけどな」

だから古城は、怪我の治療を理由に部活をやめた。引き留めてくれる仲間もいたが、古城にはもう彼らと一緒にバスケを続けることができなかった。古城が傍にいる限り、彼らはきっと変わらないと思えたからだ。なによりも古城自身が続ける気力をなくしていた。

「わたしには……先輩だけが悪いとは思えませんけど」

黙って話を聞いていた雪菜が、生真面目な口調でそう言った。

古城は、そんな雪菜をからかうように笑って、

「ああ、べつにそれはいいんだ。俺が勝手にやる気をなくしただけだし。だけど」

そして古城はすっと犬歯を剝く。瞳の色が一瞬だけ紅く変わる。

「第四真祖とかいう、このふざけた体質を押しつけられたときに俺も少しは考えたんだ。この能力を使えば、きっと今の世界が抱えている問題のいくつかは解決できる。少なくとも凶悪な犯罪者をぶっ殺したり、汚職政治家を消したりするくらいのことはさ」

「先輩。それは――」

「わかってる。それじゃ駄目なんだ。他人より少しばかり大きな力を手に入れたからといって、俺みたいなやつが、勝手な思いこみで世の中を動かしていいわけがねー。そんなことをすれば、きっとまたどこかに反動が来るんだろ」

雪菜がホッとしたように息を吐いた。そしてふとなにか気づいたように眉を寄せ、
「先輩が、吸血鬼だということを隠して、ただの人間として暮らしたがっているのは、それが理由ですか？」
そうかもな、と古城は曖昧にうなずいた。
「俺は吸血鬼の能力なんて要らないし、できればそんなものにはかかわりたくもねーよ。正義の味方なんて柄じゃないしな。わけもわからないまま与えられたこの力は、はっきり言って俺の分を超えてる。扱いきれる自信なんてない」
「はい……」
気持ちはわからなくもないですけど、と雪菜がどこか醒めた瞳で古城を見る。そして、
「でも、それって……先輩が、なにもしようとしない言い訳ですよね？」
「え？　あれ……そういう評価？」
古城は傷ついたような表情を浮かべて起き上がり、
「俺、実は今けっこういいことを言ったつもりなんだが……」
「ふふ、そうですね。本当は少しだけ見直しました」
「そ、そうか」
「はい」
クス、と雪菜が小さく笑った。

「それでは先輩が今やらなければならないことをやりましょうか。とりあえず解答の丸暗記は禁止です。基本的な公式を押さえておけば大丈夫ですから」

古城の教科書を開いた雪菜が、まるで年上の家庭教師のような口調で言う。古城は、うげ、と顔をしかめたが、雪菜はなぜか少しだけ楽しそうだった。

4

凪沙が用意した夕食は、軽く七、八人ぶんはあったはずだが、古城たち二人は旺盛な食欲を発揮し、すべて完食。最後はおじやにして汁まですべて平らげた。

「はー……食べたねえ。もう動けないよ」

凪沙が薄っぺらいキャミソール姿で、リビングのソファに寝転んでいる。後片づけを手伝うと主張する雪菜を、大丈夫大丈夫と強引に自宅に追い返し、台所を綺麗に磨き上げたところで、力尽きてしまったらしい。

「おい、凪沙。こんなところで寝てんじゃねーよ。風邪ひくぞ」

幸せそうなに腹を押さえている妹を呆れ顔で眺めて、古城がぶっきらぼうに言う。凪沙は、ひらひらと億劫そうに手を振って、

「ちょっとだけだからー。今日は部活の練習もあって疲れちゃってさー……あれ、古城君？　ど

こ行くの？」
「コンビニ。眠気覚ましに、なんか飲み物買ってくる」
部屋着の上にパーカーを羽織りながら、古城は答えた。
凪沙はうつぶせのまま、がば、と勢いよく顔を上げ、
「あー、だったらアイス買ってきて。こないだと同じやつ」
「おまえ、まだ喰うのかよ。太るぞ、下っ腹のところ」
「うるさいです。そんなこと言う古城君は嫌いだよ」
大きく頬を膨らませて凪沙が抗議する。
「へいへい」
怒るということは自覚があるんだろうに、と思いつつ、古城は靴紐を結んで玄関のドアを開けた。外に出ると、目の前に雪菜が立っていた。
「――こんな時間にどこに行くつもりですか、先輩？」
うお、と古城は思わず悲鳴を上げた。雪菜が警戒するように目を細めて、古城を冷ややかに睨んでいる。
「ひ、姫柊？」
「はい。なんですか？」
首を傾げて訊いてくる雪菜を見て、古城は少しだけ安心する。

雪菜の髪は濡れたまま、毛先から水滴を滴らせていた。しかも素肌の上に制服のブラウスを引っかけただけの無防備な姿だ。例のギターケースも背負っていない。もしかしてずっと家の前で見張っていたのかと思ったが、どうやらそういうわけでもないらしい。

おそらく風呂に入っている途中に、古城が外出する気配を感じて、慌てて飛び出してきたのだろう。仕事熱心というか馬鹿正直というか、いかにも雪菜らしい生真面目さである。

「もしかして、ついてくるつもりなのか？　その恰好で？」

軽い頭痛を感じながら、古城が訊く。

「監視役ですから」

雪菜はいつもの淡々とした口調で答えたが、さすがに少しもじもじと不安そうにしている。状況が状況だけに、おそらく下着もつけていないのだろう。

古城はやれやれと首を振って、

「いいから髪とか乾かしてこいよ。姫柊の準備が済むまで待ってるから」

「本当ですか？」

少し驚いたように目を瞬く雪菜。古城は顔をしかめたまま、

「そんな恰好の女子中学生を、こんな夜中に連れ回せるか。俺が逮捕されちまうわ」

「そ、そうですか。では、中に入って待っていてください」

「いや、いい。ここで待ってる。べつに逃げたりしないから」

古城はそう言ってがっくりと顔を伏せた。いくらなんでも風呂上がりの女の子と二人きりはまずい。古城には難易度が高すぎる。

では、と言い残して、雪菜は逃げるように自分の部屋へと戻っていった。

古城はマンションの廊下から空を見上げた。無心になって星を数える。着替えている雪菜の姿を想像すると、吸血衝動が襲ってきそうな予感がしたからだ。

やがて再び雪菜の部屋のドアが開き、今度はきちんと制服に着替えた雪菜が出てきた。やはりあの黒いギターケースも背負っている。

もしかして彼女は制服以外持ってきていないのだろうか、と古城はふと思う。そのうち服を買いにも連れて行かなきゃなあ、とごく自然に考えている自分に気づいて、古城は落ちこんだ。手間のかかる小動物を拾ってしまったような気分だった。

「それでどこに行くんですか、先輩？」

そんな古城の葛藤も知らずに、雪菜が訊いてくる。古城はエレベーターに乗りこみながら、

「コンビニだよ。まさかコンビニを知らないとは言わないよな？」

「はい、それは知ってますけど。でも、こんな夜中に入ったことはないです」

期待と不安がない交ぜになったような、弾んだ声で雪菜が言う。親に内緒で悪戯をしている子どものような表情だ。コンビニにそんな期待されても、と古城は苦笑して、

「さっきは悪かったな。疲れただろ」

「え？」

「夕飯のとき。凪沙のやつが騒がしくて」

「いえ、楽しかったです。お鍋も美味しかったですし」

雪菜が少し照れたように微笑んだ。それならよかった、と古城も笑って、

「昔は交代で食事当番をやってたんだけど、最近は凪沙のほうが断然上手いからな」

「いいですね、兄妹って。わたしには家族がいないので、憧れます」

雪菜が何気ない口調で告げる。

「家族がいない？」

古城は驚いて雪菜の横顔を見つめる。はい、と雪菜は、さしたる感傷も見せずにうなずいて、

「高神の杜にいるのは全員、孤児なんです。全国から素質のある子どもたちを集めてきて、攻魔師を養成する組織ですから」

「そうなのか……？」

予想以上に重い雪菜の身の上話に、古城は言葉を失ってしまう。

「じゃあ、姫柊は最初から攻魔師になるために……？」

「はい。あの、でも、家族がいなくて寂しいとか、そういうことじゃないんです。高神の杜のスタッフはみんな優しくしてくれますし、剣巫の修行も嫌ではなかったので」

雪菜が慌てて補足した。嘘をついている雰囲気ではなかったし、彼女の言葉を古城は素直に

信じられた。実際、魔族すら圧倒する雪菜の体術は、嫌々練習して身につけられるようなレベルのものではなかったと思う。ただ、

「剣巫……ってなんだ？」

聞き慣れない単語に古城は首を傾げ、

「高神の杜に仕えている攻魔師です。剣術を修めた巫女という程度の意味だと思いますけど」

雪菜も自信なさげな表情で言う。彼女自身、実はあまりよくわかっていなかったらしい

「巫女……ってことは、姫柊は祈禱や占いもできるのか？」

「いちおう形だけは。あまり得意ではないんですけど……」

「ふーん」

そうか、と古城はなんとなく納得する。言われてみれば、雪菜は、きっちりしているようでいて、案外、堅苦しい儀式が苦手そうな雰囲気がある。

どちらかといえば動物的というか、本能や直感で動くタイプとでもいえばいいのか。むしろそれこそが本来の巫女の資質なのかもしれないが。

「先輩……なにか今、失礼なことを考えてませんでしたか？」

まるで心を見透かしたようなタイミングで訊かれて、古城は慌てた。

「え、いや、そんなことはないぞ」

「わたし、霊感霊視はそれなりに使えますから。嘘をついても無駄ですよ」

「え……!?　やっぱり動物っぽい……」
「やはりそういうことを考えていたんですね……」
そんな話をしているうちに、二人は目的地であるコンビニに近づいていた。
古城たちのマンションがあるアイランド・サウスは、住宅地がメインの人工島で、夜の人通りはあまり多くない。それでも駅前近くはそれなりに賑わっている。
ファーストフード店やコーヒーショップ。漫画喫茶にゲームセンターも――
「あ……」
そのゲームセンターの前を通りかかったとき、雪菜が唐突に足を止めた。古城もつられて振り返る。まさかゲームセンターを知らないというわけでもないのだろうが、
「姫柊？」
「あ、すみません。なんでもないんです」
「このクレーンゲームがどうかしたのか？」
雪菜が凝視している店頭の筐体に気づいて、古城が訊く。雪菜は小さく首を傾げて、
「クレーンゲーム……というんですか。ネコマたんが入ってるのは……」
「ネコマたん？　このマスコット人形のことか？」
「はい。あの……前の学校で人気があって」
雪菜が小さくうなずいた。招き猫をふかふかにしたような、二頭身のネコのマスコットだっ

た。二本に分かれた尻尾が特徴で、それが名前の由来なのだろう。自分はそれほど興味ない、という口ぶりだったが、雪菜の瞳は、キラキラと輝いてガラスケースの中のマスコットたちに向けられている。

「これくらいなら、獲れそうだな」

古城は微苦笑を浮かべながら百円玉を取り出した。雪菜は、驚いたように古城を見上げ、

「獲るってどういうことですか？　まさか……」

「違う違う。かっぱらうとかそういうことじゃなくて、これはそういう機械なんだよ」

そう言って古城はゲーム機にコインを投入する。古城のボタン操作でアームが動き出すと、雪菜もおおよその仕組みを理解したらしかった。魔族と戦っていたときよりもよっぽど真剣な表情でアームの行方を追っている。

凪沙の強引なリクエストにつき合わされることが多いため、古城のクレーンゲームの腕前はそこそこだ。引っかけやすい位置にいる個体を狙って、正確にアームを降下させる。

狙い違わずアームに挟まれ、取り出し口へと運ばれていくマスコットを、雪菜は息を殺して見つめていた。やがて招き猫もどきのマスコット人形が、取り出し口へと落下し、その瞬間、

「――そこの二人。彩海学園の生徒だな。こんな時間になにをしている？」

背後から聞こえてきた静かな声に、古城と雪菜は電撃に打たれたように硬直した。

ゲーム機のガラスに映りこんだ影を見て、古城は、げっと息を呑む。

そこに立っていたのは、南宮那月だった。わざわざ顔を確認するまでもなく、この常夏の島でフリルまみれのドレスを着るような暑苦しい人間は彼女しかいない。夜だというのに日傘を差しているのが場違いだが、どうやら生徒指導のための見回り中らしい。

「そこの男。どっかで見たような後ろ姿だが、フードを脱いでこっちを向いてもらおうか」

那月がどこか楽しそうな口調で言う。真綿で首を絞めるように、じわじわと古城を追い詰めるつもりらしい。

ふと見れば、雪菜は青ざめた表情で硬直している。なまじ優等生として育ってきただけに、この手の事態には打たれ弱いのだろう。

まずいな、と古城は冷や汗をかく。

すでに時刻は午前零時近く。店頭のクレーンゲーム機とはいえ、ゲーセンで遊んでいたら言い訳できない。立派な条例違反である。中学生同伴では尚更だ。

「どうしたんだ？　意地でも振り向かないというのなら、私にも考えがあるぞ　」

那月が獲物を嬲るような口調で、そう言いかけた直後だった。

ズン、と鈍い振動が、人工島全体を揺るがした。一瞬遅れて、爆発音が響く。

「なんだ――!?」

攻魔師でもある那月が、異様な気配に反応して振り返った。

爆発音は、なおも絶え間なく響き続けている。単なる事故や自然現象では説明がつかない、

人為的な破壊が行われているのだ。それどころか常人にも感知できるレベルの、強烈な魔力の波動までもが伝わってくる。那月の注意が、完全にそちらに引きつけられたその瞬間、

「姫柊、走れ！」

古城は咄嗟に、雪菜の手を引いて駆け出した

「え、あ……はい！」

古城の意図を理解して、雪菜も彼の手を握り返してくる。

「あ、待て、おまえら――」

背後で那月がなにか叫んでいたが、雪菜も古城も、常人とは比較にならない運動能力の持ち主だ　那月が咄嗟に張り巡らせた結界も、雪菜が気合い一閃で破壊する気配があった。完全に虚を衝かれた那月には、もはや追いすがる術はない。

助かった、と古城がホッとしたのもつかの間、

「覚えていろ、暁古城！」

捨て台詞のような那月の言葉が、夜の街にこだまする。

しかし彼女のその声もまた、断続的に響き続ける巨大な爆発音にかき消される。

疾走する古城が表情を歪める。那月の言葉に動揺したわけではない。この爆発と異変を街に引き起こしているものの正体に気づいたからだ。

それは圧倒的に強大な、意志を持ち荒れ狂う魔力の塊、破壊の権化。

そして今の暁古城に、限りなく近しい存在であるもの
吸血鬼の眷獣だった。

5

「先輩……さっきのは……」
人工島の岸壁まで走り続けて、雪菜はようやく立ち止まった。ほとんど息を乱していないが、頬がかすかに赤らんでいる。自分が古城の手を握り続けていたことに気づいたせいだろう。
しかし彼女は手を離さない。古城が自分から離れることを、警戒しているような態度だった。
「ああ。眷獣だったな。しかもあの魔力……宿主はたぶん相当な大物だ」
顔をしかめたまま古城が言う。その直後、巨大な爆発が再び巻き起こった。
人工島の上空に、直径数十メートルもの火球が出現し、少し遅れて突風が襲ってくる。まるで嵐の夜のように海面が白く波打ち、人工の大地が震えて軋んだ。
爆発の炎を浴びて、漆黒の妖鳥の姿が浮かび上がる。
見えたのは一瞬だが、古城たちにははっきりとわかった。やはりあれは濃密な魔力によって生み出された召喚獣。吸血鬼の眷獣だ。
それも数日前に雪菜と戦ったような小物ではない。島を震わすほどの破壊力から察するに、

長老や貴族とはいわないまでも、名のある〝旧き世代〟の使い魔だろう。
それが実体化して暴れている。吸血鬼が何者かと戦っているのだ。
戦場になっているのはアイランド・イーストの倉庫街　ほとんど無人の工業地区だが、すでに大規模な工場火災程度の被害が出ているのが遠目にもわかる。
しかし、それほどの被害が出ていながら戦闘はなおも続いている。
その事実が意味するのは、ただひとつ　〝旧き世代〟の吸血鬼が戦っている相手もまた、〝旧き世代〟と同格の戦闘力を持っているということだ。
古城たちの住むこの街のどこかで今、誰かが、強大な旧い世代の吸血鬼を追い詰めている。
とてつもない非常事態だった。
「先輩、すみません。ここでお別れです。先輩は先に自宅に戻ってください」
雪菜が、一方的にそう言って手を離す。古城は彼女を唖然として眺める。
「姫柊？」
「わたしは、なにが起きているのか調べてきます。安全が確認できたら、すぐに戻りますから」
「ちょっと待て、姫柊。見に行くのなら、俺も　」
古城が慌てて雪菜を呼び止めた。雪菜は呆れたような顔で古城を見返し、
「先輩が行ってどうするんですか。ご自分の立場を少しはわきまえてください」
「た、立場？」

「はい。あそこで戦っているのは吸血鬼で、先輩は第四真祖なんですよ」
「あ、ああ……？」
「もし先輩が、あの場での戦いを止めるつもりで、どちらかに下手に手を出したらどうなると思ってるんですか。第四真祖がほかの血族の吸血鬼を攻撃すれば大問題です。逆に相手の側についたら、それはそれで揉めます」
雪菜にきつい眼差しで睨まれて、古城は、うっと口ごもる。
「なんだよそれは……だったら、俺はどうすればいいんだ……!?」
「だからなにもしなくていいんです。邪魔ですからさっさと帰ってください。先輩にそういう危険なことをさせないために、わたしがここにいるんですから」
「待てよ、それなら無理に姫柊が行く理由もねーだろ。俺が手を出さないよう監視してろよ」
今度は古城が雪菜を睨んで言った。しかし雪菜は迷わず首を振り、
「先輩が本当に大人しくしていてくれるのなら、そうしますけど……でも、それは無理ですよね。先輩の知り合いが、戦闘に巻きこまれているかもしれないのに――」
雪菜の冷静な指摘に、古城は沈黙した。
あれほどの規模の戦闘だ。いくら戦場が市街地から離れていると言っても、民間人が巻きこまれていないとは限らない。そしてこの島には古城の知り合いも多いのだ　せめて彼らの安全が確認できれば、古城も安心していられるのだが

「だから、わたしが確認してきます。これも任務の一環です」
きっぱりと言い切る雪菜を見て、古城は思わず声を荒らげ、
「なんで姫柊がそこまでする必要があるんだ　魔族特区の治安維持なら、警察か特区警備隊の仕事だろ!?」
「よほどの攻魔師でもない限り、眷獣が暴れ回っているような戦場には入れませんよ。でも、私にはこれがありますから――」
そう言って雪菜は、背中のギターケースから武器を抜いた。
小気味いい金属音を立て、銀の槍が刃を展開する。
「真祖と戦うために与えられた装備です。あの程度の眷獣、雪霞狼の敵ではありません」
「姫柊……」
「ですから、先輩は凪沙さんの傍にいてあげてください」
なおも不安げな表情を浮かべる古城に、雪菜が優しく微笑んでみせた。
その儚げな笑顔に古城は戸惑う。
「え？」
「聖域条約にも、魔族の自衛権は明記されてます　家族や庇護すべき領民を守るためなら、先輩が力を使ってもなんの問題もありませんから」
動揺する古城の隙を衝いて、雪菜は勢いよく駆け出した。

最初からタイミングを見計らっていたのだろう。人工島の断崖から飛び降りた彼女の足元には、貨物運搬用のモノレールの姿があった。走行中の車両の上に、雪菜は危なげなく着地する。自動運転のモノレールは、戦闘が行われている絃神島東地区へと向かっていた。

「姫柊……！」

南地区の岸壁に、人取り残された古城は、眼前のフェンスを荒々しく殴りつける。

倉庫街では、今も戦闘が続いている。燃えさかる炎の中に浮かび上がった眷獣が、何者かの攻撃に貫かれ、悲鳴のような咆吼を上げた。

あとには巨大な爆発だけが残される――

6

倉庫街のあちこちで、大規模な火災が起きていた。

街灯の消えた街を、燃えさかる炎が紅く照らしている　自動消火装置も動いていたが、火の勢いが衰える気配はない

幸いにも、街の中に人の気配はなかった。もともと人口の少ない地区だし、倉庫街の管理をしていた人々も避難を終えているらしい。

爆発に巻きこまれて、送電が停止したのだろう。アイランド・イーストに到着した直後に、

モノレールが停止した。

雪菜は、動かなくなった車両の屋根から飛び降りて、眷獣が暴れている現場へと向かう。

戦闘中の眷獣は、巨大なワタリガラスに似た漆黒の妖鳥だった。

翼長は余裕で十メートルを超えている。闇を固めたような巨体は、時折、溶岩に似た琥珀色に輝き、吐き出す火球が周囲に凄まじい爆発を巻き起こす。その全身を包みこんでいるのは暴風だ。どうやらあの眷獣は、爆発そのものを象徴しているらしい。

ビルの屋上に立って眷獣を操っているのは、上品な背広に身を包んだ長身の吸血鬼だった。年齢は三十歳前後に見えるが、この魔力の凄まじさを見る限り、おそらくその数倍は生きているに違いない。〝旧き世代〟の名にふさわしい、圧倒的な存在感と迫力である。

紘神市内の企業に雇われた幹部社員か傭兵、あるいは夜の帝国から派遣されてきた軍の高官クラス。いずれにしても相当な大物だろう。

だが、それほどの力を持つ吸血鬼が攻撃を繰り返しているにもかかわらず、いっこうに戦闘が終わる気配はない。それどころか男の顔には、くっきりと焦りと疲労の色が浮かんでいた。

〝旧き世代〟が、圧倒されているのだ。

「あれは……」

闇を裂いて伸びた閃光に気づいて、雪菜が困惑の声を出す。

それは虹のような色に輝く、半透明の巨大な腕だった。

生身の肉体ではない。眷獣と同じように実体化した魔力の塊だ。だが、雪菜の知っている眷獣とはどこか気配が違っている。

数メートル近い長さのその腕が、漆黒の妖鳥と空中で接触する。

そして次の瞬間、妖鳥が苦悶の咆吼を上げた。

妖鳥の翼が根本からちぎれて、溶岩のような灼熱の鮮血が飛び散った。

そして体勢を崩した妖鳥の巨体を、虹色の腕が貪るようにして引き裂いていく。

実体化を保てなくなった妖鳥が、単なる魔力の塊へと変わって地上に落ちる。しかし虹色の腕は攻撃をやめない。屍肉を漁る獣のように、破壊された眷獣の身体を蹂躙する。

「魔力を……喰ってる!?」

その異様な光景に、雪菜は戦慄した。倒したほかの眷獣の魔力を喰らう――雪菜が知る限り、そんな眷獣の存在は聞いたことがない。

そして、その眷獣を操っている宿主の姿を見て、雪菜はさらに動揺した。

虹色の腕の宿主は、雪菜よりもさらに小柄な少女だったからだ。素肌にケープコートをまとった藍色の髪の娘である。人工的な美しい顔立ち。そして薄水色の無感情な瞳――

「吸血鬼……じゃない!? そんな……どうして、人工生命体が眷獣を!?」

呆然と立ち尽くす雪菜の背後で、ドッ、と重いなにかが投げ落とされたような音がした。

驚いて振り返った雪菜が見たのは、重傷を負って倒れた長身の吸血鬼の姿だった。

肩口から深々と斬り裂かれた傷は、心臓にまで届きかけている。人間ならばもちろん即死。並の吸血鬼でも同じだろう。いまだに息があるだけでも、〝旧き世代〟の肉体の強靭さがうかがえる。

だが、普通なら即座に再生を開始するはずの彼の肉体には変化がない。眷獣を失い、弱っているというだけではないだろう。なにか強力な呪力のこもった攻撃を受けたのだ。

その種の攻撃ができるのは人間の攻魔師――それも祓魔師などと呼ばれる高位技能の使い手だけである。だが、それは決してあり得ないことだった。

祓魔師とはすなわち高位の聖職者。地位のある司祭や僧侶なのである。彼らが、自ら市街地での私闘を行うはずがない。そんなことが許されるはずがないのだ。

「ふむ。目撃者ですか。想定外でしたね」

聞こえてきた低い男の声に、雪菜がハッと顔を上げた。

燃えさかる炎を背にして立っていたのは、身長百九十センチを超える巨軀の男だった。右手に提げた半月斧の刃と、装甲強化服の上にまとった法衣が、鮮血で紅く濡れている。吸血鬼の返り血だ。

「戦闘をやめてください」

雪菜が、法衣の男を睨んで警告する。

男は、そんな雪菜を蔑むように眺め、

「若いですね。この国の攻魔師ですか……見たところ魔族の仲間ではないようですが」
値踏みするような表情で淡々と言う
男の身体から滲み出る殺気を感じて、雪菜は重心を低くした。
「行動不能の魔族に対する虐殺行為は、攻魔特別措置法違反です」
「魔族におもねる背教者たちが定めた法に、この私が従う道理があるとでも？」
男は無造作に言い捨てて、巨大な戦斧を振り上げる。
「くっ、雪霞狼――！」
槍を構えて、雪菜が疾走った。負傷した吸血鬼を目がけて振り下ろされた戦斧を、ぎりぎりで受け止める。
「ほう……！」
戦斧を弾き飛ばされた男が、愉快そうに呟いた。巨体からは想像もできないほどの敏捷さで後方に飛び退き、男は雪菜へと向き直る。
「なんと、その槍、七式突撃降魔機槍ですか!?　〝神格振動波駆動術式〟を刻印した、獅子王機関の秘奥兵器！　よもやこのような場で目にする機会があろうとは！」
男の口元に、欲喜の笑みが浮いた。眼帯のような片眼鏡が、紅く発光を繰り返す。男の視界に直接情報を投影しているらしい。
「いいでしょう、獅子王機関の剣巫ならば相手に不足なし。娘よ、ロタリンギア殲教師、ル

ードルフ・オイスタッハが手合わせを願います。この魔族の命、見事救ってみせなさい！」

「ロタリンギアの殲教師!?　なぜ西欧教会の祓魔師が、吸血鬼狩りを　!?」

「我に答える義務はなし！」

男の巨体が、大地を蹴って猛然と加速した。振り下ろされた戦斧が、断頭台のごとき勢いで雪菜を襲う。強化鎧によってアシストされたその斬撃の威力は、装甲車すら容易に引き裂くレベルだ。しかし雪菜は、それを完全に見切って紙一重ですり抜けた。

そして反撃。攻撃を終えた直後のオイスタッハの右腕へと、旋回した雪菜の槍が伸びる。

オイスタッハは、回避不能のその攻撃を、鎧に覆われた左腕で受け止めた。

魔力を帯びた武器と鎧の激突が、青白い閃光を撒き散らす。

「ぬううん！」

男の左腕の装甲が砕け散り、雪菜はその隙に離れて距離を稼いだ　あの屈強な大男が相手では、格闘戦はいかにも分が悪い。一撃離脱で仕留めるべきだと判断したのだ。

「我が聖別装甲の防護結界を一撃で打ち破りますか！　さすがは七式突撃降魔機槍　実に興味深い術式です。素晴らしい！」

破壊された左腕の鎧を眺めて、オイスタッハが満足そうに舌なめずりをする。彼の片眼鏡が、せわしなく点滅を繰り返している。

そんなオイスタッハの姿に禍々しい気配を感じて、雪菜が表情を険しくした。

彼はここで倒さなければならない、と決意する。剣巫としての直感が告げていた。この殲教師をこのまま放置すれば、巨大な災厄をこの地に呼びこむことになる、と。

「――獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る。破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

「む……これは……」

雪菜が厳かに祝詞を唱え、少女の体内で練り上げられた呪力を、七式突撃降魔機槍が増幅。槍から放たれた強大な呪力の波動に、オイスタッハが表情を歪める。

直後、雪菜はオイスタッハに猛然と攻撃を仕掛けた。

「ぬお……！」

閃光のように放たれた銀の槍を、殲教師の戦斧が受け止める。その腕に伝わる衝撃に、彼は驚愕の相を浮かべた。獣人の攻撃すら易々と受け止めた強化鎧が、小柄な少女の攻撃に耐えきれずに数メートル近くも後退。過負荷によって各部の関節が火花を散らす。

しかも雪菜の攻撃はそれだけでは終わらない。至近距離からの嵐のような連撃に、オイスタッハは防戦一方になる。その事実に殲教師は驚愕する。

実は単純な速さでは、人間である雪菜は、獣人や吸血鬼に遠く及ばない。だが霊視によって一瞬先の未来を視ることで、雪菜は結果的に誰よりも速く動くことになる。さらに様々なフェイントを含む高度な武技と組み合わせることで、雪菜は装甲強化服の人工知能ですら回避で

きない攻撃速度を得ているのだった。幼いころからの絶え間ない修練のみが可能とする、剣巫特有の超人的な技能である。

「ふむ、なんというパワー……それにこの速度！　これが獅子王機関の剣巫ですか！」

見事、とオイスタッハが賞賛する。雪霞狼の攻撃を受け止めきれずに、半月斧がひび割れ、音を立てて砕け散った。

その瞬間、雪菜の攻撃がわずかに止まる。人間であるオイスタッハを直接攻撃することに、一瞬だけ躊躇してしまったのだ。その一瞬の隙を、オイスタッハは見逃さなかった。

「いいでしょう、獅子王機関の秘呪、たしかに見せてもらいました――やりなさい、アスタルテ！」

強化鎧の筋力を全開にして、殲教師が背後へと跳躍する。彼の代わりに雪菜の前に飛び出してきたのは、ケープコートを羽織った藍色の髪の少女だ。

「命令受諾。執行せよ、〝薔薇の指先〟」

少女のコートを突き破って現れたのは、巨大な腕。それは虹色の輝きを放ちながら、雪菜を襲う。雪菜は雪霞狼でこれを迎撃。巨大な魔力と呪力の激突に、大気が耳障りな音を立てた。

「ぐっ！」

「ああ……っ！」

かろうじて激突に打ち勝ったのは、雪菜だった。〝薔薇の指先〟と呼ばれた眷獣を、銀の槍

がじりじりと引き裂いていく。眷獣の受けたダメージが逆流しているのか、アスタルテと呼ばれた少女が弱々しく苦悶の息を吐く。そして、

「あああああああああああ――っ！」

少女が絶叫した。彼女の細い背中を引き裂くようにして、もう一本の腕が現れる。

眷獣が一体、というわけではなく、左右一対でひとつの眷獣なのだろう。しかしそれは、独立したべつの生き物のように頭上から雪菜を襲ってくる。

「しまっ――」

雪菜の表情が凍りついた。

雪霞狼の穂先は、眷獣の右腕に突き刺さったままだった。もし一瞬でも雪菜が力を抜けば、手負いの右腕が槍ごと雪菜を押し潰すだろう。

そしてその状態では、雪菜は、左腕の攻撃をよけられない――！

旧き世代の眷獣をも凌駕するその攻撃に、脆弱な人間の肉体が耐えられるはずもない。雪菜を待っているのは確実な死だ。

優れた剣巫であるがゆえに、その結末を雪菜は一瞬で理解した。

死を覚悟するほどの時間はなかった。

ただ最後に一瞬だけ、見知った少年の姿が脳裏をよぎる。ほんの数日前に出会ったばかりの、いつも気怠そうな顔をした少年の面影が。

自分が死ねば、きっと彼は悲しむだろう
だから死にたくない、と雪菜は思った。そう思った自分自身に雪菜はひどく驚き、そして、
「姫柊ィ――――――！」
思いがけないほど近い距離から、その少年の声が聞こえてきた。
第四真祖、暁古城の声が。

7

「おおおおおおおおォ！」
古城は単純に握りしめた拳で、巨大な腕の形をした眷獣を殴りつけていた。
特になにか深い考えがあったわけではない。だが、魔力の塊とはいえ実体化した眷獣が相手なら、魔力をこめた拳で殴ればどうにかなるだろうと思ったのだ。
結果は、予想以上のものだった。
虹色に輝く眷獣の左腕が、ダンプトラックと激突したような勢いで吹き飛んだ。そして眷獣の宿主である少女も、その衝撃に引きずられて転倒し、雪菜と戦っていた右腕が消滅する。
「なっ……」
雪菜は呆然と目を見張って、そのでたらめな光景を眺めていた。

戦闘と呼ぶのも馬鹿馬鹿しいほど原始的な、力任せの古城の攻撃に呆れているらしい。彼女の気持ちはよくわかる。だが古城には魔術の心得がないし、第四真祖などと呼ばれていても、吸血鬼らしい特殊能力はなにひとつ使い方がわからない　ほかに攻撃手段がなかったのだ。

「なにをやってるんですか、先輩!?　こんなところで　!?」

どうにか気を取り直した様子で、雪菜が訊いてくる。古城は怒りを隠そうともせずに、

「それはこっちの台詞だ、姫柊！　このバカ！」

「バ、バカ!?」

「様子を見に行くだけじゃなかったのかよ。なんでおまえが戦ってんだ！」

「そ、それは――」

うー、と雪菜が物言いたげに口ごもる。古城も詳しく事情を理解しているわけではないが、いろいろあったのだろう、ということは想像できた。

古城は空を飛べないし、空間転移魔法などももちろん使えない。一基の人工島を連結する長さ十六キロの連絡橋を、全力疾走で走破するのはさすがにきつかった。

そして古城がようやく追いついたときには、最初に暴れていた眷獣はすでに倒されて、雪菜は謎の法衣の男と戦闘の真っ最中だったのだ

「で……結局、こいつらはなんなんだ？」

「わかりません。あの男は、ロタリンギアの殲教師だそうですが……」

武器を失った法衣の男を睨んで、雪菜が答える。古城は露骨に混乱し、

「ロタリンギア？　なんでヨーロッパからわざわざやってきて暴れてるんだ、あいつは？」

「先輩、気をつけてください。彼らは、まだ……」

雪菜の警告が終わるよりも先に、ケープコートを着た少女が立ち上がった。彼女の背後には、虹色の眷獣が実体化したままだ。古城に殴られたダメージは、眷獣本体には及んでないらしい。

「先ほどの魔力……貴方は、ただの吸血鬼ではありませんね。貴族と同等かそれ以上……もしや第四真祖の噂は真実ですか？」

破壊された戦斧を投げ捨てて、殲教師が言う。

その殲教師を庇うように、前に出たのは藍色の髪の少女だった。

少女の無表情な瞳から、殺意は読み取れない。ただ、その唇が静かに言葉を紡ぐ。

「再起動、完了。命令を続行せよ、〝薔薇の指先〟――」

彼女の言葉に従って、巨大な腕が鎌首をもたげる蛇のように伸びた。

「やめろ、俺はべつにあんたたちと戦うつもりは――」

「待ちなさい、アスタルテ。今はまだ、真祖と戦う時期ではありません！」

古城と殲教師が、同時に叫ぶ。

少女が困惑したように瞳を揺らした。しかし、すでに宿主の命令を受けた眷獣は止まらない。

虹色の鉤爪を鈍く煌めかせ、猛禽のように古城を狙って降下する。

「先輩、下がってください！」

槍を構えた雪菜が、古城を突き飛ばすようにして飛び出した。

だが、まるでその雪菜の動きを予期していたかのように、もう一本の腕が少女の足元から、放たれた。地面をえぐるようにして飛来するその右腕の不意打ちに、さすがの雪菜も反応が遅れた。

「姫柊！」

古城が咄嗟に雪菜を突き飛ばす。無防備だった背後からの衝撃に、雪菜は為すすべもなく吹き飛んだ。目標を見失った右腕が眼下から、そして左腕が頭上から古城を襲う。

「せ、先輩っ!?　なんてことを――！」

受け身をとった雪菜が、体勢を立て直す。だが、古城を援護するには遅すぎた。

「ぐっ……！」

拳を握った古城がかろうじて迎撃できたのは、右腕だけだった。そして頭上からの攻撃を避けきれなかった古城の腕から、鮮血が散る。

そう思われた瞬間、古城が叫んだ。まるで別人のような真剣な声で

「待て……やめ……ろおおおおお　――――！」

その声は、敵ではなく自分自身に向けられているかのようだった。

古城の瞳が真紅に染まり、喰いしばる口元からは牙がのぞく。

そして傷ついた彼の腕から迸ったのは、鮮血ではなかった。
肌を裂くようにして出現したのは、目も眩むような青白い輝き。灼熱の閃光が視界を埋め尽くす。そして襲ってきた凄まじい衝撃に、虹色の眷獣が弾け飛ぶ。
「ぬ、いけません……アスタルテ！」
殲教師が人工生命体の少女に向けて怒鳴った。
だが、その怒号は衝撃波が生み出す爆音にかき消された。
古城の腕から放たれたのは、実体化した濃密な魔力の塊だった。すなわち眷獣と呼ばれている存在だ。だが、それは人々が知る眷獣という次元を超えている。
それはすべてを破壊する嵐のような雷撃だった。
制御不可能な巨大な稲妻が地上の建物を薙ぎ払い、生み出された衝撃波が暴風となって吹き荒れる。古城の姿は完全に光に呑みこまれ、周囲に無差別に雷の矢を放っていた。
まるで最大規模の雷雲が、地上に突然出現したような有様だ。
絃神島全体が爆撃されたように揺れ動き、周辺の海が津波のように荒れ狂う。
天変地異にも似たその状況が続いたのは、せいぜい二十秒かそこらの出来事だった。
巨大な雷も、爆風も、やがて何事もなかったかのように綺麗に消滅する。
だが、破壊の爪痕だけは消し去ることはできなかった。
そこに残されたのは、扇形にえぐれて廃墟と化した倉庫街だ。

かろうじて無事だったのは、雪霞狼の結界に守られていた雪菜。そして雪菜が咄嗟に庇った瀕死の〝旧き世代〟の男だけだった。

「これが……先輩の……第四真祖の眷獣……」

あまりにも巨大な破壊の痕跡に、声を震わせながら雪菜が呟く。

殲教師と人工生命体の少女の姿はない。

人工島の表土がごっそりとえぐり取られて、その下の地下構造部が剝き出しになっている。どうやら彼らは、そこから逃走したらしい。

爆心地とおぼしき場所には、古城が力尽きたようにぐったりと倒れている。パーカーの左袖が破れていたが、彼自身は無傷。単に疲れて眠っているだけのようだ。

雪菜は溜息をつきながら、もう一度周囲を見回した。

倉庫街の被害はかなりのものだが、そのほかの地区も相当だ。

港に停泊していた船舶は無傷の船を捜すのが難しいほどだったし、モノレールの線路も倒壊している。落雷の影響で島内のあちこちが停電し、そのために失われた企業データなどの損害額はどれほどになるのか検討もつかない。

雪菜は、銀の槍を格納状態に戻しながら、倒れている古城のもとへと歩いていく。古城は、まるで鬱積したストレスを発散し終えた直後のように、すっきりとした表情で眠っており、

「……どうするんですか、まったくもう」

そんな古城の寝顔を眺めて、雪菜は弱々しく溜息をついた。

陳彦の剣

福島県

1

翌日のメディアは、紘神市で発生した謎の爆発事件のニュース一色に染まっていた。

新聞の一面には破壊された倉庫街の写真がでかでかと掲載され、テレビや動画サイトでは目撃者の談話が延々と再生されている。

被害に遭ったのは、大手食品会社の倉庫などが六十棟ばかり。停電したのは二万世帯に及び、そのうちの半分近くは今朝になっても復旧の目処が立っていない。アイランド・イーストとサウスを結ぶ連絡橋とモノレールの軌道が大破し、直接的な被害額だけでも約七十億円。間接的なものまで含めると被害総額は五百億円にも上るといわれている。死傷者が出なかったことだけが、ほとんど唯一の救いだった。

「うーわー、恐いねー。これって原因不明なんだよね」

制服にエプロン姿の風沙が、朝食の後片づけをしながらのんびりと話しかけてくる。

「ら……落雷による倉庫火災……じゃないかって話だぞ」

眠気覚ましのコーヒーをすすっていた古城は、声を上擦らせながらそう答えた。疲れたような顔をしているのは、昨晩、一睡もできなかったせいである。

雪菜に連れられて事故現場を脱出し、匿名で警察に電話したり、瀕死の〝旧き世代〟を病院

に運びこんだりしているうちに、いつの間にか夜が明けてしまっていたのだ。
「落雷なんて、そんなの誰も信じてないよー。爆弾テロとか輸送中のロケット燃料の誤爆とか、みんないろいろ言ってるけど、凪沙は隕石が怪しいと思ってるんだよね。ツングースカ大爆発だっけ？　昔これによく似た事件がロシアであったんだって、スドーさんが言ってた」
「隕石か……だったらよかったんだけどな……」
古城は遠い目をして、ぼそりと呟いた。メディアの報道を見る限り、昨夜の大破壊が古城の仕業だとは、今はまだバレてないらしい。被害の規模があまりにも大きすぎて、たった一人の吸血鬼が引き起こした事故だとは誰も想像しなかったのだろう。
しかし、楽観できる状況でもない。
事故の直前に、現場で暴れていた巨獣を目撃した者は多いはずだ。そのセンから古城の存在が明るみに出てもおかしくない。それ以前に、雪菜が全部バラしてしまう可能性だってあるわけで、それを考えるとおちおち眠る気にもなれなかった。
被害総額五百億円。どうやっても弁償できんな、と古城は思う。
ちなみに凪沙の言うスドーという人物は、絃神市ローカルの芸人兼ラジオ・パーソナリティの名前である。べつにどうでもいいことだが。
「それじゃあ、あたし、チア部のミーティングがあるから、先に行くね」
バタバタと部屋の中を走り回りながら、凪沙が言う。古城は投げやりに手を振って、

「おー」
「戸締まりよろしくね。古城君も遅刻しないでね。コーヒー飲み終わったら、マグカップは洗って乾かしといてね　出かける前にちゃんと電気消したか確認して……あ、そうそう、新しいハンカチとティッシュも玄関のとこに出しておいたから　ー」
「いいからさっさと行け」
「はーい」
屈沙が最後まで騒々しく出て行くのを確認して、古城はぐったりと息を吐く。
九月一日。夏休みが終わって最初の登校日だ。
彩海学園は二学期制で、始業式などの特別な行事は特にない。長めのホームルームが終わったら、あとは通常授業の予定である。ただでさえ休み明けで気が重いというのに、宿題がまったく終わっておらず、極めつけに昨夜のこの騒ぎ。いっそのこと授業なんかサボって、どこか遠くに旅にでも出かけたい。
古城がぼんやりとそんなことを考え始めたとき、いきなり玄関のチャイムが鳴った。
インターホンのモニタに映っていたのは、制服姿にギターケースを背負った雪菜だった。
「姫柊……？　どうしたんだ、こんな時間に？」
不吉な予感を覚えながら古城が訊く。雪菜はいつもの冷静な口調で、
『お迎えに来ました。先輩、そろそろ出ないと遅刻しますよ』

「迎えって……一緒に登校するつもりなのか？」
『無理に一緒でなくても構いませんから、隠れて監視したほうがよければそうしますけど』
「どっちにしても監視はするってことか……わかった、ちょっと待っててくれ」
古城はインターホンを切ると、通学用のバッグを持って玄関へと向かった。
ドアを開けて外に出ると、通路に立っていた雪菜が礼儀正しく頭を下げてくる。
「おはようございます、先輩」
「ああ、うん」
古城と同様、ほとんど寝ていないはずなのに、きっちりと身なりを整えた雪菜の姿からは、疲れた雰囲気は感じられない。鍛え方が違うのだろう。あるいは若さのせいかもしれない。しかし、さすがに物憂げな表情までは隠しきれていなかった。
「……昨夜は、ずいぶん派手にやらかしましたね」
沈黙したままエレベーターに乗りこんだ雪菜が、怒りを含んだような口調で言う。
う、と古城は目を逸らす　どうやら雪菜が迎えに来たのは、登校中に古城に説教をするのが本当の目的だったらしい。
「被害総額五百億円だそうですね」
「ううう……」
「先輩は不老不死の吸血鬼ですから、五百年くらいかければ弁償できるかもしれませんね　そ

れでも毎年一億円ずつ返済しなきゃなりませんけど。利子はいくらくらいになるんでしょうね」
「……もしかして、もう昨日のことは報告したのか？　獅子王機関だかなんかの上司に？」
隣にいる少女の横顔を、おそるおそる見つめて古城は訊いた。雪菜は薄く溜息をつき、
「本当は報告しなければいけないんですけど、少し迷ってます」
「迷ってる？」
生真面目な彼女の口から出た意外な言葉に、古城は少し驚いた。
雪菜は困ったように顔を伏せ、
「はい。昨夜の件はわたしにも責任がありますし、それに必ずしも先輩だけのせいではないと思うので……わたしのことも助けてくれましたし……あの、ありがとうございました」
消え入りそうな小さな声で、彼女は最後のひと言を告げる。
「そ、そうか。そうだよな……よく考えたら、あれって正当防衛だし。俺は、自分の身を守るために仕方なく自衛権を行使したというか、専守防衛？」
古城は思わず強気になって、それっぽい言葉を口にしてみる。雪菜はそんな古城を見て残念そうに首を振り、
「ですけど、証拠がないですよね」
「証拠？」
「はい。もちろんわたしは証言しますけど、どこまで信じてもらえるか……獅子王機関と警察

は、もともと仲がよくないですし。むしろ、わたしたちがあの現場にいたことのほうが問題視されてしまうかも」

「そ、そうなのか……」

自分の置かれた厳しい状況を再確認して、古城はへこんだ。縦割り行政の弊害だかなんだか知らないが、政府の魔族対策部門の中でもいろいろ対立があるらしい。考えてみれば雪菜はまだ中学生なわけで、彼女の証言に証拠能力が乏しいという話は実によくわかる。もちろん死にかけていた〝旧き世代〟の男に、古城の正当防衛を証言させるのも無理だろう。

重苦しい雰囲気のまま二人は歩き続けて、学校方面に向かうモノレールに乗る。

車窓からは、破壊された倉庫街の姿がよく見えた。人工島間を結ぶ連絡橋も、途中でへし折れた無残な姿をさらしている。

いつもに比べてモノレールの車内が混んでいるのは、運行ダイヤが乱れているせいだろう。これも昨夜の事故が原因である。自分に責任があるだけに、古城には文句を言う権利もない。

暑苦しく混み合った車両に詰めこまれて、雪菜も少し不機嫌な顔になっている。

「だいたい、先輩はやり過ぎなんです。たしかに危険な状況でしたけど、あれは明らかに過剰防衛ですよ。あそこまでやる必要はなかったはずです」

「俺もべつに好きであんなことをしたわけじゃねーよ」

古城がふて腐れたようにボソボソと呟く。それを苦し紛れの言い訳だと受け取ったのか、雪

菜は眉を吊り上げて古城を睨み、
「だったらどうして、あんな無茶な破壊を眷獣に命じたんですか？」
「だから命令してねーっての。あのビリビリは俺の眷獣ってわけじゃねーんだよ」
「どうしてそんなすぐにバレるような嘘をつくんですか」
雪菜が、手のかかる子どもを相手にしているような表情で溜息をついた。
「第四真祖〝焔光の夜伯〟は、神話の怪物たちにも匹敵する、強大な十二体の眷獣を持ってると聞きました。実際にあれだけの被害を出しておいて、今さら違うとは言いませんよね？」
「いや、だから誤魔化そうとしてるわけじゃなくてさ」
古城がうんざりと声を荒らげる。
「そこにいるってのと自由に使えるってのは、全然べつの話だろ。あいつらは俺の命令なんか聞きゃしねーんだよ」
「……それは、どういうことですか？」
古城の言葉が、単なる出任せではないと直感したのだろう。事態の深刻さに気づいて、雪菜が真剣な表情になる。古城は、言いづらそうに頭をかきながら、
「あいつらは、俺のことを宿主だと思ってないってこと。たしかに俺はアヴローラのやつから眷獣どもを受け継いだけど、あいつら自身はまだそれを認めてねーんだ」
「アヴローラ……というのは、先輩が前に言ってた先代の第四真祖のことですね」

雪菜が古城を見上げて確認する。古城はぞんざいにうなずいて、
「そんなわけだから、俺はあいつらを制御できないんだ。普段はどうにか抑えつけてるけど、さすがにほかの眷獣に攻撃されたりするとな」
「昨夜のように暴走してしまう……ってことですか？」
「まあ、そうかな。それに喚び出そうとしても、出てきてくれるとは限らないと思う。試したことがあるわけじゃないけど」
「あたりまえです。試さないでください」
雪菜がむっつりと怒ったように言った。
「……でも、今の話が本当だとしたら、先輩は、わたしが思っていた以上に危険な存在ですね。どうにかして、きちんと使い魔を制御できるようになってもらわないと……」
そう呟きながら、雪菜は真顔で考えこむ。
古城は、そんな彼女をしばらく黙って眺めた。思わず、本音が口をつく。
「姫柊って変なやつだよな」
「えっ……そうですか？」
雪菜が、心外だというふうに目を大きくした。
「そんなこと先輩にだけは言われたくはないですけど。わたしのどこが変なんですか？」
「だってな……今の俺の話を聞いてたら普通はそんなこと考えないだろ。眷獣を制御できない

吸血鬼なんか、危険だから近づかないようにしようとか、いっそ滅ぼしてしまおう、くらいのことは思うかもしれないけど」

古城が苦笑混じりに言う。雪菜は自省するように自分の胸元に手を当てて、

「そうですか？　言われてみればそんな気もしますけど……でも、相手は先輩ですし」

「……どういう意味だ？」

「いえ、べつに深い意味は。ただ、そんな悪い吸血鬼ではないと思うので。少しだらしなくて、たまにいやらしいだけで」

出会ってからの記憶を再生するように目を細めて、雪菜が言った。冗談を言っているような口調ではない。どうも本気でそんなふうに思っているらしい。

反論するのも面倒くさくなって、古城は無言で唇を歪める。

モノレールが学園前の駅に到着し、古城たちと同じ制服を着た生徒たちがわらわらと車両を降りていく。雪菜はパスケースを取り出しながら、

「でも、先輩が本当に第四真祖の力を受け継いだというのなら、なぜ眷獣たちを制御できないんでしょうか？」

ふと思いついたようにそう呟いた。古城は彼女から目を逸らしながら、少し声を低くして、

「それは、たぶん俺が吸血童貞だからだろ」

雪菜は首を傾げて古城を見た。

「吸血……童貞？　童貞とはどういう意味ですか？」

本気で訊いてんのか、と古城はうがった目つきで雪菜を見る。しかし雪菜は、不思議そうに目を瞬いているだけだ。そういえばこの子はどこかの名門女子校育ちで、しかも剣巫とやらの修行に明け暮れていたんだっけな、と古城は思い出す。

「つまり未経験者ってこと。他人の血を吸ったりとか、そういうのを俺はしたことねーから」

古城は、なるべく当たり障りのない言葉を選んで説明する。

実際のところ、古城が、眷獣だけでなく吸血鬼らしい能力をなにひとつ使えないのも、そのことと無関係ではないだろう。今までは、特にそれを不便に感じたことはなかったが。

「ああ、童貞というのはそういうことですか……え？　したことがない？」

雪菜が驚いたように訊き返してくる。吸血経験がないという古城の告白と、吸血鬼の真祖というイメージが、彼女の中で上手く結びつかなかったらしい。

「未経験って、先輩……そう、なんですか……？」

「そんなおかしな話じゃねーだろ。俺はついこないだまで普通の人間だったんだから」

「それはそう……ですけど……でも」

戸惑いながらも、雪菜はどことなく嬉しそうだ。一方の古城は、苦々しげに表情を歪めて、

「ていうか、こんなところで未経験とかしたことがないとか、大声で言うのはやめてくれ」

「え、どうしてです？　先輩が自分で言い出したのに……」

「いやだからそれはだな……！」

どう説明すればいいものかと苦悩しつつ、古城は雪菜の耳元に顔を寄せた。その直後、

「おぃーっす、古城」

背後からの衝撃が、いきなり古城を襲ってきた。古城の首に馴れ馴れしく腕が巻きついて、聞き覚えのある声がする。

「おまえね、こんな朝っぱらからなんつう際どい言葉を女の子に言わせてんのよ」

「や、矢瀬？」

朝っぱらからテンション高めの口調で声をかけてきたのは、首にヘッドフォンをぶら下げた短髪の男子生徒だった。ちょうど同じモノレールに乗っていたらしい。

矢瀬は、古城と肩を組んだまま改札機をくぐり、

「おう……って、あれ、凪沙ちゃんじゃないんか。誰だ？　うちの中等部にこんな子いたか？」

隣を歩いている雪菜に気づいて、少し驚いたように古城の顔を見る。古城は鬱陶しげに矢瀬を突き放し、

「転校生だよ。凪沙と同じクラスの」

「ほー、それはそれは……なんでまた古城が、その転校生ちゃんと一緒に登校してるんだ？」

「家が近所だから来る途中に会っただけだ。だったら話くらいするだろーが、普通」

古城は平静を装いながら答える。いちおう嘘はついていない。たとえ会ったのが玄関を出て

歩目の地点でも、学校に来る途中だったのは間違いないからだ。
「姫柊雪菜です。矢瀬基樹先輩ですね？」
礼儀正しく頭を下げて、雪菜が言う。矢瀬は不意にご機嫌な表情になって、
「あれ、なに？　俺の話もしてくれてたわけ？」
「いえ、暁先輩の報告書に、矢瀬先輩の情報も載っていたので」
「は？　報告書？」
疑問符の浮かんだ表情の矢瀬に見つめられて、雪菜は自分のミスを悟ったらしい、かすかに引き攣った無表情で首を振った。
「いえ、なんでもありません。冗談です」
「お、おう。まあ、よろしくな」
矢瀬はフレンドリーな笑顔でグッと親指を立て、
「そういや、あんた、バンド少女なのか？　どういうジャンル、演奏ってんの？」
「バンド……ですか。いえ、わたしは音楽にはあまり詳しくないので」
「え？　いや、だって、その背中のってギターっしょ？　ベースのほう？」
「あ……そうですね。そうでした」
背負ったギグケースの存在を思い出して、雪菜が慌てて言い繕う。
そして彼女は、不審げに眉を寄せる矢瀬からぎこちなく目を逸らし、

「あの、すみません、先輩方。わたしは、ここで」
「あ、ああ。またな、姫柊」
手を振る古城に会釈して、雪菜はそのまま中等部の校舎へと走り去っていった。
そんな彼女の後ろ姿を、矢瀬はしばらく黙って眺めていたが、
「なあ、古城。あの子って、不思議ちゃんなのか？」
「いや、なんつーか、転校してきたばっかで、いろいろ混乱してるんだろ」
「そうなのか……ふうん。なんか、面倒なことにならなきゃいいけどな」
妙に深刻ぶった口調で呟く矢瀬。古城は訝しげな顔で友人を見返し、
「面倒なこと？」
「ああ。俺のピースフルでラブリーなスクールライフを乱さないためにも、せいぜい上手いことやってくれよ、古城。あんなんでも、いちおう俺の大事な幼なじみだからな」
なんのことだ、と困惑しながら、古城は矢瀬の視線を追う。
矢瀬が見ていたのは高等部の校舎。二階にある古城たちの教室だ。窓際に座っていた浅葱が、ちょうど登校してきた古城たちに気づいて手を振っていた。

2

「おはよ、古城。朝っぱらから気の抜けた顔してるわねー。ああ、いつもか」
ホームルーム開始直前の教室。自分の席に着いた古城に、前に座る浅葱が声をかけてくる。
相変わらずの華やかな服装と髪型だが、今日に限っては普段の快活さが影を潜めて、どことなくアンニュイな雰囲気を漂わせている。
古城は同じく気怠い表情で手を振り返し、
「ほっとけよ。ていうか、おまえも眠そうだな」
「そーなのよ。おかげで化粧のノリが悪くてさ……あんたもニュース見たでしょ、昨日の爆発」
目の下のくすみを気にして手鏡をのぞきながら、浅葱が言う。
ぎくり、と古城は若干、挙動不審りながら、
「あ、ああ。いちおうな」
「あのあとすぐに人工島管理公社の偉い人が電話で泣きついてきてさ。災害対策用のメインフレームがぶっ飛んだとかで、代替システムをイチから組まされたわよ。コストをケチって冗長性の低いしょぼいハード買ったりするから、そういうことになるのよね。チューニングもなってないし、インバウンドのフィルタリングもザルだし」
「なんかよくわからんが、大変だったんだな……悪い」
素人には意味不明な浅葱の発言を適当に聞き流しつつ、古城は罪悪感に苛まれる。まさかこんな身近なところまで、昨日の事故の被害が及んでいようとは。

ひっそりと落ちこむ古城の姿を、浅葱は怪訝そうに眺めながら、
「なんで古城が謝んのさ？」
「い……いや、なんとなく。とにかく島民全員が浅葱には助けてもらったってことで」
「そ、そんな大袈裟な話じゃないけどさ」
浅葱が少し照れたように早口で言う。そしていつものニヤニヤ笑いを浮かべ、
「でもまあ、そういうことなら感謝を形にしてもらおうかな。ちょうどキーストーンゲートのレストランで、ケーキバイキングやってるんだー」
「まあ、そのうちな。夏休みの宿題が片づいたら考えてみる」
それとなく誤魔化そうと試みる古城。キーストーンゲートは四基の人工島の連結部　文字どおり絃神島の中心に位置する巨大な建物だ。そして高級ブランドや専門店が集まる、島内いちばんのオシャレスポットでもある。そんな場所にあるレストラン。さぞお高いに違いない。
「宿題ねえ」
浅葱が頬杖をつきながら、わざとらしく無関心な口調で呟く。なぜか横目でちらちらと古城を見ながら、
「そ、そういえば古城は、あのあとどうしたのかなー……なんて」
「あのあと？」
「ほら、昨日、駅で女の子と一緒にいたじゃない。凪沙ちゃんのクラスメイトだっけ？　べつ

にどうでもいいんだけどさ」

「ああ」

そういえばそんなこともあったな、と古城は思い出す。そのあとの騒ぎが強烈だったせいで、遠い昔の出来事のような気がしていたのだが。

「いや、あれから普通に家に帰ったけど」

「そう……なの？」

「俺はただ買い物の荷物持ちをしてただけだからな」

「そ、そうなんだ。ふーん……そっか」

浅葱が表情を明るくして顔を上げた。

そのとき教室の隅っこで、おおっ、と小さなどよめきが起こった。教室の隅っこに集まった男子が数人、一台の携帯電話を囲んで盛り上がっている。

「なんだ、あの騒ぎ？」

駅のトイレに置かれた不審物を見るような目で、古城は興奮状態のクラスメイトを眺めた浅葱が、ちょうど近くを通りかかった友人の築島倫を呼び止める。

「ね、お倫　あれなに？　男子どもはなんで盛り上がってるわけ」

「ああ、あれ？　なんかね、中等部に女の子の転校生が来たらしいよ」

築島倫はこのクラスの学級委員だった。長身でスタイル抜群の大人びた生徒だ。愛想に乏し

く物言いも少々きつめだが、そこがいいという男子も意外に多い。高等部一年男子の間では、踏まれたい女子ランキング堂々の一位に輝き、その結果を知って本人は地味にショックを受けていたそうである。

「中等部の転校生……？」

古城が顔をしかめて低くうめいた。倫は、まったく、と呆れたように男子の輪を眺め、

「すごく可愛い子だって噂になってて、部活の後輩に命令して写真を送らせたんですって」

浅葱が眉間にしわを刻みながら、古城に顔を寄せてきた。

「ねえ、その転校生ってもしかして凪沙ちゃんのクラスの？」

「ああ、たぶんな」

古城も苦い表情でうなずいた。間違いなく雪菜のことだろう。

そんな古城と浅葱のやりとりを、倫は少し面白そうに眺めて、

「暁くんは見に行かなくていいの？」

落ち着いた口調で訊いてくる。

「いや、俺はべつに」

古城が投げやりに答えると、倫は、そう、と満足そうにうなずいて、

「そうね。暁くんには浅葱がいるものね」

「へ？」

古城は驚いて顔を上げた。すぐ近くにいた浅葱と目が合って、二人同時に慌てて離れる。
浅葱は、頬を赤らめながらも平静を装った態度で倫を見上げ、
「またお倫は、すぐそういうことを言う……あたしと古城はそんなんじゃないわよ。中等部のころからの友達ってだけ。ねえ」
「あ、ああ。浅葱は、よく矢瀬とつるんでたから、自然にな」
古城も淡々と事実だけを告げる。倫は、なぜかそれを聞いて残念そうな顔になり、
「じゃあ結局、今年の夏も進展なかったのかな？　矢瀬くんは、年上の彼女と上手くいってるみたいだけど？」
「矢瀬のところの先輩もちょっと変わり者だからな」
一緒にされても困る、と古城はさりげなく主張してみる。
たしかに矢瀬が、ああ見えて彼女持ちだというのは事実だ。高等部に進級してすぐの四月に、二学年上の三年生に一目惚れ。まるでラブコメのような熱烈なアタックを繰り返し、夏休み直前、ついに交際にまで持ちこんだのだった。
倫は、そうねえ、と同意しながらも、意味ありげな表情で古城を見つめ、
「たしかに私もあの先輩は変わってると思うけど。でも、暁くんに変わり者なんて言われたくはないかもね。あなたにも、ずいぶん面白い秘密がありそうな気がしてるんだけどな」
「なんのことだかわかんねーよ、築島」

ふて腐れたようにとぼける古城を見て、倫は、ふふっ、と目を細めて笑った。

彼女の祖父は有名な魔族生態学者だった。そのせいか倫も魔族の特徴に詳しく、時折、古城が普通の人間ではないことに気づいているような素振りを見せる。

だからといって倫が古城を敵対視しているというわけではないし、特に騒ぎ立てるつもりもないらしい。単に面白がって古城のことを観察している、という程度の印象だ。この絃神市では魔族など外国人よりもありふれた存在で、たいした話題にもならないのだ。

彩海学園にも魔族の生徒は何人かいるし、彼らが特別視されるようなこともない。中等部に転入してきた美少女のほうが、よっぽど注目されるほどである。

とはいえ、そんな倫たちも、古城の正体が第四真祖だと知ったらさすがに驚くのだろうが。

「そうだ、古城。昨日言ってた世界史のレポート、持ってきたけど見る？」

いつの間にかすっかり機嫌のよくなった浅葱が、鞄の中からコピー用紙の束を取り出して訊いてきた。古城は間髪いれずにうなずき、

「おう。もちろん」

「キーストーンゲートのケーキバイキング～」

「ぐ……わかったよ……」

断腸の思いでうなずく古城。のちのちの財布の中身の心配よりも、とりあえず目先の宿題をどうにかするのが先決である。

よしよしと笑顔でうなずきながら、浅葱がコピー用紙を古城に手渡そうとして、
「あら？　那月ちゃん、どうしたのかしら？」
そのとき、倫がぼそりと呟いた。ホームルームの時間にはまだ早かったが、漆黒の暑苦しいドレスをまとったクラス担任が、不機嫌そうな表情で教室に入ってきたのだ。
「暁古城、いるか？」
幼女にしか見えない小柄なカリスマ担任教師が、教室の入り口に仁王立ちして古城を呼ぶ。古城は嫌な予感を覚えながら、のろのろと手を挙げて、
「……なんスか？」
「昼休みに生徒指導室に来い。話がある」
那月が冷たく言い放つ。ちなみに今日の彼女の衣装は、ミニスカートのゴスロリ風ドレスに白黒のボーダーニーソックス。相変わらず暑苦しさ全開だが、それでも彼女の普段着の中ではわりと涼しげなほうである
冷ややかな殺気すら漂わせた那月の剣幕に、古城は軽くビビりながら、
「え？　あれ、英語の宿題の提出は、たしか来週の最初の授業までにでいいって……」
「それから中等部の転校生も、緒に連れてこい」
「姫柊を……？　なんで？」
古城の声が無意識に裏返る。

思いがけず噂の転校生の名前が出たことで、生徒たちの間に、ざわっ、と動揺が広がった。静まりかえった教室で、那月は生徒たちの視線を一身に集めながら、

「昨夜の件、と言ったらわかるか？」

「い、いや……なんのことだかさっぱり……」

「とぼけても無駄だ。深夜のゲーセンから逃げ出したあと、おまえら二人が朝までなにをしていたのか、きっちり話してもらうからな」

一方的にそれだけ言い残すと、那月は古城の返事も聞かずに去っていく。あとには脂汗にまみれた古城と、その古城を殺気立った目で睨む男子生徒たちが残された。そして、

「暁くん……今の話、どういうことかな？　詳しく説明してくれる？」

長身の倫が、座っている古城をにこやかに見下ろしながら訊いてくる。いつも物静かな彼女だが、こんなときの迫力は凄まじい。

「つ、築島……あれ、浅葱は？」

古城は思わず助けを求めて振り返る。だが、そこに座っていたはずの浅葱の姿は、いつの間にか消えていた。

「浅葱なら、あっちだよ」

倫が無表情に教室の後ろを指さした。

浅葱はなぜかゴミ箱の隣に立って、手に持っていた紙束をビリビリと無心に破り続けていた。

細切れの紙片に変わっていくその紙束の正体に気づいて、古城は、げっ、と息を呑み、
「ま、待て。それって、もしかして俺が頼んだ世界史のレポート……」
慌てて立ち上がる古城の姿を、浅葱が静かな怒気を孕んだ半眼で睨みつける。そして彼女は無言のまま、
「ふん」
荒っぽく鼻を鳴らして、破り終えた紙をまとめてゴミ箱に投げ捨てた。

3

昼休みが始まってすぐに教室を抜け出し、古城は職員室前の廊下で雪菜と合流した。
午前中の授業を終えて古城は死にそうなほど疲れていたが、雪菜もだいぶ弱っているように見えた。例のギターケースを持ってくるのも忘れているほどだった。古城のクラスメイトたちの興奮ぶりを見ればだいたい想像できるが、学校中の注目を浴びて彼女も大変だったのだろう。
雪菜は携帯電話を持っていなかったので、古城からの呼び出しは凪沙経由で行われた。おかげで凪沙にあれこれしつこく詮索されてしまい、それも、古城たちが体力を消耗した原因のひとつである。
ともあれ古城たちは、どうにかこ人で生徒指導室に到着する。

ドアをノックして中に入ると、すでに那月は先にソファに座って古城たちを待っていた。
「来たか、暁」
偉そうに脚を組んでふんぞり返ったまま、那月が言う。そして彼女は、古城の背後に立っている雪菜に気づいて、ふふん、と唇の端を吊り上げた。
「おまえが岬のクラスの転校生か」
「はい……中等部三年の姫柊です」
美しい人形のような那月の姿に一瞬絶句しながらも、雪菜は、生真面目な口調でそう答える。那月はカリスマ感あふれる態度で、そんな雪菜を満足げに見返し、
「ようこそ、彩海学園へ。歓迎するぞ。余計な揉め事を起こさないでくれるなら、特にな」
「は、はい」
雪菜の返事がぎこちないのは、自分たちが昨日起こした最大級の揉め事のことを思い出したせいだろう。倉庫街を半壊させて、被害総額五百億円。もはや担任教師からの呼び出し程度でどうにかなるレベルの問題ではない。そして、
「さて、おまえたち。昨日、アイランド・イーストで派手な事故が起きたのは知ってるな？」
「え、ええ。それはまあ」
いきなり核心を突いてきた那月の質問に、古城は居心地悪い気分でうなずいた。噴き出した冷や汗で湿った背中に、制服のシャツが張りついて気持ち悪い。

「実は、その現場近くで、〝旧き世代〟の吸血鬼が一匹、確保されたそうだ。重傷を負って死にかけていると、誰かが匿名で消防署に通報したらしい。マスコミにはまだ伏せられているそうだがな。なにか心当たりはあるか、一人とも？」

古城はぶるぶると大きく首を振る。その隣では、雪菜が彫像のように硬直していた。

「その〝旧き世代〟は、表向きは貿易会社の役員だが、密輸組織の幹部ではないかと以前から警察に疑われていたらしい。どうやら昨日の倉庫街は、その取引によく使われていた場所らしくてな。組織の下っ端は、取り引き相手についてなにも知らないと言ってるそうだが」

「……はあ」

古城は警戒の表情で那月を見る。それなりに興味深い情報だったが、それを那月が古城たちに伝える意図がわからない。

「爆発事故が起きる少し前、そのあたりで眷獣が暴れている姿が目撃されている。つまり死にかけで発見された男は、何者かと戦っていた、というわけだ。〝旧き世代〟の吸血鬼を、半死半生の状態にまで追い詰めた敵。こいつが爆発事故に絡んでいる可能性は極めて高いと私は思うわけだが……何者だろうな？」

「さ、さあ」

古城はわざとらしく首を捻りながら、オイスタッハとかいうロタリンギアの殲教師と、彼が連れていた人工生命体のことを思い出す。彼らがいったい何者で、なんのためにあんな戦い

を望んでいたのか、それは古城たちにとっても謎だった。

そんな古城たちの反応を面白そうに見つめながら、那月が何気ない口調で続ける。

「ふむ……ところでな、この島で死にかけの吸血鬼が発見されたのは、実は昨日が初めてではなくてな」

「え……？」

「ここ二カ月ばかりの間に、警察が把握しているだけでも六件ばかり、似たような事件が起きている。今回のやつで七件目だ。さすがに〝旧き世代〟が巻きこまれたのは初めてだが」

那月はそう言って、分厚い資料の束をテーブルの上に乱暴に投げ出した。

どうやって手に入れたのかは知りたくもないが、警察の捜査資料のコピーらしい。街の監視カメラの映像を拡大した、目の粗い写真が貼りつけられている。

「ちょっ……那月ちゃん、これは？」

写真に写っている男たちを見て、古城が表情を硬くした。ちゃん付けで呼ばれたカリスマ担任教師は、不機嫌そうに古城を睨めつけながら、

「今までに襲われた魔族のリストだ。そこに写っているのは六件目の被害者。発見されたのは二日前だそうだが……知り合いか、暁古城？」

「いや、知り合いってわけじゃない……んだけど」

古城は苦々しげに唇を歪めて、隣にいる雪菜の横顔を盗み見た。雪菜は顔色を蒼白にして、

無言で拳を握りしめている。

写真に写っていたのは、獣人と吸血鬼の二人組。古城が雪菜と初めて出会った日に、雪菜をナンパしようとして彼女にぶっ飛ばされた男たちだった。

古城たちの前から逃げ出した後で、彼らは、何者かに襲われて瀕死の重傷を負わされた。

もしそれが昨夜の倉庫街での戦闘と無関係ではないというのなら、彼ら二人を襲った犯人が、あの殲教師たちである可能性は高い。いずれにしても古城たちは、知らないうちに、この事件と深くかかわっていたということになる。

「こいつらは……どうなったんだ？」

「入院中だ。一命は取り留めたそうだが、今も意識は戻っていない。生命力が取り柄の獣人と、不老不死の吸血鬼を相手に、どうやったらそんなことができるのかは知らないが」

険しい目つきの古城を眺めて、那月は優雅に頬杖をついた。

「おまえたちを呼び出したのは、それが理由だ」

「え？」

「なにが目的かは知らんが、この無差別の魔族狩りをしている犯人は、今も捕まっていない。つまり、暁古城、おまえが襲われる可能性もあるということだ」

「あ、ああ……そうか。そっすね」

自分が吸血鬼という自覚がないので、言われるまで気づかなかったが、たしかに那月の言う

とおりだった。オイスタッハは、すでに古城が第四真祖であることを知っている。もしも彼らの目的が無差別に魔族を襲うことなら、次に古城が狙われてもおかしくはない。

実際、オイスタッハは古城と遭遇したときに、たしかに言ったのだ。

今はまだ、真祖と戦う時期ではない、と――

「企業に飼われている魔族や、その血族には、魔族狩りに気をつけろとすでに警告が回っているらしい。おまえにはそんな上等な知り合いはいないだろうから、あたしが代わりに警告してやる。感謝するがいい」

「はあ。それはどうも」

「というわけで、この事件が片づくまでは、しばらく昨日のような夜遊びは控えるんだな」

「は……」

あまりにもさりげない那月の口調に、古城は思わず、はい、とうなずいてしまいそうになる。しかしその直前、雪菜の責めるような視線に気づいて我に返り、

「い、いや、夜遊びとか言われても、なんのことだか」

「……ふん、まあいい。とにかく警告はしたからな」

那月はつまらなそうにそう言って、出て行け、と古城たちを追い払うように手を振った。

古城と雪菜は立ち上がって、言われたとおりに生徒指導室から立ち去ろうとする。

「ああ、そうだ。ちょっと待て、そこの中学生」

そのとき不意に那月が、雪菜を呼び止めた。
え、と雪菜が警戒したように振り返って那月を見る。
那月は黒いドレスの胸元からなにかを取り出して、それを雪菜へと軽く放った。
掌にすっぽりと収まる程度の、小さなマスコット人形だった。反射的にそれを受け取って、雪菜は思わずその人形の名前を口にする。
「……ネコマたん……」
ハッと口元を押さえる雪菜を見上げて、那月はニヤリと不敵に笑った。
「忘れ物だ。そいつはおまえのだろう？」
那月の質問に、雪菜はなにも答えない。意味不明の緊張感で睨み合う那月と雪菜を、古城は途方に暮れたような表情で眺める。
やがて雪菜は静かに会釈し、そのまま部屋を出て行った。
那月はそんな雪菜の後ろ姿を、どこか愉快そうに最後まで眺めていた。

4

「やっぱり南宮先生は知ってたんですね」
渡り廊下の隅っこを、人目を避けるようにして歩きながら雪菜が言った。那月から受け取っ

た人形を妙に嬉しそうに眺めているその姿は、本当にただの女子中学生のようである。

「まあな……その人形、残してきたのは失敗だったな」

古城は深刻な表情で答える。昨夜はうまく逃げたつもりだったのだが、やはり那月には最初からバレていたらしい。またひとつあの担任に弱みを握られてしまった、と軽くへこんでいる古城を見て、雪菜が少し呆れたように溜息をついた。

「いえ。そうではなくて。昨晩、わたしたちが戦った相手のことです」

「え？　あのオイスタッハとかいうオッサンのことか？」

「はい。それにあの人工生命体の女の子も……彼らが魔族狩りのようなことをしていたのを、警察は前から知ってたということですよね」

「ああ……だろうな。市内の登録魔族に警告が出てるようなことも言ってたし」

那月が持っていた写真のことを思い出して、古城はうなずいた。襲われた魔族の映像があったということは、同じ監視カメラにオイスタッハたちの姿が映っていてもおかしくない。警察はおそらく彼らの存在を知っているはずだ。

「ですが、彼らの素性までは、まだ把握してないのだと思います」

「素性？」

「犯人がロタリンギアの殲教師だということです」

「そうか……襲われた連中は、意識不明の重態だとか言ってたな……」

「はい。今のところ、彼らと直接戦って無事だったのは、わたしたちだけですから」
雪菜が冷静に指摘する。あのときオイスタッハがあっさりと自分の肩書きを明かしたのは、あの場で確実に雪菜を倒す自信があったからだ。アスタルテという少女の戦闘能力を考えれば、それが過信だったとは言い切れない。しかし結果的に古城の乱入によって、雪菜は無事に帰還することになった。彼らにとっては大きな誤算のはずである。
「どうしてさっき那月ちゃんにそのことを言わなかったんだ？　ああ見えても、あの人は攻魔師資格保持者だぜ。警察にも顔が利くみたいだし」
「先輩……本気で言ってるんですか？」
「え？」
雪菜に半眼で睨まれて、古城は戸惑う。なぜか怒らせてしまったらしい。
「攻魔師資格ならわたしだって持ってますよ。どうして獅子王機関の人間が、警察に泣きつかなければいけないんですか」
「いや、どうしてってことはないんだけど」
そういえば獅子王機関と警察は仲がよくないとか言ってたな、と古城は思い出す　那月との妙に緊張感のあるやりとりも、もしかしたらそれが原因だったのかもしれない。
雪菜は、もう、と息を吐き、
「ただの通り魔事件なら警察の仕事ですけど、ロタリンギア正教、それも殲教師クラスの人間

が絡んでるとなると、これは立派な国際魔導犯罪です。獅子王機関の管轄ですよ」
「そ、そうなのか。ただの縄張り意識とかじゃないんだな」
「あたりまえです。それに先輩、忘れたんですか？」
「え？　なにをだ？」
「先輩の正当防衛が認められるかどうか、という話です」
「ああ……証拠がないって話だっけか。姫柊の証言だけじゃ足りないって……あ」
古城はそこでようやく雪菜の意図に気づいた。
「まさか、姫柊……」
「はい。相手は〝旧き世代〟クラスの吸血鬼を倒した無差別魔族襲撃犯です。その危険性は誰もが認識してますから、彼らに襲われたということが証明できれば、たぶん先輩の罪についてはなんとかできると思います。なんといっても先輩はいちおう真祖ですから」
「要するに、あの殲教師のオッサンたちを捕まえればいいってことか……」
やれやれと古城は溜息をつく。オイスタッハを捕らえれば、古城の罪は帳消しになる。逆に言えば彼らを捕まえるまでは、警察には頼れないということだ。
警察に昨夜のことを説明すれば、その時点で、古城は勾留されて自由に動けなくなる可能性が高い。そうなれば凪沙にも古城が吸血鬼であることがバレてしまう。
「それにどのみち警察の装備では、あのロタリンギア殲教師に対抗するのは不可能です。無駄

な犠牲が出るだけだと思います」

七式突撃降魔機槍という切り札を持つ雪菜が、勝ち誇るでもなく淡々と告げた。攻魔師として冷静に分析した事実だけを告げている口調だった。

古城はうんざりと目を眇めて、

「結局、警察よりも先にあのオッサンたちを見つけ出さなきゃ、どうしようもねーってことか」

「不可能ではないと思います。犯人がロタリンギア殲教師という情報を持っているのはわたしたちだけですし。それに彼らの外見は特徴的ですから、潜伏できる場所は限られるはずです」

「まあ、たしかに目立つわな……あんなのが街中をうろついてたら」

それもそうか、と納得する古城。

半裸の少女を連れ回している、身長二メートル近い中年男。それだけでもすでに犯罪に近い。いつ通報されてもおかしくないはずだ。

「実はそう思って今朝のうちに資料を取り寄せておきました」

「資料？」

「この島にある西欧教会の施設の一覧です」

そう言って雪菜は、ポケットからメモ帳を取り出した。ネコマたんが描かれたファンシーなメモ帳だ。しかし書かれているのは、味気ない教会名と住所の羅列である。

「ロタリンギア正教の教会は二カ所。それ以外の宗派の施設は七カ所でした。彼らはおそらく

この中のどこかに、協力者と一緒に潜伏しているはずです」
「……そうなのかな」
古城がぼそりと呟いた。
まさか反論されるとは思っていなかったのだろう。雪菜は驚いたように目を瞬く。
「なにか間違ってましたか？」
「いや、そういうことじゃないんだけど、そんな単純でいいのかって気が」
「は？」
雪菜が少し拗ねたように唇を尖らせた。古城は顔をしかめながら、
「いや、いくらロタリンギアって情報を知らなくても、オッサンたちの外見くらいはわかってるんじゃないかと思ったんだが。あと、オッサンが法衣を着てたことも」
「そうですね……そうかもしれません……」
「だったら、警察も真っ先に西欧教会を調べるんじゃないか？」
「あ……」
雪菜が小さく息を呑んだ。彼女は少し混乱したように首を振り、
「で、でも、だとしたら彼らは今どこに？」
「そうだな……えーと、外資系企業とか？」
昼間にあのオイスタッハがうろついていても不審に思われない場所、ということで、真っ先

に思いついたことを口にしてみる。
「はい？」
「いや、殲教師だからって、教会以外の場所にいたらまずいってことはないだろ。そもそもあのオッサンが本当に殲教師なのかどうか。勝手に名乗ってるだけかもしれないしな」
「な、なるほど……」
困惑の表情を浮かべながらも、雪菜は素直に納得した。
どんなに戦闘能力が高くても、彼女はやはり経験の乏しい見習い攻魔師だ。もともと素直な性格だけに、悪意をもって流された嘘の情報には弱いのかもしれない。
「とはいえ、あの姿形でどこにでも隠れられるとは思えないからな。なにか仕掛けがあるんだと思う。ロタリンギア人がいちばん怪しまれない場所はロタリンギア人の中だから、たとえばロタリンギアの大使館とか……まあ、そんなのは市内にはないだろうけど」
「ロタリンギアに本社がある企業とか……ですか？」
雪菜が怖ず怖ずと訊いてくる。
「そう、それ。そういうやつ」
古城は無責任にうなずいた。それなりにスジは通っているような気がしたが、なんの根拠もない思いつきである。絶対間違いないかと訊かれると、自信はない。
しかし雪菜は真剣な表情でなにかを考えこみ、

「先輩……すごいです」
「え？」
「驚きました。まさか先輩が、こんなふうに論理的な思考ができるなんて」
きらきらとした瞳で古城を見上げてきた。古城は、彼女の眩しい視線から思わず顔を背けて、
「そ、そうか……今イチ褒められてる気がしないんだが……」
「だけど、紘神市内にある企業の本社所在地なんて、どうやって調べればいいんでしょうか」
すぐに真面目な表情に戻って、雪菜が言う。
「さすがにそれは俺に訊かれても……人工島管理公社には、全企業のデータがあるはずだけど、そんなの、一般人には教えてくれないだろうし……」
いや、と古城はなにかを思い出して呟く。
「人工島管理公社……か」
古城の脳裏に浮かんでいたのは、一人の見慣れたクラスメイトの顔だった。

5

昼休み終了直前。息を弾ませながら教室に戻ってきた古城は、浅葱の席へと駆け寄った。
今朝の一件以来、なぜか不機嫌さを隠そうともしなかった浅葱だが、いつになく真剣な古城

の様子に気づいて渋々と顔を上げる。いちおう話を聞く気にはなったらしい。そして、
「――ロタリンギア国籍の企業？　どうしてそんなことが知りたいわけ？」
今イチ要領を得ない古城の説明を聞き終えて、浅葱が怪訝そうに訊き返してくる。
「いや、どうして……と言われても、そんなたいした用じゃないんだが」
無差別魔族襲撃事件の犯人を捜している、とも言えず、古城はもごもごと口ごもる。浅葱は煮え切らない態度の古城をむっつりと睨みつけ、
「まさか、あんた……あの姫柊って子に頼まれたんじゃないでしょうね？」
「え？　いや、まさかそんなバカな。いやいや」
「……」
「本当に違うって　そう、夏休みの宿題の自由研究で調べてるんだよ。ロタリンギアについて」
「は？　自由研究？」
そんなのあったっけ、と浅葱は首を傾げた。しかしサボり魔の古城が、追加の宿題を大量に押しつけられていることも事実である　浅葱はそれ以上の追及を諦めたように、スマートフォンを取り出した　溜息混じりに起動する。
「仕方ないわねえ　はいはい、調べてあげるわよ」
「ああ。ありがとう、浅葱」
「だから感謝は形で示せってのよ。ロタリンギアの企業ね……ないわよ、そんなの。島内には」

・流のピアニストのような指さばきで外付けキーボードを叩きつつ、浅葱はあっさりと機密情報を引き出してみせた。占城は彼女の答えに当惑する。

「ない？　一社もか？」

「ロタリンギアの企業と取引したり、代理店契約を結んでいる会社はいくつかあるけど、働いてるのはみんな日本人。だいたいヨーロッパ系の企業が紋神島に支社を置く理由はないでしょ。魔族特区は欧州にもあるし、最近の円高でほとんど撤退しちゃったんじゃない？」

「……撤退？」

古城の脳裏に閃きが灯る。オイスタッハが潜伏するのに、なにも企業が活動中である必要はない。むしろそうでないほうが都合がいいはずだ。

「そうか……浅葱、撤退済みの会社は調べられないか？　できれば閉鎖した事務所がそのまま残ってるようなやつがいい」

「うーん、たしか過去五年以内だったら、記録が残ってたような気がしたけど……」

浅葱が再びキーボードを操作する。今度は少し待たされた。情報の絞りこみに時間がかかっているらしい。やがて画面が切り替わり、細かなデータがびっしりと画面を埋め尽くした。

「あったわ。一件だけだけど。スヘルデ製薬の研究所。本社はロタリンギア。主な研究内容は人工生命体を利用した新薬実験。二年前に研究所を閉鎖して、今は債権者の差し押さえ物件になってるみたい」

「……それだ、浅葱！　どこにある？」
古城が身を乗り出してスマートフォンの画面をのぞきこむ。悪気無く密着してきた古城との距離の近さに、浅葱はかすかに頬を赤らめながら、
「えーと、アイランド・ノースの第二層B区画。企業の研究所街ね」
「わかった。サンキュ」
古城はそう言うと、浅葱を突き放すようにいきなり背中を向けた。
そのまま教室を出て行こうとする彼を、浅葱は慌てて呼び止めて、
「ちょ、ちょっと、古城？　どこ行く気？」
「急用ができた。出かけてくる！」
「はあ!?　あんた、なに言ってんの、午後の授業はどうするのさ!?」
「上手いこと誤魔化しといてくれ。頼む！」
古城は拝み倒すようなポーズでそれだけ言い残すと、今度こそ本当に教室を出て行く。そんな古城を廊下で待っていた雪菜に気づいて、浅葱は、椅子を蹴散らしながら立ち上がり、
「こ、こら……！　なにそれ!?　あんた、ホント殺すわよ！　馬鹿ーっ！」
廊下に向かって怒鳴り散らす浅葱から、とばっちりを恐れたクラスメイトたちが慌てて目を逸らす。やっぱりこうなったか、とでも言いたげな顔で生温かく成り行きを見守っている矢瀬。そしてクラス委員の築島倫は、誰にも気づかれずにそっと溜息をついていた。

6

アイランド・ノース――企業の研究所が建ち並ぶ、絃神島北地区の研究所街。島内でももっとも人工島らしさを感じる未来的な街の片隅に、その研究所跡地は残されていた。

ほぼ直方体に近い形の、四階建てのビルである。

機密保持のためか、窓が少ない。そのため閉鎖されているという雰囲気もあまり感じない。犯罪者が拠点にするには、おあつらえ向きの環境だといえる。

「あれがその製薬会社の研究所ですか？」

街路樹の陰から顔を出して、雪菜が警戒した表情で訊いてくる。たぶん、と古城は頼りなくうなずいて、

「親会社が撤退して研究所は閉鎖されたらしいだけど、建物ごと差し押さえられてるって話だから、中の施設はそのまま残ってると思う。人工生命体の調整施設も」

「人工生命体の調整施設……条件的にはぴったりですね」

雪菜が真剣な表情で呟いた。

人工生命体とは、生化学的な技術によって創造された生命体の総称だった。

遺伝子レベルまで完全に人為的に設計されているのが、合成生物などとの決定的な違いであ

り、技術的な難度は高いが、そのぶん設計の自由度も大きい。

原始的な人工生命体の製法は、十六世紀にはすでに確立されていたといわれている。安価な労働力を生み出すため、あるいは人類の良き友人となるようにと様々な人々の手で長く研究が続けられていた。

しかし結果的に、人工生命体が一般に広く普及することはなかった。

それには大きくふたつの理由があるといわれている。

ひとつは倫理的な問題だ。

生命の創造は、造物主である神の領域に人間が踏みこむ行為であるとして、宗教界を中心に根強い反発があった。また、創り出された人工生命体に人権を認めるか否か、という点でも激しい論争が続いており、いまだに結論は出ていない。

そしてもうひとつは、単純に製造コストの問題である。

労働力として使うにせよ、兵士として戦場に投入するにせよ、人工生命体の製法はあまりにも繊細で、費用がかかりすぎるのだ。クローン技術などによって本物の人間を使ったほうが、圧倒的に安く済ませられるのである。

そのため人工生命体の製造は今ではほとんど行われておらず、研究する科学者もずいぶん減っているという。

しかし現在でも例外的に、人工生命体の研究が盛んな分野がある。それは人工生命体技術を

応用した医薬品の開発だった。人為的に遺伝子構造を変更できる人工生命体（ホムンクルス）は、新薬の臨床実験や免疫抗体の研究などに最適で、医学の進歩のためという大義名分によって、倫理的な批判もある程度は沈黙させられる。そのため大手の製薬会社のほとんどが、自社の中に人工生命体（ホムンクルス）を製造、研究する施設を持っていた。

このスヘルデ製薬の研究所も、かつてはそのような医薬品研究施設のひとつだったらしい。

「――やはりここからでは中の様子はわかりませんね」

そう言って雪菜は、背負っていたギグケースを降ろした。すらりと銀色の槍を引き抜いて、穂先の刃を展開する。

「調べてきます。先輩はここで待っていてください」

「え？　ちょっと待て、姫柊。まさか、一人で行く気なのか？」

「はい。そのつもりですけど」

当然だろう、と言いたげな目つきで、雪菜が古城を見上げてくる。

「なんで!?」

古城は驚いて目を剝くが、雪菜はやれやれと嘆息して首を振った。

「先輩が一緒に来てどうするんですか。邪魔なだけですから、大人しくしててください」

「いや、邪魔って……もし中であのオッサンたちと遭ったらどうするんだよ。姫柊一人で戦うつもりなのか？」

「もちろんです。先輩のほうこそ、わたしについてきてなにをするつもりですか？」
「俺がいやらしいことを考えてるみたいな言い方はやめろ」
古城が不機嫌な口調で言う。だが、攻魔師の修行を積んでいる雪菜と違って、古城は吸血鬼の能力を手に入れただけの素人である。第四真祖などと呼ばれてはいても、実際には眷獣一匹、自由に使いこなすことができない。これでは邪魔といわれても仕方がない。
「だいたい先輩って吸血鬼としてなにができるんですか？　眷獣は使えないというお話ですし、空も飛べないみたいだし、霧になるような芸もなさそうですし」
「そ、そういう特殊能力を持ってるのは、吸血鬼の中でも一握りなんだろ。べつに俺が無能なわけじゃない」
「たしかに筋力はそれなりですけど、動きが素人同然で実戦では使いものになりません。注意も散漫だし、落ち着きもないし」
「う……く……」
「わかったら本当に大人しくしていてくださいね。余計なことをしないように」
雪菜が突き放すような口調で言う。
言ってる内容はきついが、殊更に悪意があるわけではないのだろう。むしろ彼女にしてみれば当然の指摘をしただけだ。古城を危険な目に遭わせないように、と
「だけど姫柊が心配なんだよ！」

古城が苛々と乱暴な口調で言った。

その言葉に、雪菜はきょとんと目を丸くした。その頬が赤く染まっている。

「な、なにを言ってるんですか……!?　心配なのは先輩のほうです！　こんな街中で昨日みたいに眷獣を暴走させたりしたら、どれだけ被害が出ると思ってるんですか」

「それはたしかにそうなんだけど、姫柊一人に全部押しつけるのはやっぱおかしいだろ。俺はそういうのは気に入らねーんだよ。だいたい今回の事件は俺とも無関係な話じゃないわけだし」

古城が真剣な目つきで雪菜を見つめる。その勢いに気圧されて雪菜が沈黙する。

「わ……わかりました。たしかに先輩のいうことにも一理あると思います」

こほ、と小さく咳払いして、雪菜は真面目な表情を作った。そうだろう、と古城もうなずく。

「先輩が吸血鬼狩りに襲われる可能性がある以上、たしかに無関係ではありませんでした」

「一理あるって、そっちの話かよ」

「そもそもわたしの本来の任務は先輩の監視ですし、先輩から目を離すべきではないですね。なるべく一緒に行動しましょう。ただし、殲教師たちと遭遇したら――」

「ああ。すぐに安全な場所まで逃げさせてもらう。姫柊の足手まといにはなりたくないしな」

「はい。お願いしますね」

雪菜は溜息のような口調でそう言うと、なぜか黙って古城を見上げた。それから少し躊躇い

がちに、かろうじて聞き取れるくらいの小声で、
「あの、先輩……」
「ん？」
「ありがとうございます」
「え？　なにがだ？」
古城は怪訝な顔で訊き返す。しかし雪菜は静かに微笑んで首を振り、
「いえ。なんでもありません。行きましょう」
ヒュン、と迷いを断ち切るように槍を振り、建物のほうへと歩き出した。

7

当然のことだが、閉鎖された研究所の建物には鍵がかかっていた。ガラス張りの正面玄関はもちろんだが、通用口の扉も太い鎖と南京錠でがちがちに封鎖されている。
安物の南京錠は赤く錆びついて、長い間使われていなかったことを示していた。
「オッサンたちが隠れているのは、ここじゃなかったのか……？」
落胆した口調で古城が言う。
外から見る限り、この建物への入り口はほかにはない。屋上や地下から入れるような構造の

建物でもない。人工生命体の少女はまだしも、オイスタッハの体格では、通風口などから中に入ることも不可能だろう。

だとすれば、彼らがこの研究所を拠点にしているという古城たちの仮説が間違っていた、ということになる。しかし雪菜は、ふ、と満足げに微笑んで、

「いいえ、先輩。あたりです」

銀の槍を、いきなり通用口の扉に突き立てた。

その瞬間、キン、と甲高い高周波音が鳴り響き、目の前でガラスが砕け散ったような気配があった。通用口を縛っていたはずの鎖と鍵が消滅し、ゆっくりと扉が開いていく。

「姫柊？　これは……？」

「初歩的な幻術です。先輩……この程度の魔術に引っかかるなんて、真祖失格ですよ」

雪菜が呆れたように溜息をついた。古城は沈黙。べつにそんなもん合格したくもねーよ、と言い訳のように心の中で呟いてみる。

建物の中は暗かった。しかし雪菜はそれを苦にした様子もなく、奥へと歩いて行く。

どうやら彼女は吸血鬼である古城並みに夜目が利くらしい。あるいはこれも、雪菜が霊視と呼んでいた剣巫の特殊技能なのかもしれない。

たしかにこれだけの能力があれば、雪菜が、古城を邪魔だという気持ちもわかる気がする。

しかし、そのことが古城を漠然と不安にさせる。吸血鬼としての古城が無能なのは事実だが、

それをべつにしても雪菜はあまりにも優秀すぎると思うのだ。
雪菜の戦闘能力や知識量は、十四、五歳の少女が、まともなやり方で身につけられるものとは思えない。
「……」
古城がぼんやりとそんなことを考えながら歩いていると、前を歩いていた雪菜が不意に立ち止まった。うっかりと古城は彼女にぶつかってしまい、雪菜に無言で睨まれる。
「どうしたんだ、姫柊？」
「先輩……これって」
雪菜がそう言って目の前に広がる光景を指さした。
まるで教会の聖堂のような、天井の高い広い部屋だった。
ステンドグラスの代わりに壁際に並んでいるのは、円筒形の水槽だ。
それぞれ直径は二メートルほど。高さは三メートル弱といったところだろう。それらが左右合計で二十基ほど、整然と配置されている。
水槽の中には、濁った琥珀色の溶液が満たされていた。
採光窓から射しこむ光が溶液を淡く照らしていたが、美しいと呼ぶにはほど遠い光景だ。
そこはただの実験室だった。廃棄された人工生命体の調整槽だ。だが、
「これが……人工生命体……だと？　こんなものが……か!?」

水槽を見上げて、古城がうめいた。声が怒りでかすかに震えている。

琥珀色の溶液の中を漂っているのは、子犬ほどの大きさの奇妙な生物たちだった。その姿は、伝説の魔獣のようでもあり、あるいは美しい妖精のようでもあった。いずれにせよ自然界に存在する生物の姿ではない。

「先輩……？」

激しい怒りをあらわにする古城を見て、雪菜が驚きの表情を浮かべる。その怒りの理由を尋ねようとして、しかし雪菜は古城に背中を向けた。銀色の槍を構えて姿勢を低くする。

水槽の陰から現れた、何者かの気配に気づいたのだ。

それは小柄な影だった。藍色の髪の少女である。薄い水色の虹彩が、自分に槍を向けている雪菜を無表情に見つめている。アスタルテと呼ばれていた、人工生命体の少女だった。

「あいつは……」

アスタルテの存在に気づいて、古城も振り返った。しかし雪菜は、ハッとしたように古城の目の前で左の掌を広げ、

「先輩は見てはダメです！」

「え？　いや、だけど……」

「見てはダメです。こちらを向かないでください！」

「姫柊？　いったいなにを……？」

雪菜の掌ごしにアスタルテの姿を見て、古城は、うっ、と低くうめいた。
最初に視界に飛びこんできたのは、透き通るような肌の白さだった。
アスタルテの足元には、透明な雫が滴り落ちている。人工生命体である彼女は、調整を終えて水槽から出てきたばかりだったらしい。
彼女が身につけているのは、手術着のような薄い布きれが一枚だけ。その布もぐっしょりと濡れそぼって、彼女の素肌にぴったりと張りついている。ほとんど裸同然の際どい姿だ。
「先輩……」
呆然とアスタルテを凝視し続ける古城を睨んで、雪菜が低い声を出す。古城は強張った表情で首を振り、
「いや、違う……そうじゃないんだ、姫柊」
「なにが違うんですか、もう……本当にいやらしい」
荒々しい溜息をひとつ洩らして、雪菜が怒ったようにそっぽを向く。
しかし古城は、布ごしに透けて見えるアスタルテの肌から視線を逸らせずにいた。透けるように白い彼女の肌に、虹色の影が揺らいでいたからだ。
そのアスタルテが、唐突に静かに口を開く。
「……警告します、ただちにここから退去してください」
「え？」

少し予想外だった彼女の言葉に、古城は驚いて我に返る。その間に雪菜は槍の構えを変えていた　警戒ではなく先制攻撃が可能な体勢へと。

しかしアスタルテは淡々と繰り返す。無防備な姿を晒したままで、

「この島は、間もなく沈みます。その前に逃げてください。なるべく、遠くへ……」

「島が……沈む!?　どういう意味だ……!?」

ぞくり、と背筋が凍るような感覚に襲われて、古城はうめいた。抑揚の乏しい機械的な声のせいか、アスタルテの言葉は素直に信じられた。人工生命体である彼女が、こんな形で古城たちに嘘をつく理由がない。

「〝この島は、龍脈の交叉する南海に浮かぶ儚き仮初めの大地。要を失えば滅びるのみ〟……」

「え？」

人工生命体が紡ぐ詩のような言葉に、雪菜が驚きの声を洩らした。古城には理解できなかったが、アスタルテとの会話には、なにか彼女を驚愕させるような情報が含まれていたらしい。

そしてそのアスタルテの背後に、ゆらり、と大柄な影が現れる。

荘厳な法衣と装甲強化服をまとった巨漢。ロタリンギア殲教師ルードルフ・オイスタッハだ。

彼は、怯えたように振り返る人工生命体の少女を冷ややかに見下ろし、

「然様。我らの望みは、要として祀られし不朽の至宝。そして今や、その宿願を叶える力

を得ました。獅子王機関の剣巫よ、貴方のおかげです」

身構える雪菜に、半月斧の刃を向けながらそう言った。

謎かけのような殲教師の言葉に、雪菜は困惑の相を浮かべる。

しかしオイスタッハに答えたのは、彼女ではなく古城のほうだった。

「力を得た……だと……？　それはもしかして、その子の体内に埋めこんだやつのことか？」

「先輩？」

怒りを圧し殺したような古城の声に、雪菜がはっきりと動揺する。

古城は雪菜の前に歩み出て、怒気のこもった瞳でオイスタッハを睨んでいた。そんな古城を、ロタリンギアの殲教師は無関心に眺め、

「気づきましたか。さすがは第四真祖と言っておきましょう。しかしもはや貴方といえども私たちの敵ではありません。我らの前に障害はなし」

「っざけんなっ――！」

古城の一喝が、静謐な研究所内の大気を震わせた。

「オッサン、てめえ、その子に眷獣を植えつけやがったな――！」

「えっ……!?」

古城の怒声を聞いた雪菜が、驚いたようにアスタルテの細い身体を見た。そしてアスタルテの左右に置かれた、培養槽内に浮かぶ奇妙な生物の姿を。

魔獣や妖精に似た、この世界に存在しないはずの歪な生物。それは人工の生命体に、眷獣を寄生させたものではないのか――

「いかにもそのとおり」

オイスタッハが傲然と告げる。

「自らの血の中に、眷属たる獣を従え得るのは吸血鬼のみ。ですが私は、捕獲した孵化前の眷獣を寄生させることによって、眷獣を宿した人工生命体を生み出すことに成功したのです成功例は、そこにいるアスタルテだけですが」

「黙れっ！」

古城が、司教の言葉を遮って怒鳴る。

「どうして吸血鬼以外に眷獣を使役できる魔族がいないのか、あんたも知らないわけじゃないだろうが!?　わかってそんなことをやったのか　――!?」

「もちろんですとも。眷獣は実体化する際に、凄まじい勢いで宿主の生命を喰らう。それを飼い慣らせるのは、無限の〝負〟の生命力を持つ吸血鬼だけだと言いたいのでしょう？」

「だったら、その子は――」

「ロドダクテュロスを宿している限り、残りの寿命はそう長くはないでしょう。保ってせいぜい二週間といったところでしょうか。これでも倒した魔族を喰らって、ずいぶん引き延ばしたのですがね……しかし私たちが目的を果たすためには十分です」

オイスタッハは、苦悩や罪悪感を微塵も感じさせぬ口調で言った。

古城は、怒りのあまり言葉をなくしている。

代わりに口を開いたのは雪菜だった。自分の想像に怯えるかのように、彼女は槍を握りしめ、

「魔族を……喰ったって……まさか、この島で魔族を襲っていたのは……」

「そう、ひとつは、彼らの魔力を狩獣の生き餌にするためでした。そしてもうひとつの理由は、アスタルテに刻印した術式を完成させるために……獅子王機関の剣巫よ、その槍を持つ貴方との戦いは、素晴らしく貴重なサンプルになりました」

名指しで呼びかけられたことに、雪菜が、びくりと肩を震わせる。

「そんなことの……そんなことのためだけに、その子を育てていたんですか、あなたは　――!?　まるで彼女を道具みたいに！」

怒りをあらわにした雪菜のことを、オイスタッハは愉快そうに眺めた。

「なぜ憤るのですか、剣巫よ？　貴方もまた獅子王機関によって育てられた道具ではありませんか？」

「……それはっ……！」

「不要な赤子を金で買い取って、ただひたすらに魔族に対抗するための技術を仕込む。そして戦場に送り出す。まるで使い捨ての道具のように　――それが獅子王機関のやり口なのでしょう？　剣巫よ、その齢で、それほどの攻魔の術を手に入れるために、貴方はなにを犠牲に捧げ

たのです？」

オイスタッハの静かな指摘に、雪菜の全身が凍りつく。無言で唇を噛みしめた彼女の頬が、血の気を失って蒼白になっている。

「黙れよ、オッサン……」

古城が雪菜を庇うように呟いた。しかしオイスタッハは、表情を動かさず、

「道具として作り出したものを道具として使う私と、神の祝福を受けて生まれた人を道具に貶める貴方たち　いずれが罪深き存在でしょうか？」

「黙れと言ってんだろうが、腐れ僧侶が　！」

咆吼する古城の全身を、青白い稲妻が包みこんだ。握りしめた古城の右の拳が、眩い雷光を放っている。ありふれた高校生だったはずの古城の姿が、撒き散らされた濃密な魔力によって、何倍にも膨れ上がったように見えた。それは古城が初めて見せる吸血鬼としての権能だった。自らの肉体を媒介にして、眷獣の魔力の一部を実体化させたのだ。

「先輩……!?」

撒き散らされる濃密な魔力に、雪菜が圧倒されたように弱々しくうめいた。

戦斧を構えたオイスタッハが、少し驚いたように顔を歪め、

「ほう。眷獣の魔力が、宿主の怒りに呼応しているのですか……これが第四真祖の力。いいでしょう――アスタルテ！　彼らに慈悲を」

「――命令受諾（アクセプト）」

創造主（マスター）である殲教師（せんきょうし）の命令に従って、人工生命体（ホムンクルス）の少女が古城の前に立ちはだかる。

彼女の小さな身体から、巨大な眷獣が陽炎のように姿を現した。

虹色に輝く半透明の巨体。今はもはや腕だけでなく、ほぼ全身が出現している。それは体長四、五メートルほどもある巨人だった。全身を分厚い肉の鎧で覆った、顔のないゴーレムだ。

宿主である少女を身体の中に取り込んで、人型の眷獣が咆吼する。

「てめえも大人しく従ってんじゃねえェ――ッ！」

古城が雷撃をまとった拳で、そのゴーレムへと殴りかかる。

ほんのわずかに洩れ出た程度とはいえ、その雷撃は第四真祖の眷獣の力である。威力は、おそらく並の吸血鬼の眷獣をも凌ぐはず。だが――

「ダメです、先輩！」

その光景を目にした瞬間、雪菜は思わず叫んでいた。

次の瞬間、閃光に包まれて吹き飛んだのは古城のほうだった。

「ぐ……あっ！」

くぐもった悲鳴を上げながら、古城の身体がボロ布のように吹き飛んでいく。

古城がアスタルテの眷獣を殴りつけた――そう見えた瞬間、凄まじい爆発が巻き起こって、逆に彼を十数メートル近くも弾き飛ばしたのだ。

倒れた古城の全身が、白い蒸気と、肉の焼けるような臭いを漂わせている。
まるで雷に打たれたような　古城自身の魔力が逆流してきたかのような姿だった。
「先輩っ！」
倒れた古城を庇うように、雪菜が槍を構えてアスタルテへと突撃する。
雪菜の呪力に呼応して、銀色の穂先が青白い閃光に包まれる。
真祖の眷獣をも滅ぼし得る、降魔の聖光。いかなる魔族の権能をもってしても、この槍の一撃は防げない。防げない　はずだった。だが、
「雪霞狼が……止められた!?」
槍から伝わってくる異様な手応えに、雪菜がうめく。
雪霞狼の刃は、アスタルテを包みこむ人型の眷獣にわずかに触れたところで止まっていた。
あらゆる魔族の結界を貫くはずの槍が、完全に動きを止められている。
前回の戦闘でも似たような手応えを感じたが、その理由を雪菜は完全に理解した。
アスタルテの眷獣〝薔薇の指先〟の表面が、雪霞狼と同じ光に包まれている。まったく同種の、降魔の聖光の輝きに。
「共鳴……!?　この能力は……！」
「そうです、剣巫よ。魔力を無効化し、あらゆる結界を切り裂く〝神格振動波駆動術式〟――世界で唯一、獅子王機関が実用化に成功していた、対魔族戦闘の切り札です。貴方の戦闘デー

タを参考にして、ようやく完成させることができました」

オイスタッハが満足げに笑った。

雪菜は激しく動揺しながら、アスタルテの反撃をかろうじて凌ぎ続けている。

オイスタッハは、未完成の術式を完成させるために魔族との戦闘を繰り返していた、と言っていた。

彼が求めていたのは、〝神格振動波駆動術式〟。魔力による攻撃の一切を無効化する、攻魔戦闘術式の究極ともいわれる秘呪である。

そして彼らは、雪菜と遭遇した。

獅子王機関の秘奥兵器である七式突撃降魔機槍　世界で唯一の実用化された〝神格振動波駆動術式〟をこの島に持ちこんだ剣巫と。

「そんな……わたしのせいで……」

戦意を失った雪菜は、完全にアスタルテに圧倒されていた。

未完成とはいえ、かなりの技術水準に達していたアスタルテの〝神格振動波駆動術式〟は、雪霞狼との比較データを手に入れたことで、ついに完全なものとなった。第四真祖、暁古城の魔力を弾き返せるほどに。結果的に雪菜の行動が、その完成を手伝ったことになる。

オイスタッハが望んでいた力を手に入れたのも。古城が傷つき倒れたのも。すべては雪菜がこの絃神島を訪れたせい――

虚ろな表情を浮かべる雪菜の前で、オイスタッハが戦斧を掲げる。
「さらばだ、娘。獅子王機関の憐れな傀儡よ　せめて魔族ではなく、人である我が手にかかって死になさい」
「……っ！」
精神の集中を乱していた雪菜は、殲教師のその攻撃に気づくのが遅れた。反応したときには、分厚い戦斧の刃がすでに眼前へと迫っていた
攻撃をかわすことも受け止めることも不可能だと悟り、雪菜は一瞬で覚悟を決めた。衝撃が雪菜の身体を襲い、生温かい血が雪菜の全身を紅く染める。
だが、予想していたような苦痛は襲ってこない
代わりに雪菜が感じたのは、全身を包みこむような温もりと、柔らかな重さだった。
「かはっ……！」
雪菜の耳元で、古城が小さく咳きこんだ　その唇からあふれ出したのは大量の鮮血だ。
アスタルテとの戦闘で重傷を負っていた古城が、雪菜を庇って彼女を突き飛ばし、代わりにオイスタッハの攻撃を受けたのだ。
「せ……先輩……!?」
倒れこむ古城を支えて、雪菜が声を震わせる。
古城の身体が異様に軽い。必死で抱きとめようとする雪菜の腕から、ちぎれた胴体が滑り落

ちていく。分厚い戦斧の一撃は、古城の背骨と肋骨を砕き、胴体を細かい肉片に変えていた。砕け散った骨が、血まみれの破片となって床にこぼれる。

ぶちぶちと乾いた音を立てて、傷ついた血管と筋肉がちぎれていく。

噴き出した鮮血が、雪菜の足元に血だまりを作る。

古城の頭部と胴体をつなげていた最後の皮膚が、肉体の重みに耐えかね、薄い紙のような音を立てて裂けた。雪菜の手の中に残ったのは、虚ろに目を見開いた古城の生首だけだった。

床に転がった古城の身体は、背骨も、肺も、心臓も、なにもかもが潰され、無残に引きちぎられている。

吸血鬼は不老不死。だが、殲教師の一撃によって、その能力の根源である心臓は潰され、魔力の拠り所たる血は虚しく流れ落ちるだけ――

「先輩……どうして……そんな……いや……あああああああっ……！」

雪菜の手の中から、槍が落ちた。首だけとなった古城を、両手で必死で抱きしめる。しかし、もちろん古城の返事はない。

オイスタッハは、その光景を無表情に眺めて、戦斧を下ろした。

雪菜にはもう戦闘を続ける力はないと判断したのだろう。神格振動波駆動術式が完成した今となっては、オイスタッハにあえて雪菜と戦う理由はない。

「行きますよ、アスタルテ……我らが至宝を奪還するのです」

「――命令受諾」

人型の眷獣に包みこまれたアスタルテが、無感情に呟いた。
眷獣の巨大な腕が青白い閃光を放ち、研究所の外壁が、爆発とともに砕け散る。激しい爆風で埃と瓦礫が舞い散る中、雪菜は古城の生首を、聖母のように抱いて背中を丸めている。
穿たれたその大穴から、オイスタッハが外に出て行く。
最後に一瞬だけ、殲教師に付き従う顔のないゴーレムが、うずくまったままの雪菜を見た。
どこか悲しげなその姿は、早く逃げて、と必死で訴えているようにも見えた。

第四章
悪者の右腕
The Right Arm of the Villain

1

その日の放課後。蓋羽浅葱は、制服のままアルバイト先を訪れていた。
キーストーンゲートの地下十二階。人工島管理公社の保安部である。
絃神島の中枢とでもいうべき警戒厳重な区画だが、浅葱は彼女専用に用意された管理者級のIDカードで、すべてのゲートをあっさり通過した。
本来は市長レベルでなければ発行されないカードだが、どのみち浅葱が本気を出せば、この程度のセキュリティは簡単に無力化できる。それを知っている公社の理事長が、特例で彼女にカードを与えたのだった。その程度の特権を認めさせる程度には、浅葱のプログラマーとしての才能は卓越しているのだ。
『よお、お嬢。不機嫌そうだな。せっかくの別嬪さんが台無しだぜ』
浅葱が席について端末にログインすると、補助人工知能が馴れ馴れしく話しかけてきた。
彼女がモグワイと名付けたこの人工知能は、絃神島すべての都市機能を掌握する五基のスーパーコンピューターの現身である。演算能力では間違いなく世界最高水準の機械だが、クセがあり扱いづらいと言われている。しかしなぜか浅葱とは不思議と気が合った。
「うっさいわね。付喪神風情がつまんないお世辞言ってんじゃないわよ」

『ククッ、察するに恋の悩みってところか？　さすがの天才プログラマーちゃんも色恋沙汰のほうは勝手が違うみてーだな』

「黙れっつってんのよ。ウィルス流すわよ」

人工知能相手に軽口を叩きながら、浅葱は作業を開始する。

今日引き受けた依頼は、昨夜の倉庫街での爆発事故の後始末だった。破損した送電系統や上下水道の維持管理、交通機関の運行スケジュールの見直し、復旧予算の見積もりなど、細々とした数百の案件で、専用のプログラムを新たに書き下ろさなければならない。

優秀なプログラマーを数十人単位で集めても半年がかりの作業だが、浅葱とモグワイのチームなら二日もあれば十分だろう。

浅葱の腕なら、もっと割のいい仕事もいくらでも選べたが、世界最高レベルのスーパーコンピューターを好き勝手に使えるこのバイトを、浅葱はそれなりに気に入っていた。

唯一残念だったのは、今回の依頼を受けたせいで、古城の宿題を手伝う暇がなくなったことだ。世界史のレポートを破り捨てたのは、少し可哀想だったかな、と物憂げな気分で考える。

しかしあれはどう考えても古城が悪い。おまけにあの男は、新学期早々学校から抜け出して、そのまま戻ってこなかったのだ。

あえて確認するまでもない。どうせあの姫柊とかいう転校生と一緒にいるのだろう。

しかし自分でも意外なことに、浅葱はそれほど腹を立てていなかった。

不愉快なのは不愉快だが、あの古城に限って、授業をサボって後輩の女子とデートするような甲斐性があるとは思えない。おそらくなにか事情があったのだ。

浅葱が不機嫌になっているのは、古城がその事情を自分に相談せず、それどころか下手な嘘をついて誤魔化そうとしたことだ。彼なりに浅葱に気を遣っているのは薄々わかるが、それが余計に気に入らない。

そして気に入らないのは、もうひとつ。姫柊雪菜という後輩のことだ。

なんの根拠もない浅葱のカンだが、たぶん古城はあのタイプに弱い。

女性らしさをあまり感じさせない毅然とした振る舞いや、はっきりとした物言い。中学時代バスケに明け暮れていた古城には、ああいう体育会系の雰囲気は居心地がいいはずだ。

おまけに雪菜は、同性の浅葱から見ても非の打ち所がない美形である。異性の見た目にあまり関心を払わない古城だが、さすがにあのレベルが相手ではどう転ぶかわからない。

「スタイルなら負けてないと思うんだけどねー……」

作業に没頭していたせいで、我知らず声が洩れていたらしい。人工知能が耳聡く反応する。

『まあ、世の中にはいろんな趣味の野郎がいるからな』

「独り言にいちいち返事しないでよね」

『相棒の相談に乗ってやってんだろ』

「余計なお世話。だいたい、いつからあたしがあんたの相棒になったのさ」

『そういう素直じゃねーところが、上手くいかない理由なんじゃねーのか？』
「そ、そんなこと、あんたに言われなくてもわかってるわよ。けど……！」
浅葱が思わずキーを叩く手を止めて、イラッと眉を吊り上げた。
鈍い振動と衝撃が、浅葱のいる部屋を揺らしたのは、その直後だった。
浅葱が短く悲鳴を洩らした。洋上に浮かぶ浮体式構造物である絃神島に、地震はない　浅葱がこの島に移り住んで以来、初めて感じる衝撃だった。
「モグワイ。今のはなに？」
『……こいつは驚いた。侵入者だ』
人工知能が、まるで感嘆したように言う。浅葱は驚いて眉を寄せた。
「侵入者？」
『ああ。このビルの中で警備隊と交戦してる。さっきのは、その戦闘のとばっちりで支柱が一本へし折れた余韻みてーだな』
「へし折れた、って……嘘でしょ？」
浅葱が顔色を変えて低くうめいた。
ここはただの建物ではない。人工島地下の構造部なのだ。数千トンの質量に耐えるよう設計されたメインの支柱は、爆弾でもそう簡単に破壊できるものではない。
『支柱だけじゃねー。上層階はけっこうな被害が出てるぜ。いちおうここは安全だとは思うが、

脱出するのは無理かもしれねー。エレベーターシャフトもやられてる』
「閉じこめられたってこと？」
『非常階段は生きてるが、今は使わないことをおすすめするぜ。侵入者とばったり顔を合わせたくなければな。警備隊はとっくに壊滅状態だ』
「壊滅？」
浅葱は唖然として訊き返す。このキーストーンゲートには、平時でも百五十人近い警備員が常駐していたはず。それが壊滅したというのか。
「侵入者は何者なの？　テロ組織？　それとも夜の帝国の軍隊が襲ってきたとでも？」
『いいや、違う。そうじゃねえ……』
魔族による軍事侵攻を予想した浅葱に、妙に人間臭い口調で人工知能が答えた。
激しい爆発で、再び建物が揺れる。
『――侵入者は、二人だけ。ただの人間と、人工生命体の二人組だ』

2

キーストーンゲートとは、絃神島の中央に位置する巨大複合建造物の名前だった。
十二階建ての地上部は島内でもっとも高い建物であり、逆ピラミッド型のその威容を、島の

ほとんどあらゆる場所から見上げることができる。

施設内には市庁舎などの官公庁、そして数多くのホテルや商業施設が建ち並び、名実ともに島の中心部として機能していた。

一方でこの巨大建造物には、もうひとつの重要な役割がある。

それが海面下四十階層にも及ぶ、人工島集中管理施設だった。

直径わずか二キロメートルに満たないこの建物は、絃神島を構成する四基の人工島の連結部をも兼ねているのだ。

海流や波風などの影響で発生する人工島間の歪みや振動は、このキーストーンゲートによって吸収され調整される。その働きがなければ絃神島の四つの地区はたちまち激突、あるいは分解して、洋上を漂うことになるだろう。まさしく要石の名にふさわしい重要な施設なのだった。

それゆえに警備も厳重である。

絃神市が保有する特区警備隊は、三個大隊四百四十人強。そのうち一個大隊が、常駐してキーストーンゲートの警備に当たっている。その人数には、一個小隊の攻魔官十六人も含まれる。これは中規模の県警本部が保有する全攻魔官に匹敵する人数だ。

それほどまでに大量の人員が投入されているのは、キーストーンゲートの警備態勢が大規模テロ組織の襲撃を想定しているからである。

計算上では、夜の帝国の獣人兵団一個中隊を相手にしても、数日間は持ちこたえられると

いわれていた。

だからこそ、その日、人々は驚愕することになる。

たった二人の侵入者が、その警備を蹴散らしてゲートに侵入したことに――

彼らはすでに海面下第十階層の気密隔壁をも突破して、ゲート中層部へと向かっていた。

なにひとつ要求を伝えようとすることもないままに。

「――命令完了。気密隔壁の封印を破壊しました」

巻獣の鎧をまとった人工生命体の少女が、厳かに告げた。

今の彼女の姿は、虹色に輝く鎧をまとった体高四メートルほどのゴーレムである。その巨大な指先が触れた一瞬で、気密隔壁を守っていた七層の結界はすべて破壊されていた。

アスタルテの体内に刻印された、神格振動波駆動術式の働きだ。

彼女と一体化した人工眷獣〝薔薇の指先〟は、あらゆる魔力を無効化し、結界を切り裂く。

この能力こそ、殲教師オイスタッハが求め続けていたものだった。

彼の悲願を達成するには、どうしてもこの、結界を破る力が必要だったのだ。

「行きなさい、アスタルテ。私たちが求めているものは、この先にあるのです」

「命令受諾」

静かに呟き、アスタルテが破壊した隔壁を乗り越える。

この先、海面下二十五階までの中層部は、人工島管理公社の管轄だ。電気や通信、浄水施設などの制御がここで行われている。

この区画にダメージを与えれば、絃神島の住民に深刻な被害を及ぼすことが可能だ。

送電の停止は入院中の患者たちにとって致命的だし、猛暑の絃神島では食品の保存もままならない。人工物であるこの島には、そもそも自然の河川が存在しないため、浄水施設が止まれば人々は飲み水にも事欠くことになる　島を出るにも、ここは本土から三百キロ以上も離れた洋上であり、五十六万人もの住民すべてを短期間で避難させるのは不可能だ。

だからこそ、この区画はしばしばテロリストたちの標的となり、それに対応するために警備も強化されている。

中層部に突入したオイスタッハたちを待ち受けていたのは、特区警備隊の最精鋭部隊。攻魔班二個分隊と、重装機動隊一個中隊だった

「ふむ……緊急時の対応としては合格点ですね　よく訓練されています」

通路を下りてきたオイスタッハたちを目がけて、一斉射撃が行われる

対魔族用の呪力弾だ　まともに喰らえば、オイスタッハの装甲強化服とて無事では済まない　壁際に隠れて直撃を避けながら、しかしオイスタッハは冷静な声で評価する。

「しかし、無駄です　殲滅しなさい、アスタルテ」

「　命令受諾　執行せよ、〝薔薇の指先〟」

虹色に輝く人型の眷獣が、射撃を続ける機動隊員へと襲いかかる。
その巨体からは想像もつかない敏捷さである。そして眷獣の圧倒的な力で彼らを薙ぎ払う。
機動隊員たちを保護する結界が薄いガラスのように砕け散り、無防備になった彼らは、ひとたまりもなく吹き飛んだ。
通常の呪力弾では効果がないと判断した攻魔官たちが、アスタルテを目がけて弩砲を撃った。小型の投槍を撃ち出す攻城兵器だが、その鏃に呪力をこめることで魔族に対する強力な武器となる。獣人や吸血鬼に対してすら一撃で致命傷を与えるため、その使用が条約で制限されているほどだ。鈍色に輝くその投槍が、銃弾に匹敵する速度で人型の眷獣を襲った。
そして、雨粒のようにあっさりと弾き飛ばされた。
その信じられない光景に、攻魔官たちは愕然として動きを止める。
オイスタッハだけが穏やかに笑っている。
魔力の塊である眷獣は、より強大な魔力をぶつけることでしか傷つけることができない。
しかし今のロドダクテュロスは、その魔力を帯びた攻撃をすべて無効化し、反射するのだ。
もはや誰もあの眷獣を――そして、その宿主であるアスタルテを止められない。たとえ真祖の眷獣をもってしてもだ。
攻魔官たちは抵抗を続けていたが、最大の武器を無力化された彼らに勝機があるはずもない。
アスタルテの眷獣が、圧倒的な膂力をもって彼らを殲滅する。

それは戦闘とすら呼べなかった。まさしく一方的な蹂躙だ。

「ふむ、いい判断です」

人工生命体のアスタルテに命令を出しているのが、オイスタッハだということに気づいたのだろう。生き残った数人の攻魔官が、オイスタッハを直接攻撃してくる。

「ですが、そのような鈍い技では私は倒せません　あの剣巫の娘に比べれば、まるで児戯ですね」

オイスタッハは壮絶な笑みを浮かべて、その攻撃を迎え撃った。

強化服によって増幅された筋力で金属製の半月斧を振るい、警備部隊の攻魔官たちを一蹴する。彼もまたロタリンギアで殲教師の肩書きを与えられるほどの祓魔師なのだ。その実力は、並の国家攻魔官を遥かに凌ぐ。

「――大方これで片づきましたか」

完全に沈黙した警備部隊の姿を見回して、オイスタッハは冷ややかに言った。

撒き散らされた銃弾や、眷獣の破壊の痕跡によって、戦場となったフロアは廃墟のような凄惨な姿へと変わっていた。六十人を超える精鋭部隊は、全員が重傷を負って倒れている。侵入者の二人以外に動いている者はない。

否。

戦場から少し離れた場所に、一人の少女が立っていた

武装はない。彼女が携帯しているのは、小さなノートパソコンだけだった。戦闘訓練を受けた人間の姿勢ではないし、魔力も感じない。戦闘要員でも魔族でもない、ただの人間だ。

たまたま通路の様子を見に来て戦闘に遭遇した――という雰囲気だった。

怯える少女の姿を眺めて、オイスタッハは怪訝そうに顔をしかめる。

彼女が身に着けている制服が、獅子王機関の剣巫の服によく似ていたからだ。

仲間という可能性は高くはないが、念のため無力化しておくべきか

そう考えて、オイスタッハは首を振る。

その必要はない。今さらあの剣巫が追いかけてきたところで、今のオイスタッハたちにはなんの障害にもならない。

それに、ここであの少女の命を奪うことにも意味はない。

放っておいても彼女はいずれ死ぬ。彼女だけではない。この島に住むすべての人々が。

そう。この咎人たちが造りし背約の地　紘神島は間もなく海に沈むのだった。

3

暁古城は、黄昏の薄闇の中で目を覚ました。

かすかに波の音が聞こえた。見覚えのない景色だが、海辺の公園にいるらしい。

コンクリートの上に横たえられているせいか、投げ出した腕に冷たい感触がある。そのくせ寝心地は悪くなかった。頬に心地好い温もりが伝わってくる。

「先輩……そろそろ起きてもらえませんか？」

不意に古城の頭上から声がした。どこか拗ねているような雪菜の声だ。

「悪い……あと五分」

夢を見ているような気分で、古城は素直に欲求を口にする。頭を包みこむような、柔らかな温もりから離れるのが惜しかった。が、

まったく、という薄い溜息が頭上から聞こえてきて、古城の頬がキュッとつねられる。

「調子に乗らないでください。こんなことをしている場合じゃないですから」

痛て、と古城は思わず瞼を開いて、思いがけない至近距離から自分を見下ろしている少女の存在に気づいた。

「ひ、姫柊？」

「ようやくお目覚めですか、先輩？　人をあんなに心配させておいて……いいご身分ですね」

いつになく皮肉っぽい口調で、雪菜が言う。

彼女の目元は、泣き腫らしたように真っ赤になっていた。

その表情を見て、古城はなにがあったのかを思い出す。製薬会社の研究所で古城たちはオイスタッハたちと遭遇し、そして雪菜を庇おうとした古城は戦斧の攻撃を受けたのだ。

心臓を切り裂き、胴体を粉砕するほどの一撃。
吸血鬼といえども、生きていられる負傷ではなかった。
「そうか……俺は死んでたのか」
「はい」
そのときの光景を思い出したかのように、雪菜が唇を噛んだ。そして、また泣きそうな顔になりながら、
「先輩が死んだあと、しばらくしたら傷が勝手に治りはじめたんです……飛び散った血も、まるで時間を巻き戻したみたいに戻ってきて……」
「で、そのまましばらく寝てたっていうわけか」
右肩を押さえて、古城は訊いた。半月斧に両断されたはずの肩には、かすり傷ひとつ残っておらず、ちぎれたはずの胴体も元どおりつながっている。
さすがに制服のシャツは破れたままだが、見た目が多少アナーキーなのを我慢すれば、その状態でも着られないというわけではなかった。
傷の具合を確かめるように指を動かしている古城を、雪菜はキッと睨みつけ、
「生き返るなら生き返るって、最初に言ってから死んでください。わたしがどれだけ心配したと思ってるんですか……！」
そう言って雪菜は、ぽかぽかと古城の頭を握り拳で殴り始める。

いやそんな無茶な、と反論しかけて、古城は自分が彼女に膝枕されていたことに気づいた。古城が復活して目覚めるまで、雪菜はずっと待っていてくれたのだ。

涙目の雪菜を見上げて、古城はやれやれと溜息をつき、

「心配かけて悪かったよ。だけど俺も知らなかったんだ。アヴローラのやつが言ってたのは、こういうことだったのか」

「アヴローラ？　先代の第四真祖が、なにを……？」

ゆっくりと起き上がる古城を見て、雪菜がきょとんと目を瞬く。

「ああ……真祖にとっての不老不死は、権能なんかじゃない。ただの呪いだって」

「呪い？」

「真祖は死ねない。心臓を貫かれても、頭を潰されても生き続ける。そう言われてもあんまりピンとこなかったんだが、ちょっとわかったような気がするな。死にたくなっても死ねずに何百年も何千年も一人きりで生き続けるのは……たしかに呪い以外の何物でもねーよ」

溜息のように呟く古城を、雪菜は黙って見つめていた。

不老不死とは言われていても、吸血鬼は完全に不死身というわけではない。特に魔力を制御する脳や、血液の循環を司る心臓は致命的な弱点である。

そこに深刻なダメージを受ければ、〝旧き世代〟といえども確実に死ぬ。

だが、第四真祖である古城の肉体は違った。

完全に破壊されていた心臓までもが再生し、流れ出た血すら、その大半が逆流して戻った。下手すれば伝説の中の吸血鬼たちのように、灰になった状態からでも復活しかねない。

「だからって、どうしてわたしを庇ったりしたんですか!?　呪いだろうがなんだろうが、必ず復活できる保証なんかないんですよ！　生き返れなかったら、どうする気だったんですか!?」

雪菜が、本気で怒っているような口調で古城を問い詰める。

「そうなんだけど、でもよかったよ」

「なにがよかったんですか!?」

「いや、姫柊が無事だったから」

古城が何気なく口にした言葉に、雪菜が奇妙な表情を浮かべた。泣くことも笑うこともできずに苦悶している、壊れた人形のような表情を。

「……て……よかったんです」

雪菜の唇が感情のこもらない言葉を紡ぐ。古城は戸惑ったように首を傾げた。

「え？」

「先輩は、わたしを庇ったりしなくてよかったんです。もう忘れてしまったんですか。わたしがここに来たのは先輩を殺すためなんですよ」

感情をなくしたような無表情で、雪菜が呟く。

なにを言ってるんだ、というふうに古城は眉をひそめた。

今の雪菜の雰囲気が、アスタルテと呼ばれていた少女の姿と重なる。造物主の命令に縛られた、哀しき人工生命体の少女の姿と。

「あの殲教師が言ってたことは本当です。わたしは使い捨ての道具です。ずっと前から気づいていたけど、認めたくなかっただけなんです。わたしは実の両親からお金で売られて、ただ魔族と戦うための道具として育てられてきたんです……だから、わたしが死んでも、誰も悲しまない。でも、先輩は違うじゃないですか……！」

「姫柊……」

うつむく雪菜が、泣き出すのをこらえるように古城に背中を向ける。

オイスタッハとの戦いの最中に、雪菜が動揺した理由を、古城はようやく理解する。

わずか十四歳で、ロタリンギアの殲教師をも圧倒する戦闘能力を持つ、獅子王機関の剣巫。降魔の槍を操り、魔族と戦うためだけに育てられた戦闘のエキスパート。

だからこそ、同じように戦いの道具として造られたアスタルテに、雪菜は自分の姿を重ねてしまったのだ。オイスタッハの言葉は、そんな雪菜の苦悩を的確に言い当ててみせた。それが彼女の動揺の原因だ。

雪菜をそんなふうに追い詰めたのは、もしかしたら自分なのかもしれない、と古城は思う。

彼女と出会ってからの数日間、第四真祖の力を手に入れてなお、ただの人間として生きようと足掻く古城の姿を、雪菜はずっと見続けていた。

戦う力を得るために、あたりまえの日常を捨てた雪菜。
そして誰よりも強大な力を与えられながら、つまらない日常を選んだ古城。
そんな古城の行動は、雪菜のこれまでの人生を否定するものに見えたのかもしれない。
だから彼女は言ったのだ。
古城ではなく自分が死ぬべきだったのだと
「……」
顔を伏せたまま動かない雪菜を、古城は途方に暮れた表情で眺めた。
そして、かすかな憤りを覚えた。
雪菜の気持ちもわからないでもないが、どう考えても彼女の理屈はおかしい。
古城の代わりに彼女が傷ついていいわけがない。なにを言ってるんだこいつは、と思ってしまう。けれど、今の雪菜を言葉で説得するのは、きっと古城には難しい。いわば古城の存在自体が、彼女を傷つけているのだから。
背中を丸めている雪菜の姿はあまりにも儚げで、このまま目を離すと消えてしまうようにも感じられた。まるで泣いている小さな迷子のようだ。
そのことに古城はますます苛立って、
「あのな、姫柊……ぎっ!?」
「え……？」

背中を向けていた雪菜の肩に、古城はそっと手をかけようとした。だが、蘇生したばかりの古城の肉体は、感覚が完全に戻りきってなかったらしい。立ちくらみを起こしたようにバランスを崩して、雪菜の上に倒れこむ。

まったく予想外の古城の行動に、雪菜が、ビクッと身体を硬くした。そんな彼女を抱きしめるような形で押し倒してしまい、あまりの出来事に古城も硬直。

かといって、今さら雪菜を放り出すわけにもいかず、古城は固まったまま動けない。

「あの……なにをやってるんですか、先輩？」

しばらくして、怒ったような低い声で雪菜が訊いてきた。古城はわざとらしく苦しげな声で、

「いや、さっき死にかけたときの後遺症が……」

「嘘ですよね？」

「あー……うん」

沈黙する古城を、雪菜が押し倒されたまま無言で睨んでいる。どうやって言い訳したものかと古城はしばし悩んだが、途中で少し気が変わった。

この際、少しぐらい怒らせてでも、雪菜に元気になってもらったほうがいいと思ったのだ。

そして古城は、身を硬くしている雪菜のうなじにそっと顔を寄せた。彼女の髪の匂いを思いきり嗅いでみる。首筋から伝わってくる異様な感覚に、雪菜が、ひっ、と悲鳴を上げた。

「姫柊は、いい匂いがするな」

古城は恐ろしく素直な感想を述べる。雪菜は、ぞくっと小さな肩を震わせながら、
「い、いきなりなにを言い出すんですか!?」
「髪もさらさらして気持ちいいし」
「やめてください！　ど、どこを触ってるんですか!?」
「意外に柔らかかったんだな、姫柊は。それにずいぶん軽いし」
「せ、先輩！　く、くすぐったいんですってば！」
「……やっぱりいい匂いがするよな」
「やはり変態だったんですか、あなたはっ……！」
目の端に涙を浮かべた雪菜が、ぐったりと力の入らない様子で叫ぶ。
古城は、そんな雪菜の耳元に唇を寄せたまま、
「ああ、そうだな。変態で結構だ。だからさ、こんな変態の代わりに、自分が死んだほうがよかったなんて言わないでくれ」
「そ……それとこれとは関係ないじゃ……あ、ああっ！」
反論しかけた雪菜の首筋に唇を押し当てて、古城は息を吹きかけてみる。古城の腕の中から逃れようと雪菜が必死で身体をよじるが、その抵抗は弱々しい。
「それに俺には、姫柊が道具として育てられたっていうのが全然わからねーんだよ」
「え？」

「だって姫柊は可愛いだろ」
「そんないい加減なことを言わな……あっ……やっ」
古城の吐息に首筋を舐められて、雪菜の全身から力が抜ける。いつの間にか彼女の白い肌が、ほんのりと薔薇色に紅潮していた。
「たしかに姫柊を育てたのは本当の両親じゃなかったのかもしれないけど、高神の杜の人たちがおまえのことを大切にしていたのは見てればわかるよ。剣巫の修行は楽しかったって、姫柊も自分で言ってたんじゃねーかよ」
「わかった……わかりましたから、先輩……もう許してください！　わたし、これ以上は……」
「あ、ああ」
雪菜に弱々しい声で訴えられて、古城は彼女を抱く手を少し緩めた。
完全に手を離してしまうと、脱力している彼女はそのまま倒れてしまいそうだったからだ。
「……」
雪菜はハァハァと荒い息をつきながら、無言のまま乱れた制服を直した。
それから潤んだままの瞳で、キッ、と古城を睨みつけて、
「今度こそはっきりわかりました。先輩は本っ当にいやらしい人だったんですね」
「いや、そんなことはないと思うぞ。それに今のは姫柊だって――」
「はい？　わたしが……なんですか？」

「……いや、なんでもない……です。すみません、調子に乗りすぎました」
「反省してください！　まったくもう……」
雪菜が乱暴な溜息をつきながら言った。
少々口うるさくて毅然とした、いつもどおりの彼女を見て、古城は思わず微笑を浮かべる。
そんな古城を、雪菜は半眼で睨み、
「なにをにやにやしてるんですか？」
「いや、姫柊はやっぱり可愛いなあと思って」
「……」
雪菜が無言で雪霞狼を構え、古城はハッと血相を変えた。
「ま、待て……その槍はやめろ」
「本当にいい加減にしてください！　わたしたちは、こんなことをしてる場合じゃないんですよ。どうして自分が死にかけたのか忘れちゃったんですか？」
古城の首筋に刃を突きつけたまま、雪菜が硬い声で言う。彼女自身、自分が怒っているのか照れているだけなのかわからず混乱しているらしい。これ以上は刺激しないほうがよさそうだ、と判断して、古城は表情を引き締める。
「オーケー、わかった。そうだったな……で、そういや、ここはどこなんだ？　あのオッサンたちはどこに行った？」

「ここはスヘルデ製薬研究所の裏手にあった公園です」
雪菜がゆっくりと槍を下ろした。
彼女が指さした古城の背後に、見覚えのある建物の輪郭があった。
「例の人工眷獣の攻撃でビルの警報装置が作動したので、眠ったままの先輩を運び出したんです。ロタリンギアの殲教師たちの行方はわかりません」
「そうか……気になるな。あいつら、妙なことを言ってたし」
古城が顔をしかめて呟いた。
宝を奪って、島を沈める。彼らはたしかにそう言っていた。
言葉だけを聞いてると馬鹿げた妄想にしか聞こえないが、オイスタッハがなにか明確な目標を持って、念入りな準備を行っていたのは間違いない。そして望んでいた力を手に入れた、というオイスタッハの言葉が真実ならば、彼らがすでに行動を起こしている可能性は高かった。
太陽はすでに水平線に沈んで、周囲は闇に包まれている。
古城がオイスタッハに殺されて、復活するまでにかかった時間は四、五時間ほど。それが、致命的な遅れでなければいいが、と思う。
「そうだ……ニュース……」
「え？」
携帯電話を取り出す古城を見て、雪菜が少し怪訝な顔をした。携帯でニュースが見られると

いうことを、彼女は知らないのかもしれない。しかし今は説明している時間がない。オイスタッハが騒動を起こしていたら、それがすでに事件として報道されている可能性は高いはず。

そう思って画面をのぞきこんだ古城が、うっと小さく息を呑んだ。

そこに表示されていたのは、無数のメールの着信通知。

差出人のほとんどは矢瀬と倫。

彼らからのメールは、キーストーンゲートが何者かに襲撃されたこと。そしてゲート内でバイト中だった浅葱が、今もそこに閉じこめられたままだということを伝えていた。

4

侵入者たちが通り過ぎたあとのフロアは、惨憺たる光景を見せていた。

六十人以上もの警備員が重傷を負って周囲に倒れ、流れ出した血の臭いが大気に満ちている。どうにか自力で動けるのは、十人ほど。しかし彼らにももはや戦闘能力はなく、負傷した仲間たちの応急手当で精いっぱいの状況だ。

一人無傷で取り残された浅葱は、半ば放心状態でその惨状をぼんやりと眺めていた。

浅葱の携帯電話が鳴り出したのは、そのときだ。侵入者との戦闘で、ゲート内の施設は甚大なダメージを被っていたが、携帯電話の中継局はどうにか無事だったらしい。

浅葱は、のろのろと機械的な動きで携帯の画面を確認する。
そこに表示された名前を見たとき、そんな彼女の瞳に不意に生気が戻った。
「――古城!?」
『浅葱……！　よかった！　無事か？』
電話ごしに暁古城の声が聞こえてくる。そのことにわけもなく安堵して、浅葱はあふれ出した涙を拭った。積もり積もった鬱憤を吐き出すように、上擦った声でまくし立てる。
「なんなのよ、もう……ちっとも無事なんかじゃないわよ！　公社が襲われて、人がいっぱい怪我して、建物もあちこち壊れて閉じこめられて……なんなのよ、あいつらは!?」
『襲撃してきた犯人を見たのか？　僧服を着たガタイのいいオッサンだな？　あとは人型の眷獣も』
「知ってるの!?」
浅葱が唖然として訊き返す。同時に猛烈な不安が押し寄せてきた。
どうして古城が、キーストーンゲートの侵入者の姿を知っているのか。もしかして浅葱よりも先に彼らと遭遇したとでもいうのか。だとしたら――
『ああ。そいつらのせいであやうく死にかけてた』
「死にかけた……って、古城、あんた……」
古城の呆気ない告白に、浅葱はただ絶句する。普段なら、つまらない冗談だと小馬鹿にして

やるところだが、あの侵入者たちの暴虐ぶりを見たあとでは、その言葉を信じないわけにはいかなかった。彼は間違いなく死にそうな目に遭ったのだ。

しかし古城は、いつもと同じ気の抜けたような口調で、

『とりあえず今は大丈夫だ。それよりも、そいつらはどこに行った？』

「下よ。ゲートの最下層に向かってるみたい」

浅葱も普段のペースを取り戻して言った。こんなひどい思いをしているのは、自分だけではない。古城がちゃんとわかってくれる。そう考えるだけで救われたような気分になる。

浅葱は、御守りのようにずっと抱きしめていたノートパソコンを開いた。

管理公社のサーバーにアクセスして、ゲート内の状況を確認する。

途中の隔壁をすべてこじ開けて、侵入者はすでに二十階まで到達していた。そこから先は、構造的に強固なエリアだが、彼らが最下層に到達するのはもはや時間の問題だろう。せいぜいあと二時間といったところか。

『最下層……か。そこになにがあるかわかるか、浅葱？』

「そんなの知らないわよ。最下層にはアンカーしかないはずだもの」

浅葱はキーボードを叩きながら答える。

『アンカー？』

「アンカーブロック。絃神島が、東西南北四基の人工島に分かれてることは知ってるでしょ。

それを連結してるメインケーブルを固定するための、まあ土台みたいなものよ」

『……それってなにか貴重なものなのか？』

古城が、腑に落ちない、というような口調で訊いてきた。はあ？　と浅葱は顔をしかめ、

「そんなわけないでしょ。ただひたすら頑丈なだけの鉄の塊よ。絃神島がバラけないように、人工島四基が受ける波風の衝撃やら振動やらを、全部まとめて受け止めてるの」

絃神島が四基の人工島に分割されているのは、万一の事故が起きたときに、島全体が水没するのを避けるためである。また、連結部に適度な隙間や柔軟性を持たせることで、暴風や高波が引き起こす不快で危険な振動を防いでいる。ちょうどテーブルの脚が四本で安定するように、四基の人工島は互いに支え合っているというわけだ。

それは逆に言えば、人工島の連結部が、絃神島全体にかかる負担をすべて支えているということでもある。

『……だったら、オッサンが言ってた至宝ってのはなんなんだ……？』

「至宝？　なによそれ？」

『知らん。だけど、あのオッサンたちはそいつを取り返すためにこの島に来たらしい……』

「そう言われても、そんな貴重なものを、誰が最下層のアンカーブロックの中に置いたりするのさ。取り出すことも見に行くこともできやしないわよ……？」

古城の言葉に奇妙な引っかかりを覚えて、浅葱が考えこむ。

至宝というのも気になった。厳格な戒律で知られた西欧教会の僧侶が、金品に目を眩ませて異国の魔族特区を襲撃するという状況は考えづらい。

いや、そもそも聖職者である彼らにとっての宝、とはなにを意味するのか

『浅葱？』

黙りこんだ浅葱を心配して、古城が呼びかけてくる。

浅葱は、迷いを振り切るように大きく息を吸って、

「待ってて、ちょっと調べてみる　―って、なにこれ!?　軍事機密並のプロテクトじゃない！」

パソコンの画面に表示された真っ赤な警告に、浅葱は驚き呆れた。その瞳にどこか愉しげな光が宿る。挑戦心を刺激されたのだ。

『調べられないってことか？』

「そんなわけないでしょう。あたしを誰だと思ってるのよ　－モグワイ！」

沈黙を決めこんでいた人工知能を、浅葱は短縮コマンド一発で呼び出した。ゆらり、と画面上にスーパーコンピューターの現身が現れる。

『人工知能使いの荒いお嬢だな。ホントは俺はこいつには手出しできないように造られてるんだがな　相棒の頼みじゃ仕方ねーか』

「わかってるじゃない。さっさとプロテクトをぶち破りなさい」

気怠い口調でぼやく人工知能に、浅葱は管理者権限の強制命令を叩きこむ。

その命令を執行する前に、一瞬だけ人工知能の気配が変わり、
『破るのはいいが……後悔するなよ』
どういう意味よ、と浅葱が眉を寄せた直後だった。
「え？　これって……そんな、嘘でしょ……」
映し出されたアンカーブロックの映像を目にして、浅葱はただ呆然と呟いた。

5

「そういうこと……だったのか……」
浅葱との通話を終えた古城が、携帯電話をゆっくりと下ろす。
ようやくすべての謎が解けた。なにもかもがつながった。
オイスタッハが絃神島に来た目的も。彼が、結界を破る能力を求めていた理由も。
古城はすべてを理解した。
たしかにあの男の言うとおりだ。彼らが目的を果たせば、この島はとてつもない災厄に襲われる。本当に島が沈む可能性すらある。
オイスタッハが目的としているのは、絃神島基底部にあるアンカーブロック　その中でもキーストーンの名を与えられた、主柱中央の要石だった。

「行きましょう……先輩。彼らを止めないと」
立ち上がった雪菜が、古城を見つめて言った。古城はそれを戸惑ったように見返した。
「止める？　俺たちがあのオッサンたちを……？」
「はい。藍羽先輩のお話だと、彼らが最下層に辿り着くにはもう少し時間がかかるんですよね。今ならまだ追いつけます。藍羽先輩に協力してもらえば、たぶん」
雪菜の表情は真剣だった。管理公社のメインサーバーにアクセスできる浅葱は、ゲート内の通路を完全に把握している。一方、オイスタッハたちは、真正面からバカ正直に、すべての隔壁をこじ開けて進んでいるらしい。浅葱に最下層までの最短経路を割り出してもらえれば、おそらく余裕で先回りすることができるはずだ。
「だからって、俺や姫柊が行ってどうするんだ……？」
正直な疑問が口をつく。雪菜が驚いたように動きを止める。
「浅葱のことは助けに行く。ついでに凪沙と、野良猫みたいな生活をしてるうちの母親も島の外に逃がす。だけど、俺にできるのはそこまでだ」
「先輩……なにを言ってるんですか。紗神市の特区警備隊には、あの人工生命体の人工眷獣は止められないんですよ」
「姫柊のほうこそ、本来の目的を見失ってんじゃねーよ。俺がオッサンを捕まえたかったのは、自分の正当防衛を証明するためだからな。けど、もうその必要はねーだろ」

古城が投げやりな口調で言う。

捜していた魔族狩りの犯人が、彼らのほうから現れてこれほどの大騒ぎを起こしたのだ。もはや古城たちが、彼らを捕まえなければならない理由はない。

むしろ特区警備隊の被害が増えて、オイスタッハたちの危険性が証明されれば、そのぶん倉庫街を破壊した古城の行為が、仕方なかったと認められやすくなるというものだ。

「俺には殲教師のオッサンを止めることなんてできねーよ……浅葱の話を聞いてそれがよくわかった。俺には理解できねーけど、あのオッサンがやってることだって、ある意味では正しいことなんだろ」

「だからといって、この島に住んでる人たちが危険にさらされてもいいということには――」

「ならない……のかもしれねーな……けど、どっちが正しいかなんて、俺には決められない。それを俺は選べない。俺は……それを選んじゃいけないんだよ！」

絞り出すようにうめく古城の言葉を、雪菜は黙って聞いている。

暁古城は、たしかに世界最強の吸血鬼の力を手に入れたのかもしれない。

それはつまり、帝王の力を手に入れたということに等しい。

帝王の決断は人々を動かす。帝王の決断が歴史を変える。

だが、その決断が正しいという保証がどこにあるというのか――？

たった一人で世界を動かすということは、その世界の結末をも一人で背負うということだ。

普通の人間に、そんな覚悟はできない。そんな決断の重さには耐えきれない。

オイスタッハとの戦いは、もはや彼と暁古城の私闘ではなくなった。

あのロタリンギアの殲教師は、絃神市という都市に戦争を挑んだのだ。

その戦いへの介入は、ただの高校生に許されることではない。

暁古城はもはや彼とは戦えない。今のオイスタッハに戦いを挑むということは、古城がただの高校生ではなく、ただ一人で国家の軍隊と同格といわれる存在――夜の帝国の支配者たる真祖だと、自ら認めたことになるからだ。

雪菜は、そんな古城の葛藤をすべて見透かしているかのように沈黙を守っていた。

「……」

やがて彼女は無言のまま、握っていた銀の槍を、くるり、と軽やかに回してみせた。

一回転と半分　銀色の穂先が、彼女自身のほうへと向けられる。

そして雪菜は、その刃を、制服の襟元からのぞく自分の首筋に押し当てた。

すっ、と音もなく槍が引かれた。

雪菜の肌に一筋の赤い線が走り、やがてぷつぷつと血の滴が浮き上がる。

「姫柊……な、なにやってんだ？」

古城は呆気にとられて、雪菜の奇行を眺めている。さっきまでの峻厳な表情が、まるで嘘のようなうろたえぶりだ。雪菜はそれを溜息混じりに見返して、

「先輩。わたしの血を……吸ってください」
静かな決意のこもった声で告げた。
古城は完全に固まっていた。なぜ雪菜がそんなことを言い出したのか理解できない。
「今まで人間の血を吸ったことがないから、眷獣たちは先輩のことを宿主だと認めてない――って、先輩は言いましたよね」
「あ、ああ。たしかにそうだけど……」
「だから、今ここでわたしの血を吸ってください」
「待てよ。それはただの仮説で、血を吸ったからすぐに使えるようになるとは……」
「可能性があるのなら、それで十分です」
「なんで俺がそんなことをしなきゃいけないんだよ。べつに眷獣なんか使えなくても……」
「困るんです。わたし一人の力では、今のオイスタッハ殲教師を止めることができませんから」
古城の言葉を途中で遮って、雪菜が言う。
「は？」
「雪霞狼と同等の魔力無効化能力を手に入れたあの眷獣を倒せるとしたら、もっと強烈な魔力の塊が――真祖クラスの眷獣の力が必要です。あの人たちを止められるのは、先輩だけなんですよ」

有無を言わせぬ雪菜の迫力に、古城は思わず絶句する。

「いや、だから……俺はあのオッサンたちと戦うつもりはないんだって。それは誰か、俺たちじゃない連中が考えるべきことで――」

「嘘です」

「は？」

一方的に決めつける雪菜に咄嗟に文句を言いかけて、しかし古城は反論の言葉を呑みこんだ。首筋から血を流す雪菜の瞳が、古城を優しく見つめていたからだ。

「本当はあの人たちを止めたいと思ってるはずです。先輩には、その力があるんですから……先輩だって、本心では真祖の力を思う存分に振るいたいと思っているんじゃないんですか」

「んなことねーよ。いつ俺がそんな面倒くせーことを望んだよ……!?」

「先輩が、この島の人たちを守りたいと思っているのなら、やりたいようにしてください。先輩一人でその責任を負いきれないというのなら、わたしも一緒に背負います」

「え……」

なんで姫柊が、と見つめる古城に、雪菜は静かに微笑んで、

「当然です。忘れたんですか。わたしは先輩の監視役なんですから」

涼しげな表情で言い切る彼女に、古城はしばし呆然と見とれた。

槍を地面に突き立てた雪菜が、制服の胸のリボンを解いた。

そのままボタンを外して、胸元をはだける。
白い肌と細い鎖骨。そしてほっそりとした首筋があらわになる。
そして雪菜はゆっくりと前に歩み出て、古城を見上げるような体勢になった。
見下ろす古城の視界には、彼女が身につけた清楚な下着と、控え目な胸の膨らみが否応なく飛びこんでくる。古城は軽く声を上擦らせ、
「ひ、姫柊……？」
「先輩は、さっきわたしのことを可愛いって言ってくれましたよね」
「あ、ああ……そういえば、そんな気が。でも、それとこれとは　」
「では責任をとって、それを行動で示してください」
「え……？　ええっ!?」
「それとも……やっぱり……わたしでは、だめですか？」
自分の胸元をそっと押さえて、雪菜が弱々しく呟いた。
その細い肩が、小刻みに震えていることに古城は気づいた。
羞恥……というよりは怯え、だろう。本当は雪菜も恐いのだ。吸血鬼に自らの血を差し出すということも、そして古城の前に無防備に肌をさらしていることも ―
彼女は獅子王機関の剣巫。古城を監視するために派遣されただけの攻魔師だ。
吸血鬼とは本来、彼女にとって単なる滅ぼすべき敵である。

それなのに彼女は、古城に自らの身体を捧げようとしている。
絃神島の人々を守るため、というよりも、むしろ古城のためなのだろう。古城がいつか己の決断を――第四真祖の力を振るわなかったことを後悔することがないように、と。
「せ、先輩……？」
古城に突然抱き寄せられて、雪菜が驚いたような声を出す。
震えている彼女の細い身体から、古城は、かすかな温もりと心地好い匂いを感じていた。清潔な髪の匂いと、ほのかな甘い体臭。そして、血の臭い――
犬歯が、否、牙が疼く。吸血衝動の引き金となるのは性欲だ。吸血鬼が血を吸う対象は、魅力的だと認めた異性だけ。雪菜はそれを知っていたから、彼女なりに精いっぱい、古城を誘惑しようとしたのだろう。が、
わかってねーよな、と古城は思う。
「あ、痛……先ぱ……い……」
雪菜は自分がどれくらい魅力的なのか。彼女と一緒にいる間、古城が吸血衝動を抑えるのにどれだけ苦労していたのか、さっぱりわかっていないのだ。
古城の牙が、雪菜の身体の中にそっと埋まっていく。
雪菜はきつく目を閉じて、その痛みに耐えている。雪菜の唇から弱々しい吐息が洩れる。
やがて古城の腕に抱かれた雪菜の身体から力が抜けていく。まるでひとつに融け合ったよう

な二人の影を、紅い月光が静かに照らしていた。

6

その場所は、光すら届かぬ海中深くに造られた、永遠の牢獄のようにも思われた。

キーストーンゲート最下層があるのは海の中。海面下二百二十メートルである。

高い水圧に耐えるための円錐形の外壁は、神話のバベルの塔にも少し雰囲気が似ている。

この階層の役割は、ヴァイオリンなどの弦楽器のヘッド部分、弦を巻き上げる糸巻きによく似ている。四基の人工島から伸びる連結用のワイヤーを調律することで、島全体の振動を制御し、無害化しているというわけだ。

ゲートの壁を経由して届いたワイヤーケーブルは、この最下層の支柱に巻きつけられている。約六万五千本の鋼線を縒り合わせて造られたケーブルの太さは、直径千六百五十ミリ。馬鹿馬鹿しく巨大な巻き上げ機が、それらを発電所並の出力のモーターで制御している。

圧倒的な鋼の質量と、爆発的な力を秘めた駆動機関の威圧感。そして建物を包みこむ強烈な水圧。それらがこの階層に漂う大気を、ねっとりと濃密なものへと変えていた。

その最下層を隔てている気密隔壁が、悲鳴のような軋み音を上げて、こじ開けられていく。

厚さ七十センチの装甲壁を、アルミ箔のように引き裂いているのは、虹色に輝く人型の巨獣

だった。

眷獣の胸の中央には、閉じこめられた宿主の姿が見える。

藍色の長い髪と、薄水色の瞳を持つ少女。人工生命体アスタルテだ。

彼女の背後から姿を現したのは、法衣をまとった屈強な体つきの男――

ロタリンギア殲教師ルードルフ・オイスタッハは、辿り着いたゲート最下層を、感慨深げにゆっくりと見回していた。

「命令完了。目標を目視にて確認しました」

自らの眷獣に取りこまれたままの姿で、アスタルテが告げる。

もともと抑揚の乏しかったその声が、今はもう完全に感情を失っている。

眷獣は異界からの召喚獣だ。それを実体化させるために、宿主は、自分自身の寿命を削り与えなければならない。眷獣の種類にもよるが、普通の人間なら、ほんの一瞬の召喚で、寿命のすべてを失うことになるといわれている。宿主の命は、眷獣にとっては単なる生贄にすぎないのだ。

それは宿主が人工生命体であっても例外ではない。

眷獣と共生するために調整されたアスタルテは、通常の人間よりも遥かに長い寿命を与えられている。だが、それすらもはや残り少ない。キーストーンゲートを攻略するために、眷獣の力を使いすぎたのだ。

「……」

しかしオイスタッハは、そんなアスタルテには一瞥もくれずに、最下層の中央へと歩み出る。

そこは四基の人工島から伸びる、四本のワイヤーケーブルの終端だった。

すべてのマシンヘッドを固定するアンカー。小さな逆ピラミッドの形をした金属製の土台である。

そのアンカーの中央を、一本の柱が、杭のように刺し貫いて固定している。

直径はわずか一メートル足らず。

だがそれは綾神島を連結するための、数百万トンもの荷重を今も支え続けているのだ。

黒曜石に似た質感の半透明の石柱——要石である。

「お……おお……」

オイスタッハの口から、悲嘆と歓喜の声が同時に洩れた。

全身を激しく震わせながら、彼はその場に跪く。石柱を見上げる彼の目からは、とめどなく涙があふれ出していた。そして彼の悲しみと喜びは、やがて荒々しい哄笑に変わる。

「ロタリンギアの聖堂より簒奪されし不朽体……我ら信徒の手に取り戻す日を待ちわびたぞ！アスタルテ！　もはや我らの行く手を阻むものはなし。あの忌まわしき楔を引き抜き、退廃の島に裁きを下しなさい！」

高らかな笑い声を上げながら、オイスタッハが従者たる人工生命体に命じた。

しかしアスタルテは動かない。実体化した眷獣の鎧に包まれたまま、無感情な声で告げる。
「命令認識。ただし前提条件に誤謬があります。ゆえに命令の再選択を要求します」
「なに？」
巨大な戦斧を握りしめて、オイスタッハが立ち上がった。アスタルテの命令拒否の理由に、彼も気づいたのだ。要石によって固定されたアンカーの上に、誰かがいる。
破れかけた制服を着た少年と、銀色の槍を持った少女。
「悪いな　さっきの命令は取り消してもらうぜ、オッサン」
第四真祖　暁古城が、気怠げな表情で笑っていた。

「西欧教会の〝神〟に仕えた聖人の遺体……」
キーストーンと呼ばれた石柱を、古城は、どこか憐れむように眺める。
その半透明な石の中には、誰かの〝腕〟が浮かんでいた。
ミイラのように干涸らびた、細い腕だ。
手首には、まるで傑刑にあったかのような無惨な傷跡が残されている。自らの信仰のために苦難を受け、命を失った殉教者の遺体だ。
それらは神の聖性が現世に顕現するための依代であり、それゆえに人々の信仰の対象となる。

強い聖性を帯びたその遺体は決して腐ることがなく、様々な奇跡を引き起こすという。

その聖人の遺体の一部が、石柱の中に封印されているのだ。

「聖遺物って言うんだってな。やっぱりこいつが、あんたの目的だったわけか」

古城は溜息のような声で言う。

浅葱が厳重なプロテクトを破って調べ上げた、紘神島最下層の秘密。それが、この聖遺物の存在だった。巨大な人工都市である紘神島は、聖遺物が引き起こす〝奇跡〟によって支えられていたのである。

「貴方たちが紘神島と呼ぶこの都市が設計されたのは、今から四十年以上も前のことです」

低く厳かな声で、オイスタッハが語り出す。

その口調には、数多くの信者を教え導くロタリンギアの司教に相応しい威厳があった。

「レイライン　東洋でいう龍脈が通る海洋上に、人工の浮島を建設して新たな都市を築く。それは当時としては画期的な発想でした。龍脈が流しこむ霊力は住民の活力へとつながり、都市を繁栄へと導くだろうと誰もが考えた。しかし建設は難航しました。海洋を流れる剝き出しの龍脈の力は、人々の予想を遥かに超えていたからです」

彼の言葉に、古城は無言でうなずいた。

紘神島が、本土から遠く離れた南の海上に建設された理由。それが龍脈――地球表面を流れる巨大な霊力経路の存在だった。

龍脈の上に築かれた土地には、霊力が満ちる。それだけで通常よりも強力な霊術、魔術の実験が可能になる。それは魔族の研究を行う魔族特区にとって、理想的な条件だ。龍脈上に都市を建設することが、人工島計画には必須だったのである。

「都市の設計者、絃神千羅はよくやりました。東西南北――四つに分割した人工島を風水でいうところの四神に見立て、それらを有機的に結合することで龍脈を制御しようとした。だが、それでも解決できない問題がひとつだけ残ったのです」

「要石の強度、だな……」

古城の呟きに、オイスタッハが重々しく首肯する。

「いかにもそのとおり。絃神千羅の設計では、島の中央に四神の長たる黄龍が　連結部の要諦となる要石が必要でした。しかし当時の技術では、それに耐えうる強度の建材を作り出すことができなかったのです。ゆえに彼は忌まわしき邪法に手を染めた」

「供犠建材……」

弱々しくうめいたのは、雪菜だった。

絃神島の設計者は、工学的に行き詰まった問題の解決手段として、呪術に頼った人柱。

建造物の強度を増すために、生きた人間を贄として捧げる邪法を使うことを思いついたのだ。

しかし龍脈とは自然界の気の流れであり、その荒々しい力は、人工島の連結部に過大な負担

を及ぼす。それを受け止める要石の役目には、生半可な呪術では耐えられない。神の奇跡にも匹敵するだけの力がなければ。だから、

「彼が都市を支える贄として選んだのは、我らの聖堂より簒奪した尊き聖人の遺体でした。魔族どもが跳梁する島の土台として、我らの信仰を踏みにじる所業――決して許せるものではありません」

静かに響く声で宣言し、オイスタッハが戦斧を構えた。

話は終わりだ、という意思表明だった。オイスタッハの目的は聖遺物の奪還だ。占城たちと無理に戦う理由は彼にはない。だから彼は占城の質問に答えたのだ。

それは同時に彼の正義の　彼の正当性の証明でもある。

彼はもういかなる説得にも応じない。彼の決意を覆す方法はもはやない。

「ゆえに私は、実力をもって我らの聖遺物を奪還します。立ち去るがいい、第四真祖よ。これは我らと、この都市との聖戦です。貴方といえども邪魔は許さぬ　」

「気持ちはわかるぜ、オッサン。絃神千羅って男がやったことは、たしかに最低だ」

それでも占城は、要石を守って司教の前に立つ。

「だからって、なにも知らずにこの島で暮らしてる五十六万人が、その復讐のために殺されていいってのかよ？　ここに来るまでにあんたが傷つけてきた連中も同じだ。無関係なやつらを巻きこむんじゃねーよ！」

オイスタッハの行動は正義なのかもしれない。あるいはやはり間違っているのかもしれない。だが、そんなことはもうどうでもいい。

ルードルフ・オイスタッハが、彼の決断でこの都市を破壊するというのなら――

暁占城もまた、自分の決断で彼を止める。そう決めたのだ。

「この街が贖うべき罪の対価を思えば、その程度の犠牲、一顧だにする価値もなし」

オイスタッハが冷酷に告げる。

その彼の前に立ちはだかったのは雪菜だった。殲教師の動きを牽制するように銀の槍を向け、凛と澄んだ声で叫ぶ。

「供犠建材の使用は、今は国際条約で禁止されています。ましてやそれが簒奪された聖人の遺体を使ったものであれば尚更……！」

「だから、なんだというのです、剣巫よ？　この国の裁判所にでも訴えろと？」

「現在の技術なら、人柱なんか使わなくても、人工島の連結に必要な強度の要石が作れるはずです。要石を交換して、聖遺物を返却することも――」

「貴方は、己の肉親が人々に踏みつけにされて苦しんでいるときにも、同じことが言えるのですか？」

オイスタッハの声から、隠しきれない怒りが滲み出る。

雪菜の背中に、一瞬だけ動揺が走る。剣巫として育てられた雪菜は、肉親の顔を知らない。

オイスタッハは、それを知った上で雪菜を挑発しているのだ。
「オッサン……あんたは……！」
激昂した古城が、オイスタッハに詰め寄ろうとする。
だがそれを、雪菜が左腕を伸ばして制止した。大丈夫、というふうに強気に微笑んでみせる。
古城を見つめる彼女の瞳には、不思議な穏やかさが宿っていた。
ふん、とオイスタッハが荒々しく息を吐く。
「もはや言葉は無益のようです。これより我らは聖遺物を奪還する。邪魔立てするというならば実力をもって排除するまで――アスタルテ！」
「命令受諾　執行せよ、〝薔薇の指先〟」
沈黙を守っていたアスタルテが、かすかな悲しみをたたえた声で答えた。
虹色の眷獣が輝きを増し、それに比例して撒き散らされる魔力が勢いを増す。
「結局こうなるのかよ……」
あーあ、と嘆息しながら、古城は笑った。
獰猛に歪めた唇の隙間から、牙がのぞく。瞳が眩い真紅に染まる。
「……けど、忘れてねえか、オッサン。俺はあんたに胴体をぶった斬られた借りがあるんだぜ。とっくの昔にくたばっちまった設計者に対する復讐なんかよりも先に、その決着をつけようか」

「貴様……その能力は……」

オイスタッハが表情を歪めた。

古城の全身を稲妻が包む。怒りに任せての暴走ではない。宿主の意志に呼応して、血の中に棲まう眷獣が目覚めようとしているのだ。

「さあ、始めようか、オッサン　――ここから先は、第四真祖の戦争だ」

雷光をまとった右腕を掲げて、古城が吼える。

古城の隣で寄り添うように銀の槍を構えて、雪菜が悪戯っぽく微笑んだ。

「いいえ、先輩。わたしたちの聖戦、です――！」

7

最初に仕掛けたのは、雪菜だった。

銀の槍を構えた剣巫が、閃光のような速度でアスタルテへと向かった。眷獣をまとった人工生命体の少女が、人型の巨体を操ってそれを迎撃する。

建物全体をも振動させるほどの壮絶な拳撃。

アスタルテの眷獣は、人型ではあるが生物ではない。その実体は濃密な魔力の塊だ。

その拳は最大級の威力を持つ呪砲の一撃に等しく、その蹴りは儀式魔術が引き起こす爆発を

も凌駕する。そして、その腕は分厚い特殊合金の隔壁すら引き裂いてみせる。
特区警備隊の攻魔官たちを、一撃で粉砕してきた圧倒的な力――
しかし雪菜は、その攻撃をしなやかに受け流した。
雪霞狼――七式突撃降魔機槍に刻印された神格振動波駆動術式が、実体化した眷獣の暴威を寄せつけず、逆にその肉体そのものを引き裂こうとする。
だが、その眷獣の肉体も同様の神格振動波をまとうことで、雪霞狼の斬撃に耐えていた。
魔族に対して致命傷を与えるはずの雪霞狼の攻撃は、眷獣の肉体を浅く傷つけるだけ。それすらも一瞬で再生する。
戦闘技術で勝る雪菜だが、相手を撃破するだけの攻撃力はない。
一方、圧倒的な破壊力を持つアスタルテも、雪菜の体術と槍技に翻弄されて、彼女に触れることができないでいた。彼女たちの戦闘は、完全な膠着状態だ。
だが、それこそが古城たちの狙いでもあった。
「おおおおッ――！」
青白い稲妻を撒き散らしながら、古城がオイスタッハに殴りかかる。
雪菜がアスタルテを引きつけている間に、古城が、人工生命体の主人であるオイスタッハを倒す。それが古城たちの考えた作戦だった。
古城は、魔力を反射するアスタルテの眷獣とは戦えない。かといって、雪菜の武器でもあの

眷獣は倒せない。

しかし命令を出しているオイスタッハを倒してしまえば、アスタルテは止まるはずだった。なぜならアスタルテ本人は、絃神島の住民たちを傷つけることを望んでいないからだ。彼女と交わした短い会話で、古城たちはそのことを確信していた。

だから古城は、彼女のためにも、ここでオイスタッハを倒さなければならないのだ。が、

「ぬぅん！」

オイスタッハは、その巨体からは想像もできない敏捷さで古城をかわし、逆に戦斧で反撃してくる。戦斧の風圧が古城の制服の袖口を切り裂き、その鋭さに古城は舌を巻いた。

速いし、重い。まともに当たれば、昼間と同じように古城の肉体は一撃で両断されるだろう。たとえ復活できたとしても、そのときにはすでにオイスタッハは聖遺物を奪還したあとだ。その攻撃を絶対に喰らうわけにはいかない

そんな古城の焦りを見透かしたように、オイスタッハが豪快に笑う。

「たしかに凄まじい魔力ですが、そのような無様な攻撃で私に触れることはできませんよ。まるで浅はかな素人同然の動きですね、第四真祖！」

「同然じゃなくて、本当に素人なんだよ！」

反論しながらも、古城は加速する。たしかに古城は武術の素人で、吸血鬼としてもほぼ無能、だが、多少のブランクはあるものの、バスケで鍛えたフットワークは健在だ。相手のマークを

かわして、ディフェンスの裏をかく。緩急と体重移動。そしてフェイント。自分よりも体格のいい相手との戦い方を、古城はよく知っている。

「ぬ……これは」

魔力で作り出した雷球を、鋭いパスのような感覚でオイスタッハへと投げつける。古城の感覚では遊びの延長線上にあるような、ふざけた攻撃。だがそれが殲教師の表情を強張らせた。

「先ほどの言葉は撤回です。認めましょう、貴方はやはり侮れぬ敵だと――ゆえに相応の覚悟をもって相手をさせてもらいます！」

「なに……っ!?」

オイスタッハの全身から噴き出した凄まじい呪力に、古城の顔から血の気が引いた。

殲教師がまとう法衣の隙間から、輝きが洩れる。法衣の下に着こんだ装甲強化服が、黄金の光を放っているのだ。その輝きを見た古城の瞳に激痛が走り、光を浴びた古城の肌が焼ける。

「ロタリンギアの技術によって造られし聖戦装備〝要塞の衣〟――この光をもって我が障害を排除する！」

オイスタッハの攻撃の速度が増した。装甲鎧が、彼の筋力を強化しているのだ。黄金の光に視界を奪われた古城は、ほとんどカンだけでそれを回避する。切り裂かれた頬から鮮血が散る。

「汚ェぞ、オッサン――そんな切り札をまだ隠し持ってやがったのかよ！」

古城が思わず非難の声を上げる。しかしオイスタッハの攻撃は止まらない。数倍に跳ね上が

った斬撃の威力とスピード。古城はなりふり構わず逃げ惑うしかない。

「先輩……!?」

防戦一方になった古城を見て、雪菜が叫んだ。しかし彼女も、アスタルテを抑えこむだけで精いっぱいの状況だった。それに鎧の力で強化された今のオイスタッハが相手では、おそらく雪菜でも勝ち目は薄いはず。

心配するな、というふうに雪菜に目配せして、古城がゆらりと立ち上がった。

オイスタッハの攻撃の手が止まる。古城が放つ異様な気配に気づいて、警戒したのだろう。さすがだな、と古城は笑う。そうでなければ困る。

「そういうことなら、こちらも遠慮なく使わせてもらうぜ。死ぬなよ、オッサン！」

「ぬ……!?」

オイスタッハが、本能的に危険を察知して後方へと跳ぶ。

彼を目がけて突き出した古城の右腕が、鮮血を噴いた。

「焔光の夜伯」の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ――！」

その鮮血が、輝く雷光へと変わる。これまでの稲妻とは比較にならない膨大な光と熱量、そして衝撃。倉庫街を焼き払ったのと同じ、第四真祖の眷獣だ。

しかし前回と違うのは、その光が無差別に撒き散らされるのではなく、凝縮されて巨大な獣の姿を形作ったことだった。

それが本来の眷獣の形。古城が完全に掌握した、第四真祖の眷獣の真の姿だ。

「疾く在れ、五番目の眷獣〝獅子の黄金〟――！」

出現したのは、雷光の獅子。

戦車ほどもある巨体は、荒れ狂う雷の魔力の塊。その全身は目が眩むような輝きを放ち、その咆吼は雷鳴のように大気を震わせる。

古城が、先代の第四真祖から受け継いだ眷獣は全部で十二体。

だが、雪菜の血を吸った古城を宿主と認めたのは、結局、この雷の眷獣だけだった。

しかし、それは予想できたことでもあった。

雪菜と出会ってからの数日間、この雷の眷獣は、なぜか異様なまでに活性化していたからだ。

倉庫街では、雪菜を守るために、自ら暴走することすらあった。

その理由も今ならよくわかる。この眷獣は最初に出会ったときから、雪菜に懐いていた。彼女の血の臭いに惹きつけられていたのだから――

「これが貴方の眷獣か……！　これほどの力をこの密閉された空間で使うとは、無謀な！」

雷の獅子の前足が、オイスタッハを目がけて振り下ろされる。

その攻撃は、彼をかすめただけだった。だが、それだけでオイスタッハの巨体が数メートルは撥ね飛ばされていた。

稲妻が生み出す衝撃波で装甲鎧が火花を散らし、雷の高温で戦斧の刃が融解する。

その攻撃の余波は、キーストーンゲートにも及んでいた。
撒き散らされた大電流が、ゲートの外壁を伝って周囲に拡散。設置されていた非常灯や監視カメラは、ひとたまりもなく吹き飛んだ。ワイヤーケーブルを固定している巻き上げ機も悲鳴を上げている。戦闘が長引けば、それらも無事では済まないはずだ。
「アスタルテ――！」
殲教師がついに従者を呼んだ。爆発的な魔力、自然災害にも匹敵する暴威を振るう古城の眷獣に対抗できるのは、彼女の眷獣〝薔薇の指先〟しか存在しない。そう判断したのだろう。
雪菜の攻撃を振り切って、眷獣をまとうアスタルテが古城の眷獣の前に立ちはだかる。
古城の意志を半ば無視して、〝獅子の黄金〟が攻撃を仕掛けた。巨大な眷獣の前足が、雷霆と化して、人型の眷獣を殴りつける。
その瞬間、アスタルテの眷獣を包む虹色の光が輝きを増した。
神格振動波の防御結界が、古城の眷獣の攻撃を受け止め、反射する――！
「うおおっ⁉」
「きゃあああっ！」
制御を失った魔力の雷が、暴発して天井を襲った。分厚いゲート最下層の天井が、あっさり撃ち抜かれて砕け散った。降り注ぐ瓦礫から逃げ惑いながら、古城と雪菜が悲鳴を上げる。
「くそっ……ダメか！　俺の眷獣でも、あいつの結界は破れないってのかよ……！」

激しい焦燥に襲われながら、古城はうめいた。

〝獅子の黄金〟の一撃を喰らっても、アスタルテの眷獣は無傷。このまま攻撃を繰り返してもおそらく結果は同じだろう。

そしてこれ以上の戦闘には、おそらく建物のほうが耐えられない。キーストーンゲートの外壁が破れたなら、水深二百二十メートルの水圧が一気に押し寄せてきて、古城たちを一瞬で押し潰すだろう。雪菜は間違いなく即死だし、古城だってどうなるかわからない。

「先輩……」

瓦礫に埋もれかけた古城を支えるように、雪菜がそっと寄り添ってくる。彼女の表情にも、疲労の色が濃い。あれほど強力な敵を相手に、生身で戦っていたのだから当然だ。

「悪い、姫柊。あいつは、倒せないかもしれない……！」

古城が、不甲斐ない自分自身に対する怒りに声を震わせる。

あと一歩、あと一歩だけでこの島を救える。それなのに、その一歩が届かない。

しかし雪菜は、そんな古城を見上げて、華やかに笑った。

「いいえ、先輩。この聖戦は、わたしたちの勝ちですよ」

えっ、と訊き返す間もなく、雪菜が古城の前に出る。

「――獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る」

銀色の槍とともに、彼女が舞う。神に勝利を祈願する剣士のように。あるいは勝利の預言を

授ける巫女のように。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

粛々とした祝詞とともに、雪菜の槍が輝きを放ち始める。

灰白いその光は、あらゆる結界を切り裂く神格振動波。だが、その形はアスタルテのものとは違う。細く、鋭く、まるで光り輝く牙のように――

「ぬ、いかん！」

雪菜の狙いに気づいたオイスタッハが、無防備な雪菜めがけて戦斧を投擲げようとする。

しかしそのオイスタッハを、古城の放った雷球が襲った。装甲鎧に守られた彼にとっては、致命的な一撃ではない。だが少なくとも彼の動きは、一瞬止まった。

その一瞬に雪菜が駆けた。しなやかな純白の雌狼のように、彼女は音もなく宙を舞う。

雪菜の速度にアスタルテの反応が遅れる。

互いに刻印しているのは、同じ神格振動波駆動術式。だが、巨大な眷獣の全身を結界で覆うアスタルテに対して、雪菜の槍は、その力をただ一点に集中していた。ただ細く、鋭く、相手の結界を貫くためだけに。

「雪霞狼！」

次の瞬間、銀色の槍が、アスタルテの防御結界を突き破って、顔のない人型の眷獣の頭部に深々と突き刺さる。そのときにはもう古城にも、雪菜の言葉の意味がわかっていた。

結界を突き破ったとはいえ、雪菜の槍は、巨大な眷獣にとってどれほどのダメージでもない。
しかしその槍は、今も眷獣の頭に深く突き立っている。
防御結界の及ばない、実体化した眷獣の体内へと。
金属製の長い柄が、まるで雷を呼び寄せる避雷針のように
「〝獅子の黄金〟ッ！」
古城の命令よりも疾く、光の速さで雷の眷獣が動いた。
雪菜はすでに、槍を手放して空中に跳んでいる。
そして彼女が残した槍の柄に、古城の眷獣が牙を立てる。
雷に姿を変えた眷獣の魔力が、〝薔薇の指先（ロドダクテュロス）〟の体内へと流れこむ。
魔力の塊である眷獣を倒す方法は、より強力な魔力をぶつけること
真祖の眷獣の圧倒的な魔力が、今度こそ一瞬でアスタルテの眷獣を焼き尽くし、消滅させた。
「アスタルテ……ッ!?」
眷獣の鎧を失った人工生命体の少女が、ゆっくりとその場に倒れこむ。
オイスタッハが、呆然とそれを見つめてうめく。
あらゆる結界を破壊するアスタルテの眷獣の消滅は、要石（キーストーン）から聖遺物を解放するというオイスタッハの野望が潰えたことを意味するのだ。

動揺する殲教師の眼前に、雪菜が音もなく着地する。
放心していたオイスタッハの反応が遅れる。
装甲強化服に覆われた彼の腹部に、雪菜が掌を押し当てた。
「響よ――！」
鎧を貫通して人体内部にダメージを伝える、剣巫の掌打。
ぐぼ、という苦悶のうめきとともに、オイスタッハの長身が折れ曲がった。そしてさらに、
「――終わりだ、オッサンっ！」
追い打ちのように、古城が殲教師の顔面を殴りつけた。
魔力も術もなにもない、真祖の能力などとは無関係な力任せの強引な一発。それゆえに、それはいかなる魔術でも防御しきれない攻撃だった。
屈強なオイスタッハの身体が、吹き飛んだ。何度かバウンドして、ついに倒れる。
彼はゆっくりと要石のほうへと手を伸ばそうとして、そして力尽きたように沈黙した。

8

キーストーンゲート最下層には、恐いくらいの静寂が訪れていた。
オイスタッハは動かない。たとえ意識を取り戻したとしても、彼にはもう戦闘を続ける意志

はないだろう。古城たちがアスタルテを倒した時点で、彼の敗北は決まった。
オイスタッハの聖戦は終わったのだ。
それでも雪菜は、いちおう彼の反撃を警戒したように身構えている。
「……」
古城は無言で周囲を見回す。ゲート最下層の被害は甚大だ。それでも要石は無事だったし、ワイヤーケーブルもほぼ無傷。ギリギリのところで島は守られた。
それを確認して、古城は雪菜と目を合わせた。
無意識に小さな微笑みが洩れる。
それは雪菜も同じだった。ほんの一瞬、控え目に咲く冬の花のような、美しい微笑が彼女の口元をよぎって消えた。
勝つには勝った。だが、それでなにが得られたというわけでもない。
大勢の人々が傷つき、そして要石の中には今も聖遺物が眠ったままだ。絃神島が抱えている歪みは、なにも解決していない。
それでも今の笑顔が見られたことで、古城は少しだけ満足した。それだけで、この戦いは、きっと無駄ではなかったのだと思えた。
それに、誰一人救えなかった、というわけでもない――
「……」

古城は、薄く溜息をついて、倒れているアスタルテを見下ろした。
ひどく消耗していたが、彼女はまだ生きていた。
古城の眷獣が放った雷撃の影響も、ほとんど受けていないようだ。
金属などの電気を通しやすい物質に囲まれていると、その内部にいる者は、落雷の影響を受けない。〝ファラデーの籠〟と呼ばれる現象だが、おそらくそれと同じことが、アスタルテと彼女の眷獣の間にも起きたのだ。
人間よりも遥かに長い寿命を与えられた、人工生命体の少女。
しかしこのまま眷獣を寄生させている限り、彼女の寿命はあと数日も保たない。
だがそれは、眷獣さえどうにかすれば、もっと長く生きられるということでもある。
倒れているアスタルテがまとっているのは、手術着のような薄い布だけ。
だが、傷ついた妖精のような今の彼女を、いやらしい気持ちで見る気にはなれない。彼女の姿はあまりにもか弱く、痛々しいものに思えるからだ。
まあ仕方ねーか、と古城は溜息をついた。そして雪菜のほうへと振り返る。
「姫柊」
「はい？」
「悪い。少しだけ……いいか？」
不思議そうに振り返る雪菜に歩み寄り、そう言って古城は彼女を力強く抱き寄せた。

雪菜の唇から、え、と弱々しい声が洩れる。

予想外の古城の行動にかなり狼狽していたようだが、かすかに身を硬くしただけで、彼女は抵抗しようとはしなかった。ぎこちないながらも古城のほうへと、そっと体重を預けてくる。

「せ、先輩……」

雪菜が戸惑うように身体を震わせる。彼女の柔らかさ。その温もり。かすかな汗と血の臭い。そのすべてを、古城は貪るように全身で味わっている。

雪菜が困惑する理由はわかる。

吸血鬼に血を吸われたからといって、すぐにどうなる、ということはない。吸われた人間は快感と恍惚を味わうことになる、ともいわれているが、それはただそれだけのことだ。

問題は、吸血鬼自身が、突き立てた牙から自分の血液を相手の中に流しこんだ場合である。

吸血鬼の血を受けたものは、〝血の従者〟に変わる。

必ずそうなる、というわけではない。月齢や吸われた人間の体調、呪的な抵抗力によっても確率は変わる。しかし吸血行為を繰り返していれば、いつかは相手を不死者にしてしまう。

そして互いを伴侶として、永遠の余生を共に過ごすことになる。

「先輩……ダメです……わたしたち、まだ、そんな……」

雪菜が、弱々しい声で古城をたしなめようとした。

しかし言葉とは裏腹に、抵抗しようとする素振りはやはりない。古城はそのことを不思議に

思いながらも、雪菜を強く抱きしめる。雪菜も古城の背中にそっと手を回し、

「――ありがとう、姫柊。もういけそうだ」

十分に吸血衝動が高まったところで、古城は雪菜からあっさりと手を離した。

「え……？　い、いけそう？」

雪菜がぽかんとした表情で古城を見つめ返す。ほんのりと赤く上気した顔が可愛らしい。

「あ、あの……先輩？」

しかし古城はそんな雪菜にさっさと背を向けて、倒れているアスタルテの隣に屈みこんだ。ほっそりとした人工生命体の少女をそっと抱き上げ、古城は彼女の剝き出しの首筋に牙を突き立てた。そして彼女の体液を吸い上げる。

長い長い沈黙のあと、古城はそっとアスタルテから唇を離した。

倒れているアスタルテの姿に変化はない。だが、やるべきことはすべて終えたはずだった。半裸のアスタルテを抱いたまま、古城はホッと息を吐く。

その隣では、雪菜がものすごい無表情のまま、落ちていた銀の槍を拾い上げていた。

「先輩……いったい、なにをやってるんですか？」

出会ったばかりのころと同じような、冷たい口調で雪菜が訊いてくる。

古城は、なんとなく背筋に悪寒を覚えながら振り返り、

「そ、それは、この子の眷獣を俺の支配下に置こうと思って。ほら、魔力の仕送りというか、

眷獣のレンタルというか……つまり、この子の眷獣が直接の宿主の命ではなくて、俺の生命力を喰って動くようにすれば、この子の寿命は今よりもずっと延びるだろ？」

「つまり彼女を救うために、血を吸った、というわけですか」

雪菜の声色には、隠しきれない冷たい怒りがこもっている。古城は、怒られている理由がわからないまま怖ず怖ずとうなずき、

「そ、そういうこと。眷獣の支配権を奪い取るために、仕方なく。そう、仕方なく」

そう言って、自分の正当性を力説してみる。なにも間違ったことはしていないはずだった。むしろ褒められるべき行動のはずである。

しかし雪菜の表情は変わらない。むしろ完全に感情を消して、

「そうですか。でしたら、その前にわたしにいやらしいことをしようとしたのはなぜですか？」

「い、いや。べつにいやらしい気持ちじゃなかったんだが……つまり血を吸うためには、いろいろこっちにも準備があって――」

古城は頼りなく言い淀む。吸血衝動の引き金になるのは性的興奮だ。かといって、傷つき弱っているアスタルテの身体を触りまくるわけにもいかず、仕方なく雪菜に協力してもらったのだった。

「たしかに姫柊もそんなに色気があるタイプじゃないけど、替わりもいなかったし、アテ馬と

いうか、ちょっと手伝ってもらっただけというか」

「……アテ馬……ですか。替わりがいなかったから仕方なく……？」

うつむいた雪菜が、ぶるぶると肩を震わせ始める。それを見て古城は自分の失言を悟る。いくらなんでも今のは言い方が悪すぎた。しかし、ほかにどう説明すればいいのかわからない。

やがて氷のようだった無表情を崩して、雪菜がキッと眉を吊り上げた。

今にも泣き出しそうな、そのくせ怒り狂っているような顔で、

「先輩なんて、このまま海の底に沈んでしまえばいいんです！　バカ――っ！」

そう叫びながら、雪菜が壊れた雪霞狼を振り下ろす。

絃神島の最深部。海面下二百二十メートルの最下層に、第四真祖の悲鳴が響き渡る

9

絃神島南地区の住宅街。九階建てのマンションの窓辺に、一人の少女の姿があった。

少し未発達な印象を残した十代前半の少女――

暁凪沙である。

彼女が身につけているのは、パジャマ代わりの薄いシャツだけ。

銀色の月光が布地を透かして、ほっそりとした彼女の肢体を浮き上がらせている。

ドロした髪は意外に長い。腰近くまであるだろう。
そのせいか、結い上げた普段の姿とは印象が違う。いつもの快活な雰囲気はなりを潜めて、あどけない顔つきに大人びた静けさが漂っている。
開け放った窓から吹きこむ海風が、彼女の長い髪を音もなく揺らしていた。
彼女が見ているのは、紘神島の中心に立つ逆ピラミッド型の建造物。キーストーンゲート。それは島内でもっとも高い建物であり、この窓辺からもよく見える。
暁凪沙は、その巨大建造物を静かに眺めている。
今夜の紘神島の夜は暗い。
明かりの消えたキーストーンゲートの威容は、夜空の闇に溶けこんでいるようにも思える。その姿が一瞬だけ、雷に撃たれたように青白く輝いた。
それを見た彼女の口元に、不思議な表情が浮かぶ。
まるでその輝きの正体を知っているかのような微笑だった。
「獅子の黄金……ようやくお目覚めか……」
凪沙の唇が、静かに言葉を紡ぐ。
いつもの彼女とは別人のような落ち着いた声だ。
しかし、その表情はどこか愉しそうである。
「あの坊やも、少しはやる気になったということか。ふふっ……そうこなくてはな……」

細めた瞳を、悪戯っぽく獰猛な光が彩る。ゆらめく焔に似た光が。
けれど再び風が吹き抜けたとき、少女の身体からは大人びた静けさも猛々しさも消えていた。
自分がそこにいた理由を忘れたように窓を閉め、彼女は、ふわ、と小さなあくびを洩らした。
寝ぼけた目をこすりながら、自分の部屋のベッドに戻る。
そこにあったのは、いつもの彼女と同じ、無邪気な少女の横顔である。
「ん、古城君……」
兄の名前を口癖のように呟いて彼女は目を閉じる。
幸せな夢を見ているような姿で、暁凪沙は眠りに落ちる。

終章

OTOO

姫柊雪菜は、夕陽が射しこむ部屋に一人きりで座っていた。

一人で暮らすには広すぎるマンションの一室。暁家の隣の七〇五号室。

家具もなにもない殺風景な部屋だが、雪菜が座るリビングの一角だけは、かすかな温もりと生活感がある。カーテンやクッション、紅茶の入ったマグカップ。古城と二人で買ってきたものだった。ほんの数日ですっかり見慣れたそれらとも、間もなく別れることになるのだろう。

そう思うと、なぜかひどく寂しい気がした。

「……」

窓の外には、黄昏の空が広がっている。

ここから見下ろす絃神市の姿は、特になにも変わっていない。この島の最深部で起きたあの戦いが、まるで嘘のような平和な風景だ。

オイスタッハ殲教師のキーストーンゲート襲撃事件が終わって、三日が経っている。混乱していた絃神市の住民たちも、今は少し落ち着いて、彼らの日常を取り戻したように思える。

結局、あれから特区警備隊（アイランド・ガード）が最下層に押し寄せてくる前に、雪菜たちは脱出した。だから、最下層に辿り着いた警備部隊の隊員たちが見たのは、とてつもない破壊の痕跡と、気絶したオイスタッハたちの姿だけだった。逮捕されたオイスタッハも、あえて古城や雪菜のことを口にしようとはしなかったらしい。

聖人の遺体奪還には失敗したものの、オイスタッハの行動は世界的な騒動へと発展した。

聖遺物の奇跡を使って人工島を支える。そのような紘神市の施策に対して、西欧教会をはじめとするあらゆる組織や国家から非難が殺到した。同時に、オイスタッハに対する減刑嘆願も巻き起こった。日本政府としても、それを無視することは不可能だった。

結果、紘神市は二年以内に要石を、通常建材で造られたものに交換。現在使われている聖遺物は、ロタリンギアに返還することを公約した。

オイスタッハは国外追放処分に、そして人工生命体であるアスタルテは、主人の命令に従っていただけであるとして保護観察という扱いになった。実際の手続きはこれからだが、まずは妥当な結論だと世間では受け止められている。

暁古城は、何事もなかったかのように翌朝から普通に登校していた。

夏休み明け初日から学校をサボったことでカリスマ担任教師にこってり絞られ、さらに終わってなかった夏休みの宿題に追われて、軽く死にそうな目に遭ったらしい。

だが、それが彼にとっての日常なのだろう。

そんな退屈な日々こそが、世界最強の吸血鬼、第四真祖の力を使って彼が守ろうとしたものなのだ

「まったく……しょうがない人ですね……」

無意識にそう呟いて、雪菜はクスクスと含み笑いを洩らす。

自分でも驚くほど愉しげなその笑い声は、すぐに深い溜息に変わる。

雪菜自身も、間もなく日常に戻ることになるのだろう。

高神の杜での、見習い剣巫としての修行。過酷だが、戸惑うことも苦悩することもなく、心穏やかだが変わり映えのしない毎日。それが本来の雪菜の日常だ。

このまま古城の監視任務を続けるには、雪菜はあまりにも失態が多すぎた。

第四真祖の眷獣を暴走させて、倉庫街を焼き払った。

監視対象である第四真祖を、危うく目の前で殺されかけた。

戦いを拒む第四真祖を、けしかけて戦場へと連れ出した。

おまけに彼が眷獣を使えるようにと、自分自身の血を与えすらした——

どれひとつとっても、監視役としてはあるまじき振る舞いだ。

おまけに任務とは無関係の戦闘によって、獅子王機関の秘奥兵器である雪霞狼を大破してしまった。

適当に報告をでっち上げて誤魔化すことができるほど、雪菜は器用ではない。起きたことは仔細洩らさず獅子王機関に報告してある。

おそらく雪菜は監視役失格として、間もなく獅子王機関に呼び戻されることになるだろう。

謹慎程度で済めばまだいいが、攻魔師資格の取り消しや、獅子王機関からの除名処分が下ってもおかしくない。だがそれも、すべて雪菜自身の責任だ。自分の行動の結果なのだから仕方がない。それに雪菜は自分のやったことを後悔してはいなかった。

心残りがあるとすれば、暁古城とはもう一度と会えない、ということくらいだろうか。
頼りない彼のことが心配だった。自分が傍にいてあげないと、なにをしでかすかわからない吸血鬼なのだから――

「――！」

そのとき不意にインターホンのチャイムが鳴った。
モニタに映っているのは、宅配業者の制服を着ている男だ。獅子王機関の使いの者だろう。
雪菜は彼のためにロックを解除して、玄関に出る。しかしそのときにはもう宅配業者の姿は消えている。代わりにマンションの玄関先に、大きな荷物が置かれていた。
長方形のアルミケースだった。ギターなどの楽器を運搬するために使う、ツアーケースと呼ばれるトランクである。荷札の差出人は獅子王機関。宛先は、雪菜の名前になっている。
雪菜は困惑しながらも、そのケースを部屋の中に運びこむ。
留め金を外して、ケースを開ける。
そして雪菜は息を呑んだ。
ケースの中には、修理を終えた銀色の槍が、新品同様の姿で納められていた。

†

「いろいろあったが、結果的には予定どおり……ってことかい？」

夜の彩海学園高等部、誰もいないはずの教室に、一人の男子生徒の姿がある。

短い髪を逆立てて、ヘッドフォンを首からぶら下げた少年だ。

壁によりかかる彼の隣には、一羽の烏。

窓枠にとまったその不吉な鳥を相手に、少年は気安く話しかけている。

「かくして血の伴侶を得た暁、占城は眷獣一体を掌握。また一歩、完全なる第四真祖に近づいた、というわけだ。しかし、わからんな。うっかり街を焼き払うあんな化け物を、なぜわざわざあんたらが目覚めさせようとしてんのか……」

烏は黙って少年の言葉を聞いている。漆黒の羽根に覆われたその身体は、奇妙に滑らかで平坦だった。角度によっては、厚みのない、ただの折り紙のようにも見える。それは現実の鳥でない。呪力によって生み出された式神だ。

「だいたいタイミングが良すぎるだろう。どうせあんたらのことだ、ロタリンギアの殲教師が魔族狩りをしてたことも、やつの目的が聖遺物の奪還だということも最初からわかってたんだろ？」

少年が、非難するような口調で烏に問いかける。

「そんなとこにわざわざ正義感の強い見習い剣巫を、古城の監視役として送りこむ、なんて見え見えすぎるぜ。あの子が古城に血を吸われるのも、最初から計画のうちだったってわけだ。

まったく、あんな真面目な子にひでえ仕打ちをしやがる」

『……だが、おかげで第四真祖の覚醒は早まった』

烏が不意に口を開いた。嗄れた老人のような声で。

『我らが手を出そうと出すまいと、やつはすでにそこに存在する。ならばそれを制御する手札は一枚でも多いほうがいい』

「姫柊雪菜は、眠れる怪物の首につけられた鈴、というわけだ」

憐れむように嘆息して、少年は窓の外に視線を向けた。

「たしかに古城の性格で、あの健気な子を邪険にはできないだろうが……まさか彼女も獅子王機関が、自分を第四真祖の愛人にするつもりで送りこんだとは思ってないだろうな。叮嚀相に」

『この国に、夜の帝国の領主たる真祖が生まれることなど有史以来かつてなかったことだ。国を滅ぼさぬためにも、せいぜい上手く立ち回らねばな』

くくく、と烏が嗤うように喉を鳴らす。

冗談めかしたその口調には、しかし拭いきれない重苦しさが含まれている。

彼らにとっても、この計画は、大いなる災厄を招き寄せかねない諸刃の剣。火薬庫に火のついたライターを放りこむような気分の賭けだったはずだ。

しかしどうやら今のところ、事態は彼らの望むように推移しているらしい。

姫柊雪菜は、確実に暁古城との距離を縮めている。

『それにあの娘が哀れなだけとは限らんさ。帝王の伴侶とは、すなわち王妃ということだ』

「まあ、そうかもしれんな……俺としては、少々複雑な気分だが」

そう言って少年は、教室の中央に置かれた机を見る。そこは彼の幼なじみが座る席だった。暁古城の真の監視者たる彼が、こんな報告をしていることを知ったら、おそらく彼女は怒り狂うだろう。それはあまりゾッとしない未来だ。

そんな少年の葛藤に気づかぬように、烏が再び嘯った。

『さて、歴史の転換点に現れるという第四真祖。その出現が吉と出るか凶と出るか　暁古城。ときに西欧教会で暁の子といえば、堕天使ルシファーの異名だそうだが……ふ、面白い……』

神の遣いか、それとも地上を滅ぼす悪魔となるか――

そう言い残して、烏の姿が解けた。

ただの一枚の紙となり、ふわりと風に乗って舞い上がる。

暗い夜空に吸いこまれていくその姿を見送って、少年はうんざりしたように髪を撫でつけた。

「やれやれ……前途多難なことだな、親友」

どこか茶目っ気のある彼の呟きが、無人の教室に響いて消える。

†

暁古城は、学生食堂の端っこの、陽当たりのいいテラス席に突っ伏している。

宿題漬けの週末を乗り越えた月曜日の放課後。カフェテラス風の学生食堂は、売れ残った特売品のパン目当ての男子生徒や、練習前の運動部員たちで意外に賑わっている。

そんな彼らを横目に見ながら、古城は深々と溜息をつく。

「熱い……焼ける。焦げる。灰になる……つか、追々試ってなんだ。あのチビッ子担任、絶対俺のことをいたぶって遊んでやがるだろ！」

テーブルの上に広げた参考書を眺めて、誰にともなく訴える。

夏休みの最後に受けた追試の結果は、残念ながら、積もり積もった出席日数不足を埋め合わせるのに必要な点数には遠く及ばなかったらしい。おまけに夏休み明け初日の授業をサボったことを問題視され、結果的に下された処分が追々試である。絃神島を沈没の危機から救った代償がこれでは、あんまりではないか、と古城は思う。

唯一の救いと言えるのは、あの事件以来、妙に浅葱が親切なことだった

今日もわざわざ放課後居残って、追々試の勉強を教えてくれるのだという

キーストーンゲートの事件に巻きこまれていた彼女は、オイスタッハを止めて絃神島を救ったのが古城たちだということを知っている。結果的に浅葱にしてみれば、古城が、彼女のことを命がけで助けた、というふうに思えたのかもしれない。

実際のところ、あれは古城が勝手にやったことで、浅葱が恩を感じる必要はないはずだが、

勉強を教えてもらえるのはありがたい。

その浅葱は、飲み物を買うために購買部のほうへと出かけたところだった。

「……」

あたしが戻ってくる前にやっておけ、と彼女に言われた問題集から、古城は無意識に目を逸らす。

浅葱はものすごく成績がいいが、本人が天才肌なせいか、教え方はあまり上手くない。むしろ年下の雪菜の説明のほうがわかりやすかったくらいだ。

とはいえ、雪菜を頼ることはもうできない。

彼女は、自分が古城の監視役を解任されるだろう、と言っていた。おそらく高神の杜とやらに戻って、再び剣巫の修行を続けるのだろう。

古城にはそれを引き留める理由はない。彼女のような子が古城の監視をする、という状況がそもそもおかしかったのだ。

しかし、彼女の替わりの攻魔師が監視役として派遣されてくるというのは、どことなく不愉快な気分だった。気に入らない。

そして古城の知らないところで、雪菜がべつの任務につくというのはもっと不愉快だった。

彼女が一人で戦って傷つく姿を想像すると、胸の奥に重いものが沈むような不快感がある。

その腹立たしい気持ちの理由を説明できず、古城が悶々とうめいていると、

「試験勉強ですか、暁先輩……？　そこの公式、間違ってますよ」
突然、近くで聞き覚えのある声がした。少しつっけんどんで、そのくせ生真面目そうな声。
古城が驚いて顔を上げると、そこには夕陽を背にした雪菜が立っていた。
もちろん中等部の制服姿で、背中には黒いギグケースを背負っている。ケースの隅っこには、招き猫風のマスコット人形がちょこんと結びつけられていた。
「ひ、姫柊？」
「こんにちは、先輩。どうしたんですか、そんなびっくりした顔をして」
「いや……そのギターケースって、もしかして中身は……」
「はい、雪霞狼です。昨日、修理から戻ってきました」
「え……と、どうして？」
「先輩の監視をするのに必要だからじゃないでしょうか。これはもともと第四真祖と戦うための装備ですから」
雪菜はいつもの冷静な声で告げる。しかしその目は、少し嬉しそうに笑っていた。
古城は、困惑で頬を引き攣らせながら、
「それって、もしかしてこれからも、姫柊が俺の監視を続けるってことなのか」
「そういうことになりますね。実はわたしにも、そんな許可が出た理由はよくわかりませんけど……残念ですか、先輩？」

そう言って雪菜は、からかうような表情で、ふふっ、と笑った。
古城は苦笑しながら首を振り、
「いや。よかったよ……なんか、姫柊も元気そうだし」
「え？　わたしですか？　はい。わたしはべつになんとも……」
「でも、ほら。俺が公園で姫柊に、あんなことをしちゃったし」
「あんなこと……ですか？」
怪訝そうに首を傾げた雪菜の頬が、突然爆発したように赤く染まった。古城に自分の血を吸わせるために、彼女がやったことを思い出したのだろう。
「あ、いえ……あれは……できれば、忘れて欲しいんですけど……」
「そういうわけにもいかねーだろ。身体のほうは、なんともないのか？」
いちおう真剣な表情になって、古城が訊く。
吸血鬼に血を吸われるだけなら、たいした影響はない、とは言われている。
だが、万が一、ということがある。共に永遠を生きる覚悟もなく、異性を〝血の従者〟にしてしまったらそれは大問題だ。
しかし雪菜は、心配ない、とうなずいて、
「はい。いちおう検査キットで調べましたけど、陰性でした。月齢を計算して、あの日なら比較的安全だってわかってましたし」

「そ、そうか……まあ、姫柊が無事でよかったよ」
古城が安堵の息を吐く。雪菜は、はい、と微笑んで、
「すみません。心配させてしまって」
「いや……こちらこそなんていうか、悪かったな」
「せ、先輩が謝ることはないと思います。あのときは、わたしのほうからしてほしいと誘ったわけですし……」
雪菜が恥じらうように顔を伏せ、小声で言う。古城もひどく照れくさい気分で頭をかき、
「まあ、それはそうだけど。姫柊にも痛い思いをさせたしな」
「大丈夫です。あのときは少し血が出ただけで、先輩に吸われた痕も、もう消えかけてますし」
雪菜は自分の首筋に手を触れる。そこには、目立たないように小さな絆創膏が貼られているだけだった。それならよかった、と古城はうなずきかけて、
「――!?」
その全身が瞬時に凍りついた。
雪菜の背後の植え込みから、ゆらりとゾンビのように立ち上がる影があった。雪菜と同じ、中等部の制服を着た女子生徒。長い髪を結い上げた、活発そうな雰囲気の少女である。
「ふーん……古城君が、雪菜ちゃんのなにを吸ったって？」
低く怒りを圧し殺したような声で、少女が訊いてくる。

古城は青ざめた顔で声の主を見上げ、
「な、凪沙？　おまえ、どうしてここに……？」
「さっき購買部で浅葱ちゃんに会って、古城君が試験勉強してるっていうから、励ましてあげようと思ってきたんだけど。そしたら二人で、聞き捨てならない話をしてるみたいだったし。その話、もう少し詳しく聞かせて欲しいなあ、なんて」
暁凪沙が、攻撃的な笑顔を兄に向けてくる。吊り上げた唇の端が痙攣しているのは、怒りが頂点に達しているときの彼女のクセだ。
「ま、待て、凪沙。おまえはたぶんなにか誤解してると思う。なあ、姫柊」
古城が必死に妹を制止しようとする。その隣で雪菜も首を縦に振っている。
しかし凪沙は、古城たちの息の合った連携にますます怒りを深めた様子で、
「ふーん、誤解？　どこが誤解なのかな？　古城君が雪菜ちゃんの初めてを奪って痛い思いをさせておまけに体調を気遣っちゃったりしてる話のどこにどう誤解する要因が……？」
「だから、そのおまえの想像がもうなにもかも全部誤解なんだが……」
古城は途方に暮れた表情を浮かべた。
しかし凪沙に、本当のことを話すわけにはいかない。彼女は、古城が吸血鬼であることを知らないのだ。できればもうしばらくの間は、それを知らずにいて欲しい。
「それよりも、浅葱に会ったんだろ。あいつは、どこに行ったんだ？」

とにかく話題を変えようと、古城はなるべく冷静に訊き返す。
しかし凪沙は、冷ややかな口調で、
「浅葱ちゃんなら、さっきからずっとあたしと一緒に古城君の話を聞いてたけど？」
「え？」
古城はようやく、凪沙の隣に、もう一人の女子生徒が立っていたことに気づいた。
あまりにも見事に気配を殺していたせいで、彼女の存在に気づかなかったのだ。
制服を粋に着こなした、華やかな顔立ちの少女である。しかし今、その美しい容貌には、復讐の女神を思わせる冷たい怒りの炎だけが燃えていた。
「ま、待て、浅葱。おまえにはいつか説明しようと思ってたんだけど、これには込み入った深い事情が　ってか、なんでおまえが怒ってんだ？」
古城は咄嗟に全力で謝ろうと試みる。が、
「あんた、最低」
浅葱は無表情にそう言って、手に持っていた紙コップの中身を、容赦なく古城の頭にぶちまけた。酸っぱい匂いが立ちこめる。クランベリーソーダと赤ぶどうジュースだ。
「せ、先輩!?」
大流血したように赤い液体を滴らせる古城を見て、雪菜が慌ててハンカチを取り出す。その雪菜にも、浅葱は戦意を剝き出しに詰め寄って、

「あなたも。いい機会だからはっきりさせておきたいんだけど、古城とどういう関係なの？」
「わたしは暁先輩の監視役です」
雪菜が冷静に言い返す。物腰は一見穏やかだが、実は雪菜も武闘派である。二人の少女は、見えない火花を撒き散らしながら睨み合い、
「監視？　ストーカーってこと？」
「違います。わたしはただ先輩が悪事を働かないようにと思って――」
「そのあなたが、このバカを誘惑してどうするのよ!?」
「そ、それはそう……ですけど……」
心に疚しさがあるせいか、納得してしまいそうになる雪菜。
「違うだろ、姫柊。そこは否定しろ！」
古城は目元のジュースを拭いながら、思わず叫ぶ。
浅葱は、そんな古城を蔑むように冷ややかに眺めて、
「誰か、ここに淫魔が！　妹さんのクラスメイトに手を出す淫魔がいますよ――！」
「やめろ、浅葱！　少しは話を聞けっ！」
驚愕した古城は全力で立ち上がり、大声で騒ぎ立てる浅葱を黙らせようとするが、
「古城君のドスケベ！　変態っ！　エロっ！　いくらなんでも不潔だよ……！」
「や、やめてください、二人とも。たしかに暁先輩にはいやらしいところもありますけど――」

「凪沙もちょっと黙っててくれ。姫柊も、全然フォローになってねーし！」

大騒ぎする少女たちの声に惹かれて、周囲にいた生徒たちの視線が古城に集まってくる。

男子生徒たちの顔には羨望と嫉妬の表情が、女子生徒たちの顔には汚らわしい犯罪者を見るような侮蔑が浮かんでいる。背中に突き刺さる彼らの視線に、古城は思わず空を仰ぎ、

いっそ誰か俺を殺してくれ。

不老不死の肉体を呪いながら、決して叶えられることのない祈りを捧げる。

しかし彼は気づいていない。

世界最強の吸血鬼。

第四真祖、暁古城の苦難の日々の、これがほんの始まりであることに、彼はまだ――

あとがき

CGなんかなかった時代のテレビの心霊特番を見慣れていたせいか、妖怪や幽霊をちっとも信じない小賢しいガキだった私ですが、そのくせ異能の力を与えられた怪物に対する興味と憧れは、人よりだいぶ強かったような気がします。

私の勝手な想像ですが、怪物にはざっくりと二種類の成り立ちがあって、ひとつは犯罪者や英雄などの規格外の人間のイメージが一人歩きして形を与えられたもの。もうひとつは天災や〝死〟などの人知が及ばない現象への恐怖が実体となったもの。そして、しばしばその両者がひとつのキャラクターの中に混在していることがあって、そういう怪物に私はたまらない魅力を感じます。そう、たとえば吸血鬼のようなハイブリッドな怪物に。

ヒトに近しい存在でありながら、ヒトには制御不能な力を手に入れてしまった存在。彼らがなにを望み、どのように生きるのか。神話の時代から繰り返し描かれてきたテーマではありま

すが、いまだに彼らの生き様には強く心惹かれてしまうのです。

そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド1』をお届けいたします。

私にとって久々の新シリーズです。主人公の一人は世界最強の吸血鬼。ということで、うわ、なんというか、頭悪そうな話、という感じではありますが、内容的には、どストレートな学園アクションファンタジーになっております。ちなみに野球の球種でいうところのストレートは、立派な変化球の一種なんだそうで……なにはともあれ、お楽しみいただければ幸いです。

そしてこの作品はもうひとつ、制御不能な怪物を受け入れて、それを救おうとする人々の物語でもあります。これもまた多くの神話などで伝えられてきた類型ですが、私はその手の話が大好きです。人知を超えた怪物に立ち向かう者は、ときとして名もない少年や少女であり、彼らもまた後に英雄と呼ばれることになります。

彼らの武器は多くの場合、若さゆえの無謀な勇気と、そして愛情です。ラブです。だから本作の主人公たち二人が周囲の迷惑を顧みないただのバカップルに見えたとしても、それは仕方がないことなのです。せいぜいイチャイチャするがいいさ。

さて、本書の出版にあたっては大変多くの皆様にお世話になりました。

特に「第四真祖」というネーミングをはじめ、作品内容について数多くのアドバイスや示唆を与えていただきました古橋秀之先生、いつもありがとうございます。

そして本作のために素晴らしいイラストを用意してくださったマニャ子さま、ありがとうございます。これからもどうかよろしくお願いいたします。また、ご迷惑をおかけした方々、お世話になった多くの皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

それから新シリーズの一冊目を勇気をもって手にとってくださった読者の皆様にも、心から感謝いたします。本当にありがとう。

それから最後になりましたが。

二〇一一年三月十一日に、東日本大震災と呼ばれる大きな地震がありました。

このあとがきは、その数日後に書いています。

こうしている今も被災された方々の救助活動が行われていますし、原発の事故処理も続いています。連絡がとれてない友人が何人もいて、不安です。どうか一人でも多くの方が助かって欲しいと祈っています。そして皆が一日でも早く平穏な日常を取り戻すことを願っています。

この作品は、怪物と英雄の物語です。ですが自然災害と暴走した科学技術は、まぎれもない現代の怪物で、それに立ち向かう人々こそが真の英雄なのだと思います。

映画『スパイダーマン2』の中で登場人物の一人が言ってました。"I believe there's a hero in all of us"――英雄は、わたしたち全員の中にいる。

この作品は、怪物と英雄の物語です。こんな状況だからこそ、これを読んでくれた貴方に、ほんの一瞬でも安らぎと勇気を感じてもらえたら、それに勝る喜びはありません。

◉三雲岳斗著作リスト

「コールド・ゲヘナ」（電撃文庫）
「コールド・ゲヘナ②」（同）
「コールド・ゲヘナ③」（同）
「コールド・ゲヘナ④」（同）
「コールド・ゲヘナ　あんぷらぐど」（同）
「レベリオン　放課後の殺戮者」（同）
「レベリオン　拭殺校庭園」（同）
「レベリオン　炎を背負う少年たち」（同）

「レベリオン　彼女のいない教室」（同）
「レベリオン　楽園に紅き翼の詩を」（同）
「i・d・I　神使いたちの長い放課後」（同）
「i・d・II　seven」（同）
「i・d・III　滅びの王国」（同）
「道士さまといっしょ」（同）
「道士さまにおねがい」（同）
「アスラクライン」（同）
「アスラクライン②　夜とUMAとDカップ」（同）
「アスラクライン③　やまいはきから」（同）
「アスラクライン④　秘密の転校生のヒミツ」（同）
「アスラクライン⑤　洛高アンダーワールド」（同）
「アスラクライン⑥　おしえて生徒会長！」（同）
「アスラクライン⑦　凍えて眠れ」（同）
「アスラクライン⑧　真夏の夜のナイトメア」（同）
「アスラクライン⑨　KLEIN Re-MIX」（同）
「アスラクライン⑩　科學部カイメツ」（同）

「アスラクライン⑪　めぐりあい異世界」（同）
「アスラクライン⑫　世界崩壊カウントダウン」（同）
「アスラクライン⑬　さくらさくら」（同）
「アスラクライン⑭　The Lost Files」（同）
「M・G・H　楽園の鏡像」（単行本　徳間書店刊）
「聖遺の天使」（単行本　双葉社刊）
「カーマロカ」（同）
「煉獄の鬼王」（双葉文庫）
「海底密室」（デュアル文庫）
「ワイヤレスハート・チャイルド」（同）
「アース・リバース」（スニーカー文庫）
「ランブルフィッシュ①　新学期乱入編」（同）
「ランブルフィッシュ②　中間試験暴走編」（同）
「ランブルフィッシュ③　場外乱闘恋心編」（同）
「ランブルフィッシュ④　伝説崩壊編」（同）
「ランブルフィッシュ⑤　凶天使襲来編」（同）
「ランブルフィッシュ⑥　亡霊殲滅編（上）」（同）
「ランブルフィッシュ⑦　亡霊殲滅編（下）」（同）

「ランブルフィッシュ⑧　決戦前夜秘湯編」（同）
「ランブルフィッシュ⑨　大会開幕奇襲編」（同）
「ランブルフィッシュ⑩　学園炎上終幕編」（同）
「ランブルフィッシュ　あんぷらぐど」（同）
「ダンタリアンの書架1」（同）
「ダンタリアンの書架2」（同）
「ダンタリアンの書架3」（同）
「ダンタリアンの書架4」（同）
「ダンタリアンの書架5」（同）
「ダンタリアンの書架6」（同）
「ダンタリアンの書架7」（同）
「旧宮殿にて」（単行本　光文社刊）
「少女ノイズ」（同）
「少女ノイズ」（光文社文庫）
「絶対可憐チルドレン・THE NOVELS」（ガガガ文庫）
「幻獣坐　The Scarlet Sinner」（講談社ノベルズ）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒160 8326 東京都新宿区西新宿4 34-7
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「三雲岳斗先生」係
「マニャ子先生」係

■

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド1
聖者の右腕（せいじゃのみぎて）

三雲岳斗（みくもがくと）

発行　二〇一一年五月　十　日　初版発行
二〇一一年五月三十一日　再版発行

発行者　髙野　潔
発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一六〇-八三二六　東京都新宿区西新宿四-二十四-七
電話〇三-六八六六-七三〇一（編集）

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META + MANIERA）
印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

※本書は、法令に定めのある場合を除き、複製・複写することはできません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません
※定価はカバーに表示してあります

© 2011 GAKUTO MIKUMO
Printed in Japan
ISBN978-4-04-870267-6 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド1 聖者の右腕

三雲岳斗
イラスト／マニャ子
ISBN978-4-04-870267-6

世界最強の吸血鬼、第四真祖の力を手に入れながらも平穏な日常を願う高校生、暁古城。そんな彼の前に現れた「監視役」とは……!? 待望の三雲岳斗新シリーズ開幕!!

み-3-30 2090

アスラクライン② 夜とUMAとロカップ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3090-0

高校入学を明日に控えたその夜、留学中の兄から銀色のトランクが届けられた。そして僕と操緒の秘密を巡る、あまりにも賑やかな、高校生活が始まった――。

み-3-16 1123

アスラクライン③ やまいはきから

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3179-6

かわいい女の子に囲まれ始まった高校生活。だけど、一人は幽霊、一人は悪魔、そしてもう一人はサイボーグ!? 普通の高校生智春は、どこへ行ってしまうのか!!

み-3-17 1160

アスラクライン④ 秘密の転校生のヒミツ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3308-X

個性強すぎの美少女たちに囲まれて、刺激強すぎの高校生活を送る智春。今度の敵は過労と記憶喪失!? トラブルの連続に、ますます加速するスクールパンク第3弾!!

み-3-18 1221

アスラクライン⑤ 貴族の末裔で美少女という前評判を聞き

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3449-3

智春のクラスに交換留学生がやってくる。貴族の末裔で美少女という前評判を聞きつけて、盛り上がるクラスメイトたち。しかし彼女は……。人気シリーズ第4弾。

み-3-19 1276

電撃文庫

アスラクライン⑤ 洛高アンダーワールド

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3550-3

智春の前にまた新たな女の子が現れた!!
今度は小動物系美少女の沙原ひかり。美化委員の活動を通して親密な雰囲気になっていく二人だったが……。

アスラクライン⑥ おしえて生徒会長!

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN978-4-8402-3685-0

入学以来、めちゃめちゃな学校生活を送る智春は、その原因である行方不明の兄に会いに行くことを決意。そして兄の手がかりを握る人物を訪ねるが……!?

アスラクライン⑦ 凍えて眠れ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN978-4-8402-3842-7

洛高の二年生が修学旅行へ出かけた。留守中、佐伯兄から洛高と玲子のことを託された智春だったが……。美少女たちに囲まれた高校生活が思わぬ急展開!?

み-3-22　1426

アスラクライン⑧ 真夏の夜のナイトメア

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN978-4-8402-3934-9

アルバイトのため海辺のペンションに滞在中の智春たちだったが……。解き明かされていく二巡目の世界と、悪魔出現の謎。絶好調スクールパンク夏休み篇!

み-3-23　1469

アスラクライン⑨ KLEIN Re-MIX

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN978-4-8402-4118-2

機巧魔神や悪魔出現の謎を解く鍵を握る人物とは、操緒の姉の女子大生、水無神環緒だった!? 大好評人気シリーズ、新たな特技を身につけ暴走気味の第9弾!

み-3-24　1523

み-3-21　1374

み-3-20　1314

電撃文庫

アスラクライン⑩ 科學部カイメツ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867088-3

水無神環緒が語る〝一巡目の世界〟の秘密。執拗に智春たちを狙う鳳島氷羽子。急速に非在化する奏――。物語は怒涛の急展開!! 人気シリーズ第10弾!!

み-3-25　1603

アスラクライン⑪ めぐりあい異世界

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867267-2

鋼色の機巧魔神との戦闘に敗れ、一巡目の世界へと飛ばされた智春。異界の街で彼が出会った人物は!? そして「魔女」と呼ばれる美少女が現れて……。

み-3-26　1663

アスラクライン⑫ 世界崩壊カウントダウン

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867763-9

人間化した奏と、高校生の姿に美しく成長したアニア。そして大破した機巧魔神《黒鐵》の中から、操緒を救い出す方法を知る人物が現れて……!?

み-3-27　1749

アスラクライン⑬ さくらさくら

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-868141-4

二巡目の世界へと帰還した智春たち。しかしここにも、世界崩壊の予兆が!? 非在化を始めた世界を前に、操緒と智春が選んだ最後の決断とは……!?。

み-3-28　1851

アスラクライン⑭ The Lost Files

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-868334-0

夏目智春が謎の失踪を遂げてから数ヵ月。智春の義理の妹・苑宮和葉が、洛高に残された記録（ファイル）から知った、智春の隠された記憶とは――

み-3-29　1902

電撃文庫

俺の妹がこんなに可愛いわけがない

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ
ISBN978-4-04-867180-4

「キレイな妹がいても、いいことなんて一つもない」妹・桐乃と冷戦状態にあった兄の京介は、ある日突然、桐乃からトンデモない〝人生相談〟をされ……。

俺の妹がこんなに可愛いわけがない②

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ
ISBN978-4-04-867426-3

「責任とりなさいよ！」とある理由で桐乃を怒らせた京介に下った指令（人生相談）とは、『夏の想い出』作り。どうも都内某所で、なんたらとかいう祭りがあるらしく……。

俺の妹がこんなに可愛いわけがない③

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ
ISBN978-4-04-867758-5

お互いの書いた小説で口論になった桐乃と黒猫。ところが何を間違ったのか、桐乃の書いた「ケータイ小説」が絶賛されて、近々作家デビューすることに……!?

俺の妹がこんなに可愛いわけがない④

伏見つかさ
イラスト　かんざきひろ
ISBN978-4-04-867934-3

沙織が開いた桐乃のケータイ小説発売記念パーティに招かれた京介。そこには何故かメイド姿の桐乃がいて……。そして、桐乃の〝最後の人生相談〟とは――？

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑤

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ
ISBN978-4-04-868271-8

「じゃあね、兄貴」――別れの言葉を告げ、俺のもとから旅立った桐乃。……別に寂しくなんかないけどな。〝先の読めないドラマチックコメディ、第5弾！

ふ-8-10	1876	ふ-8-8	1803	ふ-8-7	1744	ふ-8-6	1696	ふ-8-5	1639

電撃文庫

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑥

伏見つかさ／イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-868538-2

あやせから新たな相談を受けたり、友人の赤城とアキバ巡りをしたりと、いつもの（？）騒々しい日常が戻ってきたかと思いきや……沙織の様子がおかしい!?

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑦

伏見つかさ／イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-870052-8

「――あんた、あたしの彼氏になってよ」桐乃の思わぬ〝告白〟に、京介は――？シリーズ最大級の山場（？）を迎える、ドラマチックコメディ第7弾!!

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑧

伏見つかさ／イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-870486-1

「私と付き合ってください」新たな局面を迎えた恋愛模様。黒の予言書『運命の記述』に秘められた少女の〝願い〟とは!? 兄妹の関係にも、一大転機が訪れる――？

これでいいのだ×ばと！

上月司／イラスト／むにゅう

ISBN4-8402-3559-7

見た目は極悪不良な高校生、日野秋晴。そんな彼が編入したのは、執事さんやメイドさんを本気で育てる専科だったりして……!?

これでいいのだ×ばと！②

上月司／イラスト／むにゅう

ISBN978-4-8402-3687-4

見た目小学生な先輩が胸に秘める悩みとは……？　執事を目指す、見た目極悪（でも実はビビリ）な日野秋晴のお嬢様&メイドさんまみれな日々をお楽しみあれ♡

ふ-8-11	1938	ふ-8-12	2031	ふ-8-13	2122	こ-8-7	1323	こ-8-8	1376

電撃文庫

れでぃ×ばとる！③

上月 司
イラスト／むにゅう

ISBN978-4-8402-3841-0

夏休み。しかし休みとて従育科は試験があるわけで、秋晴は試験でセルニア宅にお泊まりする事になったわけで!?　執事候補生×お嬢様ラブコメ第三弾ですっ♪

こ-8-9　1425

れでぃ×ばとる！④

上月 司
イラスト／むにゅう

ISBN978-4-8402-3941-7

「ねぇ秋晴、デートしましょう？」――腹黒幼馴染み・朋美の爆弾発言が、さらなる波乱を呼び起こす!?　恋の逆鞘当て合戦がそりゃもう大過熱の第四巻登場っ!!

こ-8-10　1474

れでぃ×ばとる！⑤

上月 司
イラスト／むにゅう

ISBN978-4-8402-4121-2

秋も深まる二学期到来。秋といえば体育祭！　というわけで、朋美とセルニアは「秋晴と一緒に遊園地へ行く権」をめぐって体育祭で直接対決!?　第五弾ですっ。

こ-8-11　1526

れでぃ×ばとる！⑥

上月 司
イラスト／むにゅう

ISBN978-4-04-867017-3

とうとう朋美vsセルニアの直接対決に決着が……！　遊園地に遊びに行く権利を得るのは一体誰なのかッ!?　風雲急を告げまくる第6巻ですっ。

こ-8-12　1577

れでぃ×ばとる！⑦

上月 司
イラスト／むにゅう

ISBN978-4-04-867216-0

深夜の白麗陵に蠢く陰謀……今、あのお嬢様&従者が新たな罠を仕掛ける!!　さらに王女さまが大暴れしたり腹黒幼馴染みが大ピンチでもう大変な第7巻なのですっ。

こ-8-13　1650

電撃文庫

れでぃ×ばとる！⑧

上月 司
イラスト　むにゅう

ISBN978-4-04-867765-3

学園祭のミスコンで審査員をすることになってしまった秋晴。もちろん朋美とセルニアがエントリーしている訳で、ということは秋晴がどっちかを選ぶという訳で……!?

1751　こ-8-14

れでぃ×ばとる！⑨

上月 司
イラスト　むにゅう

ISBN978-4-04-868011-0

二人っきりで雪山遭難したり、セルニアに「してあげる」ことになったり、四季鏡姉妹がやる気を出してしまったり!?　あっちこっち大混乱な第9巻ですっ！

1821　こ-8-15

れでぃ×ばとる！⑩

上月 司
イラスト　むにゅう

ISBN978-4-04-868274-9

アキバ系王女様ピナ、生粋の英国令嬢セルニア、さらにドジっ娘メイド早苗とまであんなことやこんなことを!?　お嬢様&メイドさんと逢い引き3連発な最新巻ですっ！

1879　こ-8-16

れでぃ×ばとる！⑪

上月 司
イラスト／むにゅう

ISBN978-4-04-868394-4

秋晴の次なる試練（?）は、朋美とセルニアによる下着試着勝負の審査員で……!?　TVアニメ絶賛放送中！　〝れでぃー〟と〝ばとらー〟の最新巻登場ですっ！

1909　こ-8-17

れでぃ×ばとる！⑫

上月 司
イラスト／むにゅう

ISBN978-4-04-870489-2

自身の気持ちを認めたセルニアと朋美は、ついに秋晴へ、禁断の告白を!?　さらに大地までも敢行し……！　クライマックスまっただ中、告白だらけの第12巻、登場ですっ！

2123　こ-8-19

電撃文庫

シロクロネクロ

多宇部貞人
イラスト／木村樹梨

ISBN978-4-04-870268 3

美少女屍霊術師（ネクロマンサー）・高峰雪路の手でゾンビとして蘇った普通の高校生・不二由真。強い想いを糧に蘇った彼の未練とは「一度でいいから女の子と〝えっち〟してみたい」という願いで……!?

シロクロネクロII

多宇部貞人
イラスト／木村樹梨

ISBN978-4-04-870490 8

街を騒がす「奇跡の宝石盗難事件」。そんな中、由真はえっちな妄想を楽しんでいた。その裏では盗まれた宝石を巡りシロネクロ協会とクロネクロ幹部が動き出していて!?

煉獄姫

藤原祐
イラスト／Kaya8

ISBN978-4-04-868772-0

煉獄。毒気と力の満ちる異世界。その煉獄に魅入られた第一王女。彼女は塔の地下に幽閉されている。呪われた子として、同時に王家直属の殺し屋として……。

煉獄姫 二幕

藤原祐
イラスト Kaya8

ISBN978-4-04-870236-2

殺人衝動を抱えて彷徨う青年。アルトの前に再び現れる少女。フォグに微笑みかける【妹】。煉禁術によって造られた偽りの人間たちが匍都に蠢き、そして……。

煉獄姫 三幕

藤原祐
イラスト／Kaya8

ISBN978-4-04-870488-5

瑩國公式第一王女マーガレットの婚約者である惠國王子が外交のため来訪する。フォグとアルトは彼らの警護役に任命されるが……。

ふ-7-25	2131	ふ-7-24	2066	ふ-7-22	1995	た-26-2	2132	た-26-1	2075

電撃文庫

雨の日のアイリス

松山 剛
イラスト／ヒラサトム
ISBN978-4-04-870530-1

ここにロボットの残骸がある。登録名称：アイリス。これは『彼女』の精神回路（マインド・サーキット）から抽出されて分かったその数奇な運命、そして出会いと別れの物語である……。

2134 ま-13-1

なれる！SE 2週間でわかる？SE入門

夏海公司
イラスト／ｉｘｙ
ISBN978-4-04-868605-1

きつい！　厳しい！　帰れない！　そんな3Kと戦うシステムエンジニアの過酷な日々を描く問題作。でも、ヒロインは年齢不詳のかわいい女の子なのです。

1965 な-12-6

なれる！SE 2 基礎から学ぶ？運用構築

夏海公司
イラスト／ｉｘｙ
ISBN978-4-04-868937-3

無事にＯＪＴを乗り越えた工兵が出会った女の子はなぜか立華と犬猿の仲で!?　とある携帯ＲＰＧのインフラをめぐって構築と運用の不倶戴天の戦いがはじまる！

2025 な-12-7

なれる！SE 3 失敗しない？提案活動

夏海公司
イラスト／ｉｘｙ
ISBN978-4-04-870181-5

とある企業から出入り禁止処分を喰らった社長に代わり、工兵が営業をすることに。しかも数千万規模の案件で競合は超大手企業ばかり。はたして勝算はあるのか!?

2069 な-12-8

なれる！SE 4 誰でもできる？プロジェクト管理

夏海公司
イラスト／ｉｘｙ
ISBN978-4-04-870528-8

とある出版社の本社移転のプロジェクトマネージャーを無茶振りされた工兵。迫る期限、ごねるベンダー各社を前に、未経験のＰＭ業務を完遂できるのか!?

2129 な-12-9

原作&アニメ&ゲームなど春香の魅力が詰まった至高の一冊、絶賛発売中！

グラビアパート

原作&アニメ版権の美麗イラストをはじめ、N's（能登麻美子×後藤麻衣×清水香里×植田佳奈×佐藤利奈）のグラビアインタビューなど、大増量ページ数で贈るビジュアルコーナー。春香の魅力をたっぷりご堪能ください。

ストーリーパート

原作小説の全話を徹底解説！　ストーリーの中に秘められた設定や丸秘エピソードなどもコラムで大紹介！

キャラクターパート

原作版とアニメ版の両方のビジュアルをふんだんに使用し、『乃木坂春香』の世界を彩る賑やかなキャラクターたちを徹底紹介！　いまだ世に出たことのない設定画などもお目見えしちゃうかも！

メディアミックスパート

TVアニメ第2期のレビュー&第1期のストーリー紹介、ゲームやコミック、グッズ化などなど、春香のメディアミックスの全てを網羅！

スペシャルパート

①五十嵐雄策インタビュー

原作者の五十嵐雄策氏が、気になる20の質問に答えてくれました！　原作誕生&制作の秘話がここに――。

②美夏ちゃん編集長が行く、出張版！

ゴマちゃこと後藤麻衣さんが大活躍した「電フェス2009」を、ゴマちゃん視点で完全レポート！　メインステージや公開録音の裏側だけでなく、会場内を見学した模様を収録!!

③しゃあ描き下ろし、ちょっとえっちな絵本

しゃあ&五十嵐雄策の両氏が描き下ろした、ちょっとえっちな美夏の絵本を本邦初公開！
ちびっこメイドのアリスも参戦して、大人に憧れる美夏が取った行動は――!?

ガ乃木坂春香ガ全テ

電撃文庫編集部 編

『乃木坂春香ガ全テ』
電撃文庫編集部 編
定価：1,680円（税込）　B5判／176ページ
絶賛発売中　　イラスト／しゃあ

電撃の単行本

※定価は税込(5%)です。

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、成田良悟(『バッカーノ！』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、川原　礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

●賞(共通)

大賞……正賞+副賞100万円
金賞……正賞+副賞 50万円
銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞 50万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞 20万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。
http://asciimw.jp/award/taisyo/

主催：株式会社アスキー・メディアワークス

好評発売中! イラストで魅せるバカ騒ぎ(バッカーノ)!

エナミカツミ画集
『バッカーノ!』

体裁:A4変形・ハードカバー・112ページ　定価:2,940円(税込)

人気イラストレーター・エナミカツミの、待望の初画集がついに登場!
『バッカーノ!』のイラストはもちろんその他の文庫、ゲームのイラストまでを多数掲載!
そしてエナミカツミ&成田良悟ダブル描き下ろしも収録の永久保存版!

注目のコンテンツはこちら!

BACCANO!

『バッカーノ!』シリーズのイラストを大ボリューム特別掲載。

ETCETERA

『ヴぁんぷ!』をはじめ、電撃文庫の人気タイトルイラスト。

ANOTHER NOVELS

ゲームやその他文庫など、幅広い活躍の一部を収録。

名作劇場 ばっかーの!
『チェスワフぼうやと(ビルの)森の仲間達』

豪華描きおろしで贈る『バッカーノ!』のスペシャル絵本!

※定価は税込(5%)です。

BACCANO!

画集